291.33-035ウ
1200500732977
133
035

×
複写

山の人生

大泉里石著

始

291.33
O.35

大泉黎石著

世の人生

大新社版

946
35

目次

上越アルプス……三國山塊の横顔……三
紅葉の中をゆく……片品川渓谷……一三
谷底の絃歌……一三
銀山平の今昔……二八
駒鳥の唄……鬼怒川渓谷……三一
六字の題目……四六
秋の夜の旅……五九
雪の中の浮世……八六
雪橇は走る……九四
利根の深渓……湯の小屋の一夜……一〇二

石塔を剃る……狸を食ふまで譚……一二五
鷲の復讐……一三八
蝮の罐詰……一四一
嵐の谷川嶽……一五三
奥谷川の秋……一六九
三國の處女雪……一七六
山を飛ぶ女……一八五
山の灯……二〇一
蝸牛の角……二〇九
白衣の女……二二四
吹雪に踊る人々……二三〇
狐を飼ふ兄妹……二三八

蝙蝠の糞……澤渡溫泉穴小屋の洞窟……二四一
白砂川溪谷……草津から花敷へ……二六一
山の獵奇……二七四
三原の花……二五〇

—目次終—

山の人生

上越アルプス

——三國山塊の横顔——

上越國境・谷川温泉部落から、谷川溪流を溯りつめて雄鹿澤の合流點に達すると、威嚇するやうな恐ろしい谷川岳の大絶壁が、そろそろ眉に迫つて來るのを感ずるのであらう。こゝまでは微かながらも、人跡を認め得るが、これから奥は、全く未知のまゝに置かれてゐる幽昧境で、二つの澤の、どちらを進むにも、まかり間違へば、命を棒にふるやうな危險が伴ふのだから、周到な準備と細心の注意を要する。

第一回の瀬ぶみとして、私は谷川部落の熊太郎といふ百姓爺さんに案内して貰ひ、この合流點から雄鹿澤の中程まで入つて引返し、第二回目は私一人、勇猛心を奮ひ起して、細芝澤へ進路を取つた。

これは谷川岳の南腹と、阿能川岳の北腹に挾まれ、眞暗い密林に掩はれた溪谷で、どん詰りの源頭まで一里半の兩岸は、苔ぐさの雫にぬれて滑らかな巖峭律峯の壁だ。合流點から入り込んで暫くの間は谷底に崩壞してゐる巨岩や、倒れ木の殘骸を、天然の飛石とし、鵲の橋とも心得て、跳び傳ひながら

右に左に横に縱に、溪流をかゞりゆけたから、さほど骨は折れなかつたが、河床の勾配が急になると水勢激しく、相次いで現はれる鳴湍飛瀑に、のべつ幕なしの行通遮斷を食ふのだ。山鳴りのやうな轟々たる音が聞えて、暗い前面に眞白い煙が噴きあがつてをれば瀧……この山里の人達は、瀧のことをセンといふ。どうも此の本谷はセンが多くていけねえ、なんて言ふ……瀧の下は淵で、淵の下は瀨だ。瀨が淺くて鈍ければ、時には徒涉して、對岸を瀧の上流まで還廻りする。谷奥に食ひ込んでゐる凍氷雪(meve)が溶けまじつた水だから、腰まで浸つて涉る時の冷さも、骨まで泌みて疼くが、瀨の水が深く速いために徒涉が出來ず、瀨の岸の横這ひをやる時の、手の指の切れるやうな苦痛は格別だ。苔ぐさを賴りに、岩壁に攀ぢ上り、手のひら足のうらを吸盤にして、宮守のやうにピツタリ匐ひつきながら、一寸二寸三寸と横さまにジリジリ進むのだが、滑り落ちないやうに、全身の重さを持たせてゐる指の先に、眞白い生毛のはえた蠟細工のやうな深山淡雪草が、瀧の飛沫に顫えてゐたり、一寸五分ぐらゐの山椒魚が、小さい眼玉をキヨロつかせてゐるのを見ると、ほんの瞬間ではあるが、危い藝當をやつてゐる自分のことを忘れる……尤も、こんなチツポけな山椒魚なんか、つかまへたところで、一尾七厘にしかならんが、素人眼にも、十兩や二十兩がものはあるヅと思ふやうな、素晴らしい花ぶりの山蘭や、畸異な枝ぶりの眞柏を見つけると、心から惜いといふ婆婆氣も出るし……人の影を見れば穴の中に隱れてしまふ筈なのに、どだい人の姿を見たことがないので平氣なのか、二尺にちかい大鮎が、ぞろぞろ、紺碧の淵に泳ぎまわつてゐる光景を見ると、慾氣のない物凄さに身が引緊り、壁鱗に掛けてゐる手足も、自ら震ふ。

甲羅を經たは化ける、と山の人達がいふ。物の話にも鮨の怪がある。窮陰凝閉した暗い潭に、こんな大きい奴が、心憎いほど悠々と鰭うつ樣を見れば、神秘な幻想を抱くほど、人間は臆病になるらしい。

紫いろの鷄冠から滴る露が、靜かな水面に微瀾を起してゐる。蒼黝い薄闇のなかに、明るく浮出てゐるのは、倒れ木の白骨に、點々とひらく眞紅の天狗茸。岩に這ふ桃色の大蛞蝓だ。

この谷を登り詰めて、谷川岳を阿熊川岳の鞍部に、這ひ上ることが出來るならば、と思つて、辛抱づよくやり通すだけの、冒險を覺悟してゐたが、それは大切な時間が許さぬことを知るに及び、谷詰めを打切つて、谷川岳尾根の三角點（一八四五米）を目指し、谷の左岸に攀ぢ登る工風をつけて、急斜面の密林にもぐり込んだ。軍隊手袋は擦切れる。草鞋はずたずたになる。顏は火のやうに燃える。激烈な勞働は、三時間にわたつて續けられた。上越國境の山には附物の、「藪くゞり」だ。天を掩ひ日光を遮ぎる濶葉樹……楢・水楢・栂・樅・白檜・黑檜・栃朴・白樺の原始林は、鳥の啼く音も聞

えず寂閑として、生茂る灌木矮樹を絡み合ふ山藤の蔓や蔦葛の深藪は足を踏入れる隙間もない。押切らうとすれば彈ね飛ばされるのだ。山の斜面が急峻に突立つてゐるので、藪を相手の悪戰苦闘は、お話にならぬほどひどい。歩測計にかけたら、三十分に一丁も捗らなかつたらうと思ふが、この暗道を死にもの狂ひで切ぬけ、丈なす熊笹の海に埋沒してゐる三角點を、捜しあてた時の歡びは大きかつた。背後では手の屆くところに、阿能川岳の横顔の輪廓が、Scäp だらけの嶮しい苦笑を見せてゐる。前面には上越アルプスの人氣者谷川岳の、「耳二ツ」。錐のやうに鋭い尖頭が、白雲のうへに衝出てゐる。戰慄すべき岩屏風は、荒削りの粗大面をひろげて、鼻の先で苦蟲を嚙み潰してゐるやうだ。この裝甲せる山の貌は、天神峠から眺めるよりも、こゝからは一層手近く、怕ろしいほど壯嚴な威容を以て人に迫る。東空に張出してゐる肩だ。

先年、私が遭難したのは！　早大山岳部・文理大山岳部・商大・慶大の學生達と隊を成して、清水隧道土合の西黒澤口から登り、あの東肩あたりに辿り着く頃、大雷雨に襲はれ山津波に追はれて、散りぢりに逃避する途上の崖から落ちた私は、左胸部の肋骨四枚に龜裂をうけて、十日間寢たつきりだつた。私はその時の慘憺たる光景を思出しながら、西肩の三角點（一八七六米）へ、岩間の熊笹を押しのけて搔分けて登り着いた。

大雷雨を冒して前進を企てた早大山岳部員二名と、案内者一名とが、危險に瀕して、脊負へる一斗五升の白米を棄て、命からがら越後土樽口へ逃げ下つたのは、この邊らしい。這ひ松の蔭に白山小櫻の可憐な花が咲いてゐる。風當りは強いが、こゝで暫く息を入れることにした。私は二つの谷の隔壁をなす馬の脊のやうな山稜の上の一點に尻を据えてゐるのだ。二つの谷とは細芝澤と赤谷川源流「オソロシ谷」だ。これが谷川岳とお隣の萬太郎山の南尾根に抱かれ、私の眼下に深く瞑く横たはつてゐる。

赤谷川溪最奥部落の川古溫泉から、本流を溯つて見た私は、この「オソロシ谷」の内陣を單獨で究めることの困難、いや不可能にちかい企てであることを知つてゐる。日本アルプスを歩きまわつてゐた頃、私は黒部谷の嶮岨に驚いて尻ごみしたことがあるけれども、これから見ると、二の足を踏むには足りないのみか、日本アルプスにも、これほど嶮絶した怪物のやうな、怪奇な外貌の峽谷は見當らぬやうだ。阿彌陀ケ瀧の上流に峽門をあけて、一里半ばかり迂曲しながら立續いてゐる岩壁に岩壁がいく段にも重疊し、眞暗い廊下をなしてゐるなかで、流木は坂落しに走つてをり、谷壁の腰（Socle）や裂隙に轉がつてゐる獸骨が朧ろに窺はれる。羚羊などが足を踏みあやまつて、墜死したものだらう

が、なかに人骨らしいのも見えるのは、岩茸とりや眞柏とりの慘死を物語るものではなからうかといふ。山林泥棒が强敵の鷹と闘ふ最中に、絶壁から落ちることは、まゝあるのだ。

この山間で「赤谷の茂さん」といへば、測量隊に傭はれて、三角點の石標かつぎまでやつた經驗もある山通だが、この峽谷の内部には足を踏み入れてゐない。延長僅かに一里半の谷だが、何處から入り込んでいゝかわからないのだ。峽門から奥を覗くと、氷のやうな暗風が、憤りを帶びて咆哮するやうな激流の音をつたへて、眞ツ向から吹きつける。そゞろ凄愴な感に打たれ、名狀しがたい懼れを抱きながら、足の蹙まるのを覺えてゐる矢先、暗がりから飛出した大蝙蝠の翼に、横つ面をひツぱたかれて愕然としたことがある。さうして引返さうとして、仙ノ倉山の東尾根について、牡丹のやうな華麗な花を競ふてゐる石楠の大群落に入り込んだ時のことなんだが、赤谷川支流の崖に、雲を吐いたり呑んだりしてゐる岫洞が目に留つたので、近づき寄つて中を覗くと、蓬頭垢面の獵師が一人、虎杖の葉を座蒲團代りに、端然と坐つてゐるんだ。山刀で筋目を刻みつけたらしい、面の平らな岩石の將棋盤に、汚れた將棋の駒を列べてゐる……パチリと駒を打つては、じツと考へ、パチリと打つては、また凝乎と考へながら、獨り將棋をさしてゐるのだつたが、私の姿を見ると驚いて獵銃を引寄せた。

「なんだ。人間か。」

「あつはつはつ。熊とでも思つたか?」

「あゝ。熊の出る場所だよ。氣をつけなくつちや危えぞ。俺ア二週間も、野郎が出て來るのを待つてるんだ。こゝで。」

「出ないのか?」

「どうも不思議だ。水楢の實も山葡萄もあるし、毎年こゝで水のみに出て來る奴を、擊捕るんだが、どうしたわけだか、姿を見せねえんだよ。退窟でいけねえから、一人で將棋さしてるんだ。熱心といふものは、恐ろしいな。二週間のうちに、將棋の腕前がグツと上つた。」

「はゝゝ。將棋ばかり强くなつても、熊が捕れなくちや、仕樣があるまい。」

「違えねえや。それにもう兵糧が盡きて、明日からは食ふ物がねえといふ騷ぎだから、家へ歸らうかと思ふんだが、女房に怒られるから、歸ることも出來ねえで弱つてるんだよ。」

私は笑ひながら、リュツク・サツクの中から、堅パンを出してやつたことがある。

頭上を翔んでゐる鷹の姿は悠長無心に見えるが、地に足をつけてゐる人心には油斷がない。太陽が燻りかけて、射る光が寒さうに顫へ、雲の徂來が、そろそろ忙しくなつて來る。と、その雲の色が、

光の加減で絶え間なく變化し、變化するに隨つて、群がり立つ山々の肌が、明朗に憂鬱に染め分けられる。神韻縹緲たる駒鳥の音律を孕んだ山飆が、ゆるやかに吹き上げて來る六千尺の脚の下に、眞白い山霧が湧き起つたかと思ふ間に、ひろがり擴がつて、オソロシ谷を掩ひ隱し、こちらの方へ葡ひ登つて來る。こいつに呑まれると事面到だ。嚙りかけの握飯を持つて、私は尻を擡げた。上州と越後の國境線を踏み、分水嶺をなしてゐる山梁づたひに、熊笹の浪を泳ぎながら、オソロシ谷の水源をかすめた。山の狀態によつては、一千米や一千五百米の下方からでも、溪水の音は聞えるものだが、何かに遮ぎられて、耳に手をかざしても聞えない。萬太郎山の頂上に辿り着くと頓に展望が利く。

眼界が開けると、心まで廣やかに、舒び暢びするものだ。天氣運がよければ、といつても決して惡い方ではないのだが、變幻定まりないのだ。山形縣の月山や、日本海まで見透せる筈なんだが、越後平野の一部分が、霞の彼方に覺束なく見えるばかり。右手の眼下に起伏する攢峯のあらかたは、漠々たる雲に包まれて、雲壑の景致は寒く心細い。上・信の空は可なり明るく、鼻先に尖塔形の頭頂を起隆してゐる仙の倉山（六千六百餘尺）を最前景として、上・信・越に跨る白砂山塊……大黑山・白砂山・苗場山・烏帽子岳・笠法師岳・岩菅山……が、山襞に殘雪を含んで蜒蜿連亘し、雄魁な背景を見せてをり、赤城・榛名は極小さく、東の空には、武尊・至佛の後に足尾山脈が望まれ、奥白根山が紫

紺色に聳えてゐる。遠岳近嶺がそれぞれの谷を擁して、鋒刃を立て列べ、眼のとゞく限ぎり、怒濤のやうに重疊する雲表の壯觀を、一眸の下に集めるのは、蓋し登山第一の爽快味ではなからうか？

愚談ではあるが、疊敷二枚ぐらゐの岩櫃山頂で、山上の景觀を心ゆくまで享樂しながら、携帶の燒酎をも、心ゆくまで玩味してゐるうちに、醉つてしまつて動けなくなり、大いに弱つたことがある以來、千疊敷の山頂であらうと、酒壜の栓をぬくことは、自ら固く禁じてゐるのだ……萬太郎山から屋根づたいに仙ノ倉山まで、一里半の降登は、やはり熊笹と灌木の深藪で、這ひ松や千本杉や眞柏にまじつて、代褐色の岩罅に、紅い美しい高嶺薔薇の花が、ちらちら、顔を出してゐる山嶺に立つたのは、午後二時頃の薄日に風が唸つてゐた。谷川溫泉部落を發足してから、およそ十時間の强行軍だ。濃綠の大森林に蔽はれた赤谷川支流の谷を隔てゝ、前面には大源山とその蔭に三國山の扁平な頭が望まれる。

嘗て上越アルプス中部連峯の縱走コースを開くべく、この山間の村々の有志家と共に、私は登山隊を組織した折のこと、降り止まぬ連日の霖雨を冒し、有志家達の引留めるのも聞かずに、この三國山から大源山にわたらうとして、濃霧に卷かれ、氷雨に叩かれ、散々な憂き目を見たことがある。

明朝は大源山から逆に三國山へわたり、三國峠に下つて、この氣まぐれな縱走コースを完成する心

組みなんだが、今夜はこの仙ノ倉の東尾根下の洞窟……熊捕りの獵師が將棋をさしてゐた岩穴に泊らねばならぬのだ。人間の臭ひを、少くとも登山者の臭ひを嗅いだことはなからう、と思はれる此の邊の山には山小屋といふものがないので、谷底の平地を見つけて、キャンプをするか、岩穴を探して雨露を凌ぐよりほかに、仕方がない。そのためには、餘分の苦勞と時間を費すのだ。道樂だから出來るやうなものだが、それほど高からぬ標高の山々でありながら、恐ろしく深いから、よほど地勢に明らかでない限り、單獨の縱走は迷兒になる虞れが充分ある。そんなことを考へながら、疲れた身を挺して、私は熊笹の海を、喬木帶の谷間へ、どしどし下り始めたのである。

紅葉の中をゆく

——片品川溪谷——

一

奥日光の雄峯……白根・金精・溫泉・燕巢・四郎・唐澤に圍まれてゐる菅沼・丸沼・大尻沼の紅葉する頃は、これをもつて世に誇る日光の鹽原や鬼怒もはや問題でないといはれ、沼の秋鱒の味は、深山の珍であると聞いたものだが、何さて罷り間違へば、寒冷身に泌みる海拔五千尺の丸沼湖畔の大森林に、野宿しなければならなかつたかも知れない。それとも知らず、外套なしの合服一着、野越へ山越へ押し登つて來て、辛うじて夜露を抱き寢の災難だけは免がれたやうな始末だから、風色の美は蓋し評判の如く、天下無双と申してよろしからうが、秋鱒の味などは思ひもよらず……もつとも只今は、子を孕んでゐる季節で、漁れないのか、獲られないのか……兎も角もお生憎さまと來た。そのうへ雨にまで見舞はれて、顫えながら丸沼の北八丁、湯澤の湯煙る舍へ別れを告げたのは、その旅の途

上で知合ひになつた紳士　T氏と、風來坊の私とである。

九月二十七日の朝だつた。あと二週間、いや、霜の都合によつては、あと一週間で、山も樹も悉く燃えあがる色艶に化粧を整へ、見渡すかぎり鮮やかな深紅の世界を顯じて、飛焔空を燒き、落光水を照し、圓形の沼は宛ら紅玉でつくり磨かれた大花鏡の蓋をひらくだらうといふのだが、樹木のなかでも、既にウルシやハゼやシラカンバを魁として、見ごとに色づき映えてゐた。幽寂な沼のまわりの巒峯に、濛々と湧く雨霧が匐ひくだつて、その紅い梢から梢に、眞白く流れわたる目覺ましい景色の中を、やゝ黄ばみかけた川柳や、桃色の實の淋しいマユミのあいだに、サルオガセの垂れさがつてゐる渚の坂路を登りつめ、大沼尻の上に出た私たちは、たゞ森として、小鳥の聲もきこえず影も見えぬ薄暗い山路を、小雨に濡れ、寒さに顫えながら、小川の谷沿ひ、三里たらずの白根溫泉に向つて、下り始めたのである。

昔はこれ海拔六千六百尺の金精峠を越えて往來する旅人らが、獨りでは通ることを怖れたといふ秘境、日の光とゞかぬ原始林中の狹隘な惡路であつたのを、丸沼と大尻沼とが、淺い水で連がる首に三年がゝりで堰堤を築きつゝある上毛電力が、手を入れて、稍少し廣げたのであつて、路を挾む喬木矮樹、隙間もなく繁茂密生し、半里の間は眺望全く利かない黄葉紅葉の隧道だ。

この隧道をくゞり曲り、左方からやつて來る小さい溪流と、大尻沼から吐き出される小川本流とが落合ふ地點まで進むと、眼界は幾らか開けて來るやうに思はれ、こゝに瀧見といふ小橋がある。橋の上から小川本流を仰望すれば、河床の傾斜が急角度をなしてゐるために、押寄せて來る水は、恰も不意を喰つて奔落し、亂巖に碎けて半空に飛沫を吹き上げてゐるのが、手の屆くところに見えるであらう。無名の瀧だ。橋の名があつて、瀧の名がないのも妙である……瀧としては一人前の器量を備へてゐると思ふのだが、五分の一地圖にも載つてゐないし、あとで近村の農人や、通りがゝりの者にも訊いて見たが、瀧の存在は知つてゐるが、名は知らない、多方名はないのだらうといふ……これが橋の下を潜つて、勾配愈々急な河床を、底知れぬ深い暗い谷へ、狂騰しながら落ちてゐる。五萬分の一に所謂、一ノ瀨とあるのは、この邊の奔端ではなからうか？

二

前に密林の隧道の中で、舊道と別れて、この橋を渡つた私とT氏とは、切開かれて間もないらしい新道を取つた。いゝ鹽梅に小雨が霽れて、消え散る霧の間から、山の姿が現はれて來た。これだけは見えないが、白根山に續く錫ケ岳から、笠ケ岳に隣する三ケ嶺といふ順に、下野上野國境の大連峯を

背負ふ塋塚山。五千尺の加羅倉大尾根とその後なる六軒山とが、大小の尾根を曳き、谷を抱いて、私たちの眼前に、面を壓するばかり巍峩と聳えてをり、これに對して、こちら側の唐澤山と赤澤山とが列び立ち、各々六千尺と五千尺の標高をもつて、嶮しく睨み合つてゐるあいだを、小川本流は深く深く刳り割つてゐる。

これに沿ふて生々しい巖角を露出する新道は、唐澤山の裾を縫ひ、四千尺より三千尺と、一歩々々尾根の形に從つて迂曲しながら、渓流に近づいてゆくのだが、瀧見橋の畔で行き違つて以來、この新道は非常な高所を走り、渓流との懸隔甚だしくなつてしまつたゝめに、脚下杳かの谷を俯瞰しても、水の色はおろか、流るゝ音すら聞えない。いや、その邊から半里あまりの白根溫泉に近い赤澤橋まで下らなければ、再び出會はないのだ。それまでの道中には、たゞ山あるのみ。眼に入るものは、右も左も後も前も、狹霧の紗を纏ふた山あるのみ。道の回るにつれて、その山の姿も漸く樣々に變り、徐に近づくかと思へば、忽ち遠く退いて、道行く人を迎へ送るのであつたが、加羅倉の尾根尻を隔て、六軒山を左正面に望む地點まで下つたとき、薄らぎかけてゐた狹霧は、竟に薄紙を剝ぎ去るやうに、名殘りなく霽れて、こゝに景色は全く夢のやうな美しい粧ひを凝らしつゝ現はれた。その形も色も朧ろに暈けてゐた山々谷々が、黄に茜に、緋に綠に、藍に紺の綾絲をもつて、複雜といはんより、寧ろ

不可思議にさへ見える模樣を畫きいだせる艶絢眼を奪ふばかりの、大刺繡の衣冠に飾彩せられ、瓏々青水晶のやうに澄み透つた秋の空を背景として、私たちの前に展現したのである。

支那に黄纈纈林といふ字句がある。絞り染めのやうに黄葉した森林のことであらうが、これは絞りや緋のやうに單純なものではない。強いて形容するならば、絨氈模樣である。山を埋め谷を蔽ひ、旬日のうちに一色の深紅に炎えあがらうとする針葉濶葉の原始林が工。雄大巧緻の意匠。何たる偉觀だ！私たちは俱に讃嘆の叫びをあげずにゐられないほど、大きな驚異を感じたのである。霜や霧の降り具合によつて、この邊はもう此の通りだ。

黄色い山と紅い山との間の谷底から、蒼白く立ち靡く炭燒の煙にも、縹緲たる詩趣は生きて動く。あゝ何ら高逸の氣韻。何ら幽雅の風情ぞ。人の臭ひに遠き深山ならでは、求めて得難き眞の繪圖こそこゝにあれ。蠢めく人は小蟻よりも小さく見える。口笛を吹きゆくはT氏。寫生帖をひねるは私だ。

三

かくて相迫る全山の岸を洗ひ、淙々として流るゝ雪のやうな水と出會つたところが赤澤橋で、これを渡ると、次の新橋によつて、歩道はもう一度、小川本流を横切り、白根溫泉となる段取。場所が邊

鄙なだけに、入湯に來る客も稀だが、丸沼の湯澤などよりは、病に効くといふ。唐澤山の奥から落ちて來る赤澤溪流と、白根山に源を發する仁加又溪流と、笠ケ岳、三ケ嶺の間から走つて來る香澤溪流とを、こゝに集めて小川本流に併せ、繞らすに六軒・赤澤・沼ノ上山を以てしてゐる風色に富んだ溫泉場だ。なかんづく赤澤と香澤とは、屏風のやうな絶壁に挾まれて、攀ぢ登るにも、溯るにも、恐ろしく骨の折れさうな深い溪谷だが、水量に乏しいのは、山に近すぎるためであらう。

この溫泉に隣接してゐるのが赤澤溫泉だが、湯の性質が全然異ふので、軒を並べてゐながら、溫泉の名稱も別になつてゐる。どちらも餘り榮えないと見え、苔の色も蒼然たる宿屋が、一軒づつ道端にあるだけの寥しい澗中の部落だ。

秋は紅葉に照り映えて明るくもあらうが、三千尺の高地とあつては、冬の佗しさが思ひ遣られる。

こゝから下る街道筋のお次は、小川宿まで約一里。更に一里で鎌田となる。燕山とはその間に毘沙門山を置いて、同じく下野上野の國境線上に坐る鬼怒沼山（反對側に鬼怒川の水源がある）の此方側の谷に源を發して、西南に流れ來る片品川……昔は加佐之奈、又は笠科と書いたさうだ……と、こゝまで私たちが、それに沿ふて來た小川本流とは、鎌田で相合し、片品川溪谷を形造つてゐる。

今私だけは奥日光の山を下り、上州沼田町を經て、東京を志しつゝあるが、反對に東京から沼田町

を經て、近頃流行ツ兒の尾瀨沼へ行くには、この鎌田で二ツに岐れてゐる道の左を取り、片品川上流について溯らねばならぬ。但し金精峠を越えて、奥日光へ出るには、その右を取り、小川本流について登る。輙ち私たちの逆をゆくわけで、鎌田村はさうした位置にあるのだ。村に蔕む部分の片品川に私たちは可なり溪谷らしい豪快な風景を求め得たけれども、これより摺淵の村落に下る二里ばかりはさほど賞美すべき眺めを持たない。

溪谷は廣く淺くなつて平凡化し、屢々道路から離れて、花崗岩と沖積層の河床を蜿つてゆく。が、やがて奥利根の名山といはれる武尊山（七千二百尺）と前武尊（六千七百尺）との深い谷に水源を發する塗川の流れを、幡谷に於て容れ、少し下つて、源を國境線上の宿堂坊山（六千五百尺）と皇海山（七千尺）の間に有つ萍川溪谷の水を合せるに及んで、片品川は溪谷本來の面目に立返り、追貝を通過するにあたつて、吹割の壯觀を創る。けだし鎌田から須賀川、平川などの會津戰爭古蹟を經て、追貝に至る三里の街道を彩る、血のやうな色調の菊芋の花は珍らしい。

殊に奇異に感じたのは、粟畑や小豆畑の畦や溪谷の岸に、眞夏の花かと思つた待宵草が、盛んに群がり咲いてゐることゝ、葬ひを出す沿道の農家の戸口に、赤、白、黑の三流の長旗と、その頭部は板で、その尾部は紙細工で拵へた畸形の龍や、燈籠や、造花などを、長柄の先につけて、押立てゝある

風俗だつた。

四

追貝（東村）に入つたT氏と私は、東村國民學校の門前から、桑畑の中の小徑を辿り、いはゆる屏風岩と溪流を挾んで對峙する峽腹の旗亭清瀧閣に靴を脱いだ。奇瀑吹割の全貌を眺めるには、最も恰好の位置を占めてゐるからだ。惟ふに片品川の水は、これによつて下流に於ても、奇勝と稱するに足る幾多の風景を創つてゐるだらうが、この瀑布こそは其の中でも、特に優れた特色を持つてゐる、といふべき自然の細工ではなからうか？　清瀧閣の二階廊下に立つて眺め下すと、溪谷の隅から隅までわかる。これも沖積層らしい灰色の大岩盤が、たゞ一枚で溪谷一ぱいの河床をなし、牛の背、象の背、駱駝の背のやうな形狀の、極めて低い丘をなし、蜒蜿とうねつてゐる上を、浮島の方からやつて來る溪流と、對岸の峭壁から灑落する瀧水とが一緒になり、洪蕩として流れるのだが、一枚板の大岩盤から成る河床の、比較的軟かな部分が、流水の浸蝕作用によつて、幾千年、幾萬年の間に、恐ろしいほど深く抉られ、垂直の壁となつて、巨口をあけてゐる洞窟のやうな割れ目に、牛の背、象の背、駱駝の背を越えて來る溪水が、圓く磨滅した落ち口から、物凄い音を立てゝ落込み、壯烈に沸騰してゐる

これが吹割の瀧なんだ。

瀧壺から吐出される水は、渦を卷いて泡だち流れ、骨ばかりの絶壁と絶壁に夾まれた眞青な淵に入り、こゝに渟膏して、障子巖の瀞をつくつてゐる。水は紅ざしつゝある兩岸の樹々の色を泛べて、下千歳橋に至る清瀧峽をくだりゆくのだ。岸壁曲折して、此閣からは見えないが、ともかくも風變りな瀧ではある。横幅半丁に餘るといふ瀑布が、他に今一ツあるだらうか？　水量の多くない現在でさへ既に水石相交はる態の、非凡に妙を覺えるものを、いかで降雨季のその見ごとさの、想はずにゐられやう。而もこれだけ大きな規模を有ちながら、溪谷の深い割に、幅が廣いためか、一帶の感じが明るく穩やかで、瀧には有りがちの、人に不氣味の念を與へる陰暗な凄味がないのも、片品川自身が、全體に於て女性的であり、柔和であり、優佳である特質の一ツであらう。かくて此の料亭の主人、前の村長永井翁。夫人、お孃さん（峰子といふ）と食卓を共にし、松の浮島、千人隱しの窟とやらを遠くに眺めながら、雜談數刻に及んで退いた私たちは、T氏の舊友で、こゝに教鞭を執つてゐる東村國民學校に招かれ、小使さんの妹御（ふじ子といふ）が、手打の生蕎麥は、追貝の名物といふのを振舞はれ、やがて引揚げる途上、こんな山里にあるのが第一に可笑しい藁葺家のレストラン・トキワといふ喫茶洋食亭に紛れ込み、去つて千橋の深峽を窺ふべく、橋畔の岩頭に戰き立つたのである。

片品川の本流は、こゝに栗原川を容れ、老神溫泉に藪原に赤城根に、驚嘆すべき紅葉谷を創り、沼田町をかすめて、大利根に注ぐのだ。方角違ひの川場溫泉に向ふT氏（實は土地の人）と私とは、眞直ぐに栗原峠へ向つた。峠の隧道をバスに搖られて拔け出る時に、遠望した赤城山の裾野は、實に雄大であつた。

私はこの夜、武尊山麓白澤村の若き南畫家岸龍水氏の家に泊つた。

谷底の紘歌

上州と岩代の國境尾瀨沼からの歸りだつた。片品川溪谷老神溫泉、白雲閣の湯槽に浸りながら、私の道連は、山の怪奇について各自の經驗を語合ふのだつた。この道連といふのは、東京から來た登山家で、私とは片品川溪谷で知合つたのである。かういつたのは私、

「これも山の怪異といふものでせうか、國立公園候補地になつてゐる尾瀨沼。」

「知つてゐます。」

「あれから沼山峠を越えて東へ一里の山中に、矢櫃平といつて、摺鉢の底みたやうな熊笹の原がある。こゝは源義家に追はれた安部惟任一族が、はる〳〵奥州から利根へ逃げ込むときに、矢櫃、鎧櫃などを埋匿したといふので、矢櫃平の名稱があるんださうですがね。不思議なことには、只今でもこの笹原に足踏入れると、方角の見當がつかなくなつて、立往生する。御承知の通り、山の中で賴りになるものは地圖でせう。それがですよ。持つてゐる地圖の文字や線が消えてしまつて、いつの間にやら、白紙になつてゐる。だから何方へ行つたらいゝか、サツパリわからず、迷ひに迷ひながら、やつとの

ことで笹原を脱出て見ると、その白紙が、また、いつの間にやら元の地圖になつてゐるんださうです。」

「ほう。本當ですか？」

「さあ。何うですかなあ。さういふ話を知つてをれば、尾瀬沼を訪ねついでに、行つて見るんでしたが、山を下つてから聞いたので、本當か嘘かわかりません。山の人達……樵夫や炭燒などの說によると、これは正しく滅亡した安部一族の幽魂、こゝに留まつて、埋めし寶を護るためになす業である、というてゐる。怖れて近づかないさうです。」

「山の中らしい話ですな。」

「然しかういふことがあります。私の知つてゐる山の溫泉宿の二階座敷に、近ごろ女の幽靈が出たり眞夜中になると、床の下から嬰兒の泣聲がきこえる、といふ噂が立つたんです。」

「なるほど。」

「噂は段々ひろがつて、その土地の新聞にまで書立てられるほど、有名になつた。溫泉場の人達の話によると、その溫泉宿は、もと部落の者の墓地だつたところへ建てたんださうで、墓地の持主の娘が旅商人の胤を宿して、女の子を生んだ。父親が怒つて嬰兒を里子に出して終つた。娘は氣が違つて淵に身を投げて死んだ。父親は家をたゝんで他國へ行つちまつた。その家と墓地を無代同樣に買つたの

が、溫泉宿の主人で、墓地のそばに溫泉が湧いてゐるもんだから、墓地を取拂つて宿屋を建てたんですな。」

「はゝあ。幽靈の出る下地はありますね。」

「實際、何か出さうな陰氣な家でしてね。建てゝから廿年近くになるといふから、家も傷むでせうが天井を見れば雨の汚點だらけ、廊下を歩けばミシリ、ミシリ軋むんです。以前そんな悲劇があつたし家が家だし、幽靈が出たつて不思議ぢやないんだから、女の幽靈があらはれるの、嬰兒の泣き聲がするの、とそんな評判が立つと、世間には物好が多いから、こいつア面白い、嬰兒の泣聲なんざ、聞えなくつてもいゝが、別嬪の幽靈にはお目にかかりたいもんだ、といふわけで、溫泉の效果なんか何うでもいゝ連中が、どしどし押しかけて行く。」

「ほう。出ますか。幽靈？」

「へへッ。出るもんですか！」

「出なくつちや、お客が承知しますまい？」

「承知するもしないも、宿屋の方では、別嬪の幽靈がサービスを致しますから、御入浴にいらッしやいなんて、言つたわけぢやなし、廣告したわけではないから、幽靈が出ようと出まいと、知つたこと

ぢやありませんよ。お客は大抵田舍の人達だから、幽靈が出なければ、日が悪いと思つて翌朝歸る。氣の長いのは泊込んでゐる。お蔭樣で客のなかつた宿が、滿員の盛況です。逆宣傳も巧く當ると此の通り。幽靈が出るとか、嬰兒が泣くとか、噂を立てさせて置いて、知らん顏をしてゐる主人、頭がいいですな。」

「はゝゝゝゝ。」

「矢櫃平もその手ではないかと思ふです。矢の根などが出るさうだから、埋藏物か何か掘つてゐる奴が、登山家よけの禁厭に、地圖が白紙になるなんて、途方もないことをね。」

「なるほど。」

「自分で經驗しないことには判らんけれども。」

「それはさうです。經驗といへば、今度の旅行で私は實に奇怪な現象……といふか何といふか……あなたの言葉ではないが、これだけは自分の經驗だから、實際なんです。四萬溫泉から三國街道へぬけるつもりで、入込んだ雨見山の谷。道には迷ふわ、日は暮れるわ、谷間を彷うてゐると、山の斜面に朽果てた山小屋があつたから、野宿する氣で入込んで、寢ちまひました。」

「ふむ。」

「夜中に目が醒めると、何うでせう。宵會の座敷で藝者が、三味線ひいて唄ひ騷ぐやうな賑かな物音が、眞暗い谷底から聞えて來るぢやありませんか！　この山奥に料理屋でもあるまいし、不思議に思つて聞いてゐるうちに、賑やかな音はパツタリ絶えてしまつた。私もまたウト〳〵眠りました。翌朝やつとのことで、三國街道へ出ました。一軒の掛茶屋に寄りますと、夜半の一件を思出したんで、茶屋の爺さんに話したところが、私が迷込んだ雨見の谷は、三十六年前まで炭燒部落だつたさうで、炭燒男を客に、越後三俣の美人が五人、谷底に小さい紅燈の巷をつくつてゐたが、大雪崩で家は潰れ、彼女達は慘死した。私が闇の底に聞いた三味線や唄聲は、女達の亡靈がなす業だらうといふのです。話を聞いてからゾツとしましたよ。はゝゝゝゝ。」

銀山平の今昔

鬼怒沼から迂回してゆく檜枝岐麒麟手の大津岐峠を西に下れば、名にし負ふ只見川溪谷に出る……主は會津で、わたしは越後、瀧にせかれて聲きけぬ、乘せてやりたや籠渡し……といふ、上・越・岩三つの國境線上に、重疊蟠居する劍峰峻岳を、屏風に立てまはす、藥研の底の小別天地が、いはゆる人外境の銀山平だ。鷹の巣から浪拜を中に、須原口へつづく、蛇のやうな溪岸の平地が、巉壁に夾まれ、炊烟幽なる茅葺の孤屋穢寨がいかにも心細げに點散してゐる。冬は積雪丈をなす此の山凹。春夏はたゞ、草莽の萋々たる此の荒土に、一千軒の人家と、三ケの佛刹とがあり、妓樓廂を比べて、梵唄を壓する絃歌の聲、絶ゆるまもなかつた、といふ話を聞くと、果して信ずるや否や？　河村瑞軒の鑛鑠たる當時、銀山平は名の如き、鑛石の大發掘採取場であつた。激流逆卷く只見川の河床の下は、縱横に穿たれた坑道であつたが、安政元年の氾濫に、坑區の天井に相當する河底の地面が陷落して、男女三百有餘の坑夫坑婦らは、江戸幕府の御用銀を堀りながら、水底に埋沒し、淫過凶慢の極樂は、阿鼻叫喚の地獄と變つた。爾來今日まで、風雪の統治下に於て、野獸の管理に委ねられて來た。在りし

日の面影とても、殘つてはをらぬが、こゝに遭難者の骨を葬つた印の實碑が、單に慘劇を記念するための空碑か、溪畔に一基の供養塔がある。銀礦の跡が今の石買原で、當時の千軒原が、今の須原といひ、深山妓樓の婀娜女衆と、銀礦掘りの若者等が、溫泉湧く磧の畔で、越後風の戀を語るには、應はしい背景の傾城澤が、今の「戀の岐澤」であつて、遷る時代と共に役者も恰好が異ひ、只今は夏になると、こゝに天幕する都會の男女組の、睦まじき姿が、深い綠の蔭に、眞白く見えるやうな筋書になつた。而して遭難慘死した情人の後を追うて、北ノ又の丸木橋から、いくたの美妓が、石を抱いて躍り込んだといふ急瀨を、現在は「石抱橋」と稱する。それだけのものだらう。開墾者男女が、南會津や越後から、山を越え、峠を越え、谷を涉つて移住に來るのは近頃の奇現象だ。須原口には、形ばかりでも、開墾事務所が出來て、小さい茅葺きの銀山寺は、亡者の世話もすれば、小學校もやる。旅人宿もやる。蒼ざめ衰へてゐた世界は、かくて健かな血色を帶びてゆく。慓魄駭膽の山屏風の中に、巍峩として聳ゆる荒澤岳の殘雪が、晩春の日光に照り耀く姿は壯嚴である。北ノ又の幽溪を隔てゝ、これを遠望する丘陵は、シラネアフヒの薄紫の花や、シャウジヤウバカマの赤紫の花や、薄紅いろのシヤクナゲの花に、目も綾に彩り飾られてゐる蔭から、山服の尻を据ゑて眺める風景は、大自然の生命の鼓動を活寫した、力强い油繪である。開墾者男女の群は、山毛欅や楢の原始林を伐倒して、耕地を

作るべく、燒き拂つてゐる。野火の跡の處女地に芽ぐむ、蕨や蕎麥こそは、ここでなければ味はへぬ佳香であらう。彼等は斧や山刀や鋤鍬を奮つて、山といふ啞の大懶獸の生毛を引拔いたり、皮を引掻いたりする他に、冬から晩春にかけては、野獸をも追ひ廻す。名物の貂を始め狐、狸、栗鼠、鼯鼠などは、毛皮にされて、東京見物を命ぜられる。四年前の熊四十六頭は、輓近の記錄であらう。銀山平に活動する山男と山女は、われらが剛健質朴なる山岳文學の、勇敢な主役者であり、忠實な端役者達である。

駒鳥の唄

——鬼怒川溪谷——

上

碧影璧を沈めるといふ形容は古いが、紺青の水を湛えてゐる奥日光刈込湖の面に、これを圍む山々の姿が倒映してゐる眺めは、美しく靜かなものである。だが空は忙しい。西南から北東へと、ふわふわした白雲の塊が、恐ろしい速さで、頻りに千切れ飛んでゆく。夏の山に雨や霧はつきもので、一度や二度は濡れるものと思はねばならぬが、振出しの初日から降られては勇氣が挫ける。私は湖畔の岩根に腰かけて、大空を仰ぎ見ながら、雲足の速さに微かな不安を抱くのであつた。あの浮雲が峯をかすむれば、氷のやうな雨となり、峯をかすむれば物凄い霧となる。山の天候ほど變り易いものはないのだ。

私達一隊九人の中には濃綠の渚づたひに、刈込湖を觀に行く者もあつた。私の次男である五年生は

枯木を集めて炊事にかゝつてゐる。海拔五千三百尺の風あたり强く、枯木は音を立て燃えあがる。ひたひたと漣うち寄せる汀では、東京から登山に來たといふ家政女學校の生徒たちが、先生を圍んで砂遊びに戯れ興じてゐる。校長さんが私に向つて言つたことだ。

「私達は昨日、奥白根山に登つて沼へ下り、金精峠を越えて湯元溫泉に引返しました。明日は男體山に登ることになつてゐるんですが、どこから登つたらいゝですかな?」

「男體山は中禪寺湖畔の二荒神社の裏手からと、その反對側の御澤からと、登る道があります。昔は精進潔齋して一定の日に登つたものです。女人は登ることを許さなかつたほどの荒山ですが、天氣もよささうだし、奥白根八千尺の頂上を究めた元氣なら大丈夫ですな。」

と私は答へた……ところが翌日は朝から雨だつたのである。何うしたであらうか?……この元氣潑剌たる娘たちは軈てのこと湯元溫泉に引揚げる。

中食終つて私達も湖畔を去つた。溫泉嶽の裾を縫ひ、林道をつたつて、金田峠に向つたのである。途中で宇都宮から來たといふ三人連れの天幕組と道づれになつて、後になり先になり、電光形の山道を凡そ一千尺ほど、炎陽に照りつけられ、汗だくで喘ぎ登つた。肌のいろ、目の醒めるばかり鮮かな白樺二三本立並んで、日光に眩しく照り耀いてゐる、馬の脊のやうな山の鞍部が峠なんだ。汚い山小

屋が葬草に埋もれてゐる。

海拔六千二百尺。幽寂な刈込湖が小さい鏡面のやうに、樹林の間から光つて見える。颯々と唸りをあげて吹上げて來る薄風の冷たさ。身に泌みて絞る汗も一時に引込む。私達は北空と相對して草叢に尻を据えた。南會津の山塊……帝釋山臺高倉山・孫兵衞山・黑岩山・鬼怒沼山が遙かの前面に蜒蜿連亘して、青空を眞黑く劃つてゐる景致の雄大さよ。洵にこれほどの遠望を、このたびの登山に於て、私達は他の何れの山、いづれの峠に、求めて得たのであらうか? 有名な峠でこそないが私達にとつては、心曠やかに感ぜられる最初の……そして最後の愉快な展望であつたと思ふ。

一隊の引率者であるS氏が、前方の連山を指して言つた。

「燧嶽はどれですか?」

「こゝからは見えません。あの左の端に聳えてゐる黑岩と、鬼怒沼山の背後にあたるんですから」

と私は言つた。私達の最終目的地は、實はその燧嶽であるのだ。七千八百尺の死火山であるのだ。二日の後にはその山嶺に立たうといふのだ……一行のなかに異議を唱へる者が出て、途中からコースを變更したゝめに、この目的を果すことの出來なかつたのは殘念である……金田峠から一里半の林道を下つて、西澤金山部落に入つたのは午後四時頃であつた。高薙山(七千二百尺)東尾根と、山王帽子

山（六千八百尺）の北尾根に夾まれた窮屈な谷底（五千尺）の斜面に部落はある。鬼怒川にそゝぐ門森澤の支流、西澤の水源に近い部落の前を流れてをり、この流れの對岸に金山がある。高薙山の足を掘つてゐるんだ。先頃まで廢棄されてゐた鑛山だが、黄金狂時代の金掘り熱に煽られて、近ごろまた採掘を始め、百名ばかりの男女坑夫が入込んでゐる、といふ話を私は聞いた。なるほどと思つた。屋根は剝げめくれ、壁は崖れ落ち、家とは名ばかりの小屋が、あちらに一塊、こちらに一塊、蓬々たる野草のなかに歪み傾いてゐる。荒穢陰慘な部落だ。厭でもこゝに今夜は泊らねばならぬ。

川向ふの隧道から男女の坑夫が、ぞろぞろ出て來る、仕事歸りと見えて、こちらの崖上の鑛山事務所へ立寄つて行く。事務所の前庭には宇都宮の天幕組三人が、リュック・サックをおろしてゐた。先着のS氏が、遲れて着いた私を見ると、

「宿所の奔走をお賴みしたいですが」

「承知しました。この事務所に泊めてくれると世話がなくていゝがな」

私は部落中を捜しまわつた揚句、事務所の主任なる人物をやつと捉へたのである。坑夫たちを頤の先で追ひ廻してゐる五十年配の老大な圖體の男で、詰襟の服に長靴といふ打扮だ。私は慇懃に會釋して、九人の同勢が一夜の雨露を凌ぐだけの場所の借用を申込んだ、と言ふよりは嘆願したのである。

お安い御用です、といつて親切に斡旋してくれるだらうと思つたところが、大違ひと來た。主任は傲慢無禮な態度で、爪揚子をくわへながら、突放すやうに拒絶した。

「この邊に泊る場所はないよ。川俣溫泉まで行つたらどうだい」

「みんな疲れてゐるんです。これから川俣溫泉まで歩く元氣はありません。どんな破屋でも構ひませんから、泊めてくれませんか」

「いけないよ。火でも焚かれちや迷惑だ」

「困つたなア。泊てもらへるだらうと思つて來たんだがなア」

「思ふのはお前たちの勝手よ。あつはつは」

といつた調子だ。癪の虫を抑へて執拗我慢に談判した。

「うるせえなア。駄目だと言つたら駄目なんだ。向ふの崖の上にでも天幕を張るんだな、あすこなら火を焚いてもいゝ、その他の場所ではお斷りだ」

かういつて對岸の崖の上を指さした。これ以上の押問答は無用だ。言へば喧嘩になる。屑よく諦めて私は隊に引揚げた。報告するに有體の話を以つてすると、八人の顏には意外の表情があらはれ、それは次第に不安と悃惑と危惧の色に變じて行つた。いかんともしがたい成行ではある。宇都宮天幕組

もこの部落で一泊の段取りであつたんだ。部落では焚火が出來ないと聞いて、私達と共に對岸の崖上に移つたのである。十坪ばかりの平地は、元、鑛石を採掘した跡で、ダイナマイトで爆破した角陵の鋭い大小の鑛石が一面に散亂してゐる。岩石を取つて打碎くと、黄金色に光る礦がピカツとあらはれた。

「金山だから、足元に氣をつけろよ。金の塊がおツこちてゐるかも知れないぞ」

「駄目だア。拾つて歩いてるんだが、黄鐵鑛に黄銅鑛ばかりぢや、つまんないや」

「僕はさつき水晶の太い奴をひろつたンさ、山道でよ。しめたと思つて、よくよく見ると形は水晶そつくりなんだけど、水晶ほど透明でないんだ。完全に結晶してゐないのかも知れないと思ひながら、何の氣なしに舐めて見ると馬鹿に甘い。」

「氷砂糖だらう」

「氷砂糖なんだ」

「あれは吾輩が舐つてゐたのを、口からおツことしたんだよ」

「ちえツ、汚ねえ、ぺつぺつぺつ」

「あつはつはつ」

高薙山の東尾根を脊負ふてゐる此の平地（海拔五千尺）の脊景は、鬱蔚たる濶葉樹の密叢だ。夕闇は刻々に迫つて來る。山の日は暮れかけると速い。二時間後には眞暗くならう。私達は密叢に分入つて、小屋掛けの活動を總がゝりで始めたのであるが、材料といつては麻繩四本のほかに何一つない。大工道具と來た日には、宇都宮天幕隊に借りた山刀一ふり……これは斬れる……それと日光町日光食堂主人に私が借りて來た山刀があるに過ぎないのだ。而もこの山刀たるや形ばかり大きくて、篦棒な鈍刀と來た。木を切つて小屋の柱と梁を造るのに、切るんではなくて、叩き折る程度に斬れ味が貧弱なのだ。

一時間餘の勞働の末に出來上つたのが、竹の柱に萱の屋なら、立派なものだが、天下、これ程お粗末亂暴な小屋は造らうと思つても、容易に造れるものではなからう、といふ代物だから驚いた。驚いてゐるうちに暗くなつた。何處で買つたか貰つたかN君が玩具の小提灯を持出した。風流の辨へあつてよろしく、これに燈を入れて木の葉葺きの戸口の軒廂に吊した。山窩の一族がお盆に精靈を迎へる の圖。凡そこんなものだらう。お向の三角天幕の中では、ハアモニカの流行歌曲を演奏し始めた。その一人が私に挨拶した。

「御殿は落成しましたか？」

「御覽の通りです。木の香も新らしいと言ふが、本建築は木の葉も新らしい方ですな。木の枝と木の葉を用ひて一時間やそこらで建立したんだから、どんな腕のいゝ棟領でも、これ以上のものは出來なからう、と思つて辛抱しなくちゃなりますまい。」

と私は答へた。疊は岩石の破片、敷蒲團は木の葉の堆積である。寒氣を防ぐための壁も木の葉の懸垂だ。小屋の外では腐木を焚いて皆が炊事にかゝつてゐる。闇に燃上る焚火の明りで、夜食を片付けると、暫の雜談に時を過して寢支度。交替夜警の皮切りが、N君にO君に私の三名、崖の上の焚火を圍んで任務についたのは、夜も可なりおそかつた。深山の眞夜は寂閑として、聞ゆるものは、たゞ崖下の谷底を流れる水の音ばかり。東の空には星屑の瞬きが見えるのに、西の空では物凄い電光が飛び交つてゐる。

都會の人々は、暑熱に喘ぎ苦しみながら、蚊帳の中に茹り轉つてゐるだらう。私達は堪えがたき寒さに顫えてゐるのだ。

中

冷い氷雨の中を、私は歩いてゐる……林巒丘岳むらがり立つ奥日光西澤金山の谷間から、曲折絶え

間なき急坂を一里ほど喘ぎ登つて、高薙山（七千二百尺）の肩に出ると、鬱蒼たる新綠の原始林に蔽はれ、熊笹や莽草に埋もれかけてゐる薄暗い林道は山胸を迂廻しながら、紅い石楠と眞白い白根さつきの花の入り亂れた群落にはいる。

朗らかな藪鶯の囀り、駒鳥の唄聲を浴びて下る三千尺の脚下から、幽かにきこえるのが湯澤の溪音だ。岩角につかまり腐木を飛び越え、倒れ木を潜り砂壁を横切りながら、ひた下りに下るのだが冷えきつた手足に一脈の溫味を感じ、霧の雫の凍てつく鼻に、朧げな硫氣の漂ひを覺ゆる頃は、溪岸に磐踞する巨岩の端に這ひついてゐた。湯澤の水源から一粁半の谷底だ。

世界三大噴泉塔の一つとかいふのが此處にある。私は岩上に佇みながら、噴泉の奇觀に接した。對岩は手白山の山勢急迫して絶壁をなし、白布のやうな長瀑を懸けて、段丘の上の釜に落ちてゐる。段丘の突端には、高さ二尺ばかりの白い圓錐形の天然塔が立つてゐて、その頂口から、激しい勢ひで、白煙が噴き騰つてゐるのだ。この白色圓錐塔が中心となつて、いくた大小の噴泉塔は、段丘に沿列んでゐる。中心塔から左手の上流を望觀すれば、直ぐ隣の塔は最も大きく、高さ一丈もあらうか、既に死滅して色も黑變し、風化作用によつて下部は壞消し、頭と肩ばかり殘つてゐる。その上隣の塔は高さ七八尺。今が全盛期と見えて、塔の頂口から、硫黃泉をブクブク噴出してゐる。硫黃泉の炭酸泉が

地上に噴出る時には、噴出口の周圍に、湯の花を沈積するが、これらの塔は、さうして出來始め、さうして育つたのだ。中心噴氣塔から下流の岩壁を見ると、昔は熱湯を噴騰げてゐたに違ひない噴泉塔の消滅した痕跡がドス黝く印されてゐる、いつの時代にか老衰して死んだのだ。噴泉塔は高さ一丈ばかりに成長すると、それが壽命で、溫泉活動を中止するらしい。溫泉の噴出口が斷崖に列んで、少しづつ上流へ移動してゆく證跡歴然たるものがある。これは面白い現象だと思つた。

このあたり兩岸相逼つて、陰狹な峽谷をなしてをり、碧水岸石と鬪ひ、懸つて瀧となり、落ちて深淵となり、奔湍は地鳴りを立てゝ、足もとの巨岩を震はせてゐる。

山霧の動きも烈しい。けだし鬼怒川溪谷上流の山中では、屈指の勝景といふべきではなからうか？噴泉塔は今市の役場で保護してゐる天然記念物だ。世に遍く知られず、神秘に保たれてゐるのは、ここまで入り込むのに、骨が折れるからであらうか！　これに手を觸れると、山が荒れるから、警戒せよといふ制札が立つてゐる。……奥日光湯元―噴泉塔―八丁ノ湯―鬼怒沼―尾瀨沼―燧嶽―といふ登山コースの道程の中に私はあるのだ。

空を刺すやうな奇峭のすそをめぐつて、噴泉塔から暫く溪流を溯り、丸木橋を傳はつて西岸に移ると、胸突くばかりの急峻な山道にかゝる。これを半里ほどうねり登つて、手白山（六千百尺）の頭を

かすめ、眞暗い密林の中を、手白澤へ下るまでが一骨だ。朽ち倒れてゐる楢、樅、栂、白樺の喬木の殘骸に、覺束ない林道は塞がれ、巉巖から巉巖へ架けわたされてゐる幅一尺の棧道も、お粗末なもので、「道路危險につき注意すべし」といふ營林署の立札も脅かしではなかつた。

降つたり止んだりの氷雨と霧のために、濕つてゐる腐土は、更に滑つこく濕つてゐるのだから、一歩ごとに惱まされた。手白澤に下れば、前面の小山（およそ三百尺）を越えると、淙々たる鬼怒の本流にのぞむ八丁ノ湯だ。噴泉塔から一里餘の道中を三時間もかゝつて、私は此山奥の溫泉に辿りついたのである。

溫泉といへば鹿爪らしいが、これは客舍と便所をつなぐ廊下の、屋根組みあつて、屋根板はないといふ山小屋。このへんの名産の山猿が馬鹿にしさうな貧弱なホテルだ。食事ぬき一泊五十錢は、尾瀨沼の長藏小屋よりも高い……但し團體で泊つたらこんな屋臺骨は押潰れるだらう……鷄卵一個八錢から十錢。一合十錢ぐらゐの地酒が四十錢。岩魚一貫目金三圓も安くないし卷煙草を定價では賣惜むのだ。尾瀨沼、丸沼、日光湯元、鬼怒川の、その何れから來て、いづれへ行くにも、この八丁ノ湯は一泊しなければならぬ足がかりだ。溫泉小屋の者どもは、それを知つてゐるので、厭なら止せといはぬばかりに都會よりの登山者をボルのだ。不愉快であるが、仕方がないので、こゝにリュックサックを

下して、ヅブ濡の山服を脱いだ私は、小屋から梯子づたひに、溪畔の野天風呂に浸つた。眉に迫る新緑の斷崖に湯の瀧が懸つてをり、氷雨のなかで駒鳥が啼いてゐる。宿屋は駄目だが、周圍の景色は實にいゝ。

下

宿の者は今市あたりから營業に來てゐるらしく、秋の末から春中頃までは、雪に埋まるので、町里へ引揚げるんださうだ。日本アルプスなどに飽いた人達がやつて來るんだらうか、夏は登山家で混雜するといふ。今は季節が早いので一人の客もない。寒氣が強くて、いつまで浸つてゐても溫まらない。氷雨が頭にあたつてパチパチ彈け飛ぶ。湯から上つて、冬のシャツを三枚重ね着ると、宿の爐火で足袋やら上衣を燥かしながら、携帶の燒酎で暖を取つた。

「オヤヂ。」

「何だい?」

「この上流の日光澤溫泉に宿屋があるか?」

「ある。汚え小屋だ。肺病患者が泊つてゐる。今日もコツプ一ぺえ血を吐た。」

といふやうな調子の宿六だ。水一杯でも呑ませるのに、ロハではいゝ顏をしないのだから、人氣の惡さ推して知るべしだ。私は飯盒の冷飯に味噌をなすりつけて夜食を濟まし、餅煎蒲團の中で、崖に碎くる湯瀧の音を聞きながら寢た。

明ればまた氷のやうな青い冷たい雨。今日もまた濡るのかと思ひながら、草蛙を穿いて立つた。鬼怒沼山と根名草山に押挾まれて、痩細りゆく鬼怒の本流を谷詰で溯る。山屋根から匐ひ下る霧と、谷から湧き上る霧とが、濛々と縺れ合ふなかをムササビが飛び交ふ。一粁ばかりで溪澗の日光溫泉についた。世に知られない溫泉の一つだが、これは貞亨の昔。土地の者が山稼ぎの折に發見したもので、明治三十五年の大暴風に、山崩れの下敷となり、二丈あまりも埋沒したまゝになつてゐたのを、現在の主人が、昭和二年に復興したのである。

八丁ノ湯は無色澄明の單純泉だが、こちらは白獨を帶びてゐる硫黄泉だ。宿の老主人とその娘らしい二人の女が、臺所に板を敷き、湯の花を硬めて、小さい團子を拵へてゐる。何にするのか、立寄つて訊いて見ると、これは東京あたりの藥湯や、家庭風呂で使ふのださうだ。客室は三間しかなくて、ガランと空いてゐる。

「お客さんはゐないやうですね。」

「はい。夏場になりませんと、おいでないのです。」

「さうですか。こゝに泊つてゐる肺病患者が、今日もコップ一ぱい血を吐いたなんて、八丁ノ湯のオヤヂが言ひましたが嘘ですか？」

「あなたにも言ひましたか？　とツ、とツ、途方もないこツてす。コップ一ぱい血を吐いたなんて！どだい肺病患者なんか、ゐやしませんよ。こんな嶮しい山の中に、血を吐くやうな病人が、登つて來るわけもありませんや。」

「さうですね。」

「どうも、あの温泉宿の亭主夫婦は、人の顔さへ見れば、私どもの悪口を言ふさうで、困つてゐるんです。その悪口といふのが、いつも定つてゐます。私どものお客様が、コップ一ぱい血を吐いた、なんです。去年から同じことを言ふのです。やり切れませんからね、私の家は肺病院ぢやないから、そんな悪宣傳は止めてもらひたい、といつて何遍も抗議しましたが、一向效目がありません。」

「怪しからん奴ですな。」

「昨夜はあの家にお泊りでしたか？」

「はあ。」

「それであの家が満員になる時でも、私どもの家では、部屋が空いてゐる始末です。」

と老主人がこぼした。風景は八丁の湯が優れてゐるけれども宿の主人は此方が上等だ。暫く憩ふて立つた。こゝから半里たらずの、針葉濶葉錯綜した暗い密林に、岩壁を抉りあけてゐるのが、鬼怒沼に源を發する恐ろし澤である。澤谷に沿ひつゝ、これを右に俯瞰する山尾根の、廢滅しかけた峻嶮な山道を木の根や岩角につかまり、匍ふやうにして攀ぢ登る。このコース中での最悪路だが、たゞ一つ私を犒らつてくれたのは、密林中の洞窟に、黄金の光を放つてゐる光鮮といふ愛嬌者だつた。登り二時間の處を一時間半で、鬼怒沼の渺茫たる平原に達した……この鬼怒沼から尾瀬沼を經て、燧岳への道中記は、いづれの時か紹介することもあらうと思つてゐる。

六字の題目

「こゝに在すは、鬼怒名物の娘船頭でござる。はゝゝ。なあ。小江ちゃん……川の狭霧に檜笠が見える……と……あれは柄倉の山魚釣り……てんだ。十八番だい。お前が舟を漕ぎながら、唱ふのを聞いてると、心から惚れたくなるね。聲だけでも惚れたくならア。況してや、そのお位牌、その旗印、その看板は、八汐の花か白百合の、渡守には勿體ねえ縹緞だ。兄貴の又藏が、だらしねえ、やくざだけに、お嬢さん、身持ちが堅くつて、戸締りがいゝ、と感服してゐる世間が可笑いや。この助次郎みてえな、蟲がついてるんだからな。俺なんぞが、お百度踏んで、口説いたつて、靡かねえ筈だて。此奴め。川魚ばかり釣るのか、と思つたら、女も引ツかけやがる。」

「人聞きの悪いことを言ふな。」

「嘘ぢやなからう。先刻みたいに、犢鼻褌なんか拵へて貰ひやがつて、こん畜生、現場を見つけたからには只ぢや置かねえぞ。酒を啖つて言ふんぢやねえが、なア、小江ちゃん、お前の兄貴の又藏と、俺とは古い友達だ。この釣師の助次郎に、犢鼻褌を仕立てやるほどの、心立でがあるなら、俺にだつ

て、笑顔ぐらいは、見せてもよからう。」

「おい。行かうぢやないか。」

「行きたけりや、勝手に行きねえ。この市太郎は千馬木屋の使者だ。又藏に用がある。」

「又さんは留守だといふぢやないか。」

「何處へ行つた？」

「出先もわからないつてさ。冗い男だな。」

「ふむ。仕様のねて鐵砲玉だ。」

「さあ、行かう。」と腕を掴んで、往來へ引張り出した。

「あゝ。いゝ氣持に醉つちやつたい……川の狭霧に檜笠が見える……と……おツそろしい霧ぢやねえか。十年に一度といふ霧だぜ。おい。霧の中で、川の水が轟々咆えてやがらア。」

と、相手の肩につかまつて、蹣めきゆく、鬼怒川べりは、日光今市から三里、怪談「累ケ淵」からは、一里餘の上流にある、會津裏街道高徳だ。渡船小屋「舟又」の渡守は、二十歳の娘で、小江といつた。筒袖山袴。爐端に胡坐で、股引の破れを繕ひかけたまゝ、二人の男の消えたあとを、ぼんやり見詰めてゐると、カーン、カーンと、冴え冴えしい、鉦の音が、街道下から、聞えて來て、間もない。

脚絆草蛙の足拵へ賴もしく、白衣に經帷子の、匂ひも貴い六部姿の男女が、打叩く鉦の音と共に、白霧の中から、朦朧と現はれて、舟又の戸口に、ズラツと立ち列んだ。武家らしい奇峭な風貌の、人品賤しからぬ白髪老人を先頭に、容姿端麗、凛として犯しがたい氣節の仄見える、二十七八歳の婦人、と、その顏に肖た目鼻立ちの、可愛らしいのは生みの兒どもらか、肖ないのは親戚緣者の子たちか、小婢でもあらう、總勢十三人といふ賑やかな一隊だ。

白髪の老人が竹杖をついて人つて來ると、小江に問ふた。

「道すがら聞いて參つたが、中島の渡しとやらは、こゝぢやの?」

「さやうでございます。」

「我れ我れは、會津へゆく者である。面倒ながら、小佐越まで、舟を出して貰ひたいんぢやが。」

「まことにお氣の毒でございますが、今日は舟を出さないんです。」

「出さぬとは、どうしたわけぢや?」

「降り續けの雨で、水量が增して、激しい流れが、渦を卷いてゐるところへ、この深霧では、對岸の見定めもつかず、舟を出すのも危いので、今日一日は、渡船を休んでゐるやうな始末でございます。」

「そりやア、困つたことになつたな。足弱い女人、子どもらの供をして、前途を急ぐ旅に、こんな處

で、川止めを食つては、どうにもならんわい。今市から此處までの道中には、泊るべき旅籠も、見當らなかつたし、いや、荷馬の背を借りようとも、夜道をかけようとも、今日中に、川治の湯へ、行き着かんけりや、あの奥の山王峠で難澁するて。のう娘御。中島の渡しの舟子は、評判の婀娜娘ぢやと今市の掛茶屋の姥さんに聞いて參つたが、從つて、あんたは、この川筋に馴れ切つてござる筈ぢや。」

「ほゝゝ。それはもう、家業ですから。」

「ふむ! 我れ我れとても、霧や濁流を恐れては居られぬこの際、無理な賴みとは存じてをるが、それだけの心附はいたすから、一番、奮發して、舟を出してはくれまいか?」

「さうですねえ……」と小江は逡らつたが、激流に漕出しても、舟を拉はれぬだけの自信はある。六部達の困る顏を見ながら、無下に斷り得ないのも性分で、大した冒險でもないと思ふと、少しは慾も手傳ふものだ。

「木の葉のやうに、舟がゆれますよ。」

「覺悟の前ぢや……のう……お妙殿。」

と背後を顧みれば、女六部が無言で頷く。

「あなた樣方さへ御承知なら。」

「忝い。」

と老六部は喜んだ。高德から小佐越に渡る眺めは、鬼怒川筋の絶景といふ。翠巒蒼壁を江心に映し白雲の影を泛べて、漾々と流れる碧瑠璃の水の上、赤い襷に檜笠の乙女が、櫓の手も嫋やかに、舟漕ぎわたる景色にこそ、繪にある情趣もあらうが、濁流と戰ふ勇ましい光景も、今日は一切霧中だ。十三人の六部達を對岸に渡し歸ると、霧の雫の垂れ落る蓑を、軒にかけて入つた小江は、六尺豐かな印半纏の男が、爐端で腕拱いてゐるのを見た。傍らに備前燒の酒德利が、堂と坐つてゐる。

「兄さん。」

「おゝ！」

と男は首を上げた。小江の兄又藏だ。背なかに彫つた錠の刺青で「錠の又藏」といはれる、不器用なやくざ者。頰は削けて眼は血走り、顎は尖つて鬚は伸びといつた具合に、面窶れしてゐる。これが博突に敗け續けてゐる時の姿である。

「何處へ行つたんだ？」

「稼ぎによ。是非とも小佐越に渡してくれといふ、急ぎの客人があつて、舟を出したんだが、漕ぎ馴れた川筋の、その方角さへつかねえほど、深い霧のなかで、矢のやうに早い流れを、押切つてゆくの

は、並大抵の骨ぢやなかつた。」

「さうだらう。女船頭の腕ぢや、今日の渡船は無理だらう。あはゝ。」

「無理だけのことはある。これが渡賃だよ。」

小江は山袴の隱囊から、一枚の銀貨を摘み出して見せた。又藏は眼を丸くした。

「二分銀ぢやねえかッ？」

「さうだよ。」

「こりやア驚いた！　三文の舟賃に五文貰ふんだつて、十年に一度あるや無しやと思つたら、二分とは笹榨奮發したもんだな。お忍びの大名でもあるめえが、何だい、その客種は？」

「六部だよ」

「六部？　諸國修業のあの六部か？」

「うん。裝束はさうだけど、ほんものゝ六部ぢやあるめえ。人の門邊に立つて、僅かな報捨をうける修業者が、船賃を二分もくれるものか。見たところ、江戸お旗本の家族らしいね。舟漕ぎながら、聞いたんだが、江戸幕府が倒れて、お旗本は散り散りになつたが、中には親子、夫婦と別れて、彰義隊ちうものを作つた、決死の人達があつて、上野に立籠り、長州薩摩の兵に、抵抗してるんだつてよ。

あの六部たちは、その隊士達の家族らしい。江戸の邸を立退いて、會津若松の緣邊を賴つて行くやうな話だつたが、江戸は東京と名前が替つたつてのに、よつぽど、江戸がなつかしいと見えて、江戸、江戸と言つたつけ。」

「ふうん。古河から眞直ぐ、白河の方へ行かねえで、こつちへ入つて來て、足場の惡い廻り道をする鹽梅ぢやア、奧州街道も、薩長の團袋に塞がれてるんだな。會津攻めも、遠いことぢやあるめえ。あつちもこつちも、戰爭の飛び火で、物騷な世の中だ。然し何だつて、子どもまでが、六部の風采をしてゐんだらう？」

「時節柄、旗本の侍姿では、道中が險呑なんだらう。そんなことは、どうでもいゝがね、兄さん、お前は、今朝も起きぬけに、家を飛び出して行つたが、今まで何處にゐたのかい。」

「のツぴきならぬ金策に、駈け廻つてたんだ。」

「博奕の資金か。苦い顏して鬱いでゐたよツ。また取られたねツ？　船頭稼業は妹まかせに、博奕打つちや、取られ取られ、田地も家も失しちまつて、まだ目が醒めねえんだから情ねえ。言つたつて仕樣がないから、言ふまいとは思ふんだけど、終ひは乞食だよ。ほんとに、お前、どうする氣だね？」

「ふん！」

又藏は憂鬱な表情で、爐の中を見つめてゐたが、矢庭に酒德利を引ツたくり、口からガブガブ飲み干して、ポンと投げ出すと、慌しく立上つて、裏口から往來へ飛び出した。

この街道を、累の幽靈が彷ひあるくといふ……柳の黑髮の掛行燈の灯がゆれる頃。爐ばたで鰍を燒いてゐる小江の前に、ぬツと現はれた一頭の怪物、いや、片面の大痣に、眇がニヤリと笑つてゐるやうな、不氣味な人相の傴僂男が、結城の裾を端折つて、妙な形に突ツ立つたのだ。

「又藏さんの住居は、こゝですね？」

「はい。」

「おいでなさるか？」

「留守でございます。」

「留守？……何處へ行きなすつたらう？」

「さあ……默つて出ましたんで判りませんが。」

「いつ歸るとも言はないで」

「はい。」

「そいつは困つたな。失禮だが、お前さんは又藏さんの……お小江さんと仰有るんぢやございません

か？」

「さやうでございます。」

「聞きしに優る御縹緻だ。えへゝ。私は今市の千馬木屋の食客、狂齋といふ者で、平生は食客だが、今日は親分の賴みで、使者に來ました。これだけ言へば、大概、おわかりだらう。お前さんには、又藏さんから、話がしてある筈だ。」

「話つて？　何の話でせう？」

「御存じの一件。」

「知りませんね。」

「呆けちやいけませんよ。」

「呆けるなんて、ほゝゝ。私は何の話も、兄から聞いた覺えはありませんよ。」

「可怪しいね。」

「何が可怪しいんです？」

「ぢや、申しますが、先日から地元の衆と旅の客人とが、千馬木屋に寄合つて、盆莫蓙で、負け續けの又藏さんが、最後の運試してんで、お前さんの體を抵當に、千萬木屋の親分から、三十兩借りて、

張つて見なすつたが、たうとう、目が出ず終ひだ。その三十兩の金は、昨日一杯に返す。もしも返さなけりや、約束通り、お前さんを千馬木屋につれて來る、といふ證文まで入つてるんだが、約束の日も時も過ぎてゐるのに、又藏さんからは音沙汰もないから、お前行つて、挨拶を聞いて來い、といふ親分の命令なんで、私が伺つたやうな次第です。」

といひながら、傴僂の狂齋は、上框に尻を据えた。今市の千馬木屋といふのは、飯盛女の七八人も抱えて、色を鬻がせる大きな宿場茶屋であり、日光見物の旅人達を鴨にする賭場である。この界隈に羽ぶりを利かしてゐる亭主久萬吉は、日光山四本龍寺を、博奕と女と酒で縮尻つた、坊主くづれのやくざ者だ。又藏の亂暴放埒には、流石の小江も、顏色をかへて呆れ返つたが、氣の弱い娘なら、泣き出すかも知れないところを、屹ツと氣色ばんで、唇顫はしながら喰つてかゝつた。

「驚きましたねッ。眞實の事とも思はれませんが、あゝいふ無法な兄ですから、そんなことがないとも限らないと思つて、仰有ることを聞きますなら、お前さん、それで、どうしようと言ふんです？」

「わかり切つてらあ。待つだけ神妙に待つたんだから、いま此處で、借金が返せなけりや、私と一緒に千馬木屋へ來てサ、あの家で三十兩だけ神妙に稼いで貰ふんだ。お前さんだつて、その容色で、こんな茅屋に燻つてるのは、勿體ねえだらう。あの家で贅澤三昧に、面白可笑しく、遊んで暮らしたが

得だと、思はねえことも、ねえだらう。」

と狂齋の臺辭は、だんだん粗末になる。小江の口元には、相手を蔑すみ哀れむやうな微笑が浮んだ。

「冗談ぢやありませんよ。」

「厭だといふのかい？」

「眞ッ平だ。」

「そんなら金を返して貰はう！」

「知りません！」

「お前は知らなくても、お前の兄貴が知つてゐる。男が一旦證文まで入れて約束したんだ。盆莫蓙の上の不義理は、女房を質に置いても、娘を女郎に賣つても、返さなくちや、ならねえのが、渡世人の掟だし、千馬木屋の親分の氣性だから、ペテンにかけて、借金を踏倒すやうな太え眞似をすると、命はねえぜ。な、お前。どうせ三十兩の金は、又藏風情に出來ッこねえんだから、悪いこた言はねえ、私と一緒に來てくれ。來てくれなくつちや、親分の前に、私の顏が立たねえから、金輪際、空手で歸るわけにゆかねえんだ。引摺つてゞもゆくぞ。さあ、素直に膝を立てゝくれないか。」

と、上框から猿臂をのばして、袖を引掴むが早いか、小江はパッと振拂つた。

「何をするんです！」

「吐したな。畜生ッ。女と思つて優しい面を見せりやア、いゝ氣になつて舐めやがる！」

泥草鞋で疊の上へ躍り上つた傴僂の狂齋が、身をかけすひまもない小江の、手首を攫んで、無體に引立てようとする、とたん、横から不意に飛んで來た猛拳の一撃を、歪な頭にガンと食つて、ころころと鞠のやうに轉んだ。上から壓しつぶすやうに、腹卷、褌、素つ裸の巨漢が、鬢髮逆だて眼を怒らして、仁王立ちに突ッ立つた。碇の又藏だ。

「按摩の幇間めッ。不具者のくせに、巫山戯た眞似をしやがると、蹴殺すぞッ。久間吉の野郎に借りた金は返してやる。持つて歸れッ。」

と威勢のいゝ啖呵で、腹卷から攫み出したのが、牡丹に唐獅子の金具も綺羅美やかな、黑革づくりの財布だ。顏を顰めて頭を抱えながら、もぞもぞ起き上つた幇間按摩は、眼を丸くした。

「この又藏を見そこなつたかッ。久間の野郎は、女が欲しくつて、三十兩貸したに違えねえんだが、三十兩ぐれえの半端金で、たつた一人の可愛い妹を、あんなやくざに奪られるやうな、意氣地なしぢやねえぞ。今市に歸つたら、久萬の野郎に、さう言へ。目算が外れて、態ア見やがれつてな。はゝゝゝ。」

小氣味よく笑つて、又藏、驚いてゐる狂齋の前に、三十兩投げ出した。この幇間按摩も、さぞ意外だつたらうが、膽をつぶしたのは小江だつた。

闇を劈く五位鷺の凄い啼聲に、闌けゆく溪澗の夜を、破れ行燈の灯蔭に、膝と膝とを突合せて、項だれ蹲る渡守兄妹の顏いろこそは、悲痛に蒼ざめてゐた。

「勘辨してくれ。博奕に耽けたのは、重々惡い。お前には濟まねえと思つてゐるんだが、勝負に敗ければ敗けるほど、口惜しくはあるし、人手に渡つた田畑、家倉を、どうでも取戻さなくつちや、御先祖に申譯がねえんだから、今に目が出るか出るかと思つて、深みに陷つたんだ。可愛いお前を抵當に借りた金でまで、丁半を爭つたのも、男の意地で、止むに止まれぬ勢ひの力に引摺られたんだ。妹の體まで勝負に賭けるなんて、酷い兄貴だと、お前、さぞ怨んでるだらうが、借りた金は返したから、もう何も言つてくれるな。」

「私は何も言やしないけど、氣にかゝるのは、その金だよ。その革財布だよ。兄さん。その中には百二三十兩といふ大金があるのではないか。いまどき一兩一分の金だつて、落す人もなければ、くれる人もないに、何處でどうして、手に入れたか、それが知りたいんだ。」

「そんなこと、どうでもいゝぢやねえか。」

「いけない。眞直ぐに言つておくれ。ね。言つておくれ……いへないのかい？……心に疾しいことさへなければ、言へないわけはないだらう？……言へないのかい？……言へないんだね？……言へなければ、私が言はうか？」

革財布を前に置いて、石像のやうに押默つてゐる又藏の眞蒼な顏を、小江は凝乎と見詰めながら、聲を顫はした。純情と神秘を湛えて、黑水晶のやうに冷たく澄んでゐる彼女の双眸は、人の胸を抉らんばかり、恠に光る。

「それは、小佐越に渡つた、六部づれの持物だね。さうだらう？」

又藏は愕然として顏を上げた。

「お、お前、知つてゐるのかツ。」

「さうさ。その財布の中から、二分の舟賃を出してくれる時に、チラと見て、珍らしい品だと思つたよ。それを傴僂の前で、腹卷から摑み出したんだからね。私は何んなに驚いたか知れやしない。どうせ盜つたに違ひないが、どうして盜つたか、正直に打明けておくれ。兄妹の仲に、隱し事はない筈ぢやないか。」

「うゝむ。」

顔一杯に膏汗を噴いて、又藏は苦しみ唸つた。

「ば、ば、殺して奪つた！」

「えゝッ!?」

「三十兩の金策に、血眼で駈けずり廻つたが、どうにも工面がつかねえんで、悶え惱んでゐる矢先、お前に聞いた六部の一件。三文の舟賃に、二分くれるところを見ると、豪勢持つてゐるわい。こいつはメたと思つたから、お前には內證で、六部の後を追つかけると、下瀧の手前の松並木で、追ひついたから、腹にもねえ言ひがゝりをつけたんだ……汝等は小佐越の渡船を、無賃で渡つた六部どもだなッ。俺の妹を瞞して、十三人も無賃で渡るとは、太え女どもだ。俺を誰と思ふ？　この界隈ぢや、知らねえ者はねえ、碇の又藏だッ。俺が聞いたからには、默つちやゐられねえ。舟賃の二文や三文が欲しいんぢやねえやい。このまま通しちや、俺の顏が廢らア。汝等の盜人根性が氣に入らねえつてんだ……と咆え立てた。」

「まあ！　ひどい人だ。」

「すると、女六部どもの中から、お供の爺さんが出て來て、矢表に立ちやがり……これは怪しからん。

舟賃は餘分に與へた筈ぢや……と吐す。いゝや。受取らぬ、と俺が言ふ。双方一歩も引かねえんだ。ふん！　爺に女、子どもばかりだから、俺の權幕に怖れて、怖え上るだらう。罪な話だが、怖え上つたところに附け込んで、三十兩ゆする心算だつたが、奴ら、怖れねえばりか、威丈高に齒向ふんだから、思惑はづれて、喧嘩になつちまつた……盜人根性とは貴樣のことぢや。われ等を女、子どもと侮つて、いたぶらうために、無法な言ひがかりをつける。無禮者め。さやうの惡徒を打棄て置いては、道中諸人の難儀……とか何とか吐しやがつて、火のやうに怒つた白髮の爺。持つてゐる竹杖をスラリと引拔いたら、双渡二尺ばかりの刀よ。ほんたうに俺を斬る氣なのか、脅かして追つ拂ふ氣なのか、電光のやうにピカッと、横ばらひに來たから驚いた。危かつたなア。危かつたよ。ハッと思はず跳び退くと、二の太刀つてのか、隙さず踏み込んで來る。元は武士らしい爺だが、齡には敵はねえや。足もとが見えねえで、岩根に躓づいて、よろよろ、つんのめりやがつた。畜生。ほんたうに俺を斬る氣だつたのか！　老ひぼれめがと思ふと、クワッと頭に血がのぼつて、後は夢中さ。俺の手が腰の山刀にかかつたのも知らねえ。爺の肩を割り下げたのも、よくは覺えねえ……舅の仇……年增女が懷中の短刀で、必死に突いて來たのを引ッぱづして、逆に薙倒すと、四方八方から、子どもらが泣き叫んで跳びつき絡みつくんだ。一人殺すも何人殺すも、罪は同斷だ。生かして置いちや事面倒だから、後の

祟りのないやうに、片つ端から打つた斬つて、崖から川へ蹴落した、この革財布は、年増女の懐中にあつたのを、抜取つたんだ。」

血に荒れ狂ふ羅刹の姿が、眼にうかぶ。これが兄か？　これが人間か？　眞實のことゝも思はれぬ慘虐な又藏の告白に、小江は身を顫はし、顔を蔽ふて、消え入るばかり泣き伏した。

峽風愁ひをおびて冷かな曉の、壁の隙間から流れ入る青白い微光が、渡守兄妹の姿を、陰慘に隈どり始める時刻だつた。死の沈默を破つて、表戸をドンドン叩く音に、兄妹は跳び上らんばかり狼狽へた。

「ど、どなた？」

「山裏の喜作だッ。」

「あ。喜作さんですか？」

「ちよいと起きてくれッ。」

「はい。只今。」

小江が立つて表戸をあけると、腰に魚籃を下げた農夫が、たゞならぬ顔つきで轉げ込んだ。

「ひやア。前代未聞の大椿事だア。俺と助次の野郎と、朝釣りに出かけて、見つけたんだ。中岩の下

流の川堰に、人間の死骸が引ッかゝつて、瀞に浮いてるんだ！　一ツや二ツぢやねえ。爺さまと女、子ども、合せて十三人！　お題目の經帷子に、血だらけの白衣を着てる六部達の、二目と見られねえほど、慘く殺られた屍體だ！　助次の野郎が觸れ廻つたんで、村の衆が出て來て、わいわい騒いでらア。一體全體、何處から流れついたのか、昨日、小佐越から下瀧の方へ、六部達が歩いてゆくのを見たといふ者もある。松並木の崖道を通つたら、谷底から人間の呻き聲が、聞えたといふ者もある。殺された場所は、どうやら松並木らしいだ。山賊の仕業か、山窩の所爲か、六部を手にかけるとは！　女兒の命まで奪るとは！　恐ろしい鬼畜ぢやねえか！　打ッちやつては置けねえや。恨みを呑んで死んだに違えねえ。祟つちやいけねえから、懇ろに葬つて、石塚でも立てようではねえか、といふんだ。俺に行つてくれッてんで、飛んで來たんだが、死骸を引揚げなくちや、ならねえから、舟を出してくれ。」

と息もつかぬ急しさ。又藏の顔色は土のやうだつた。目覺めて來た良心の、苛責に堪えかねてゐる彼の苦闘が、小江にはよくわかる。彼の眼には、六部達の斷末魔の、恐ろしい形相が甦へつて來たのだ。彼の耳には、救ひを求める悲鳴と、呪ひの叫びとが、鳴り響いてゐるのだ。十三人の慘死體を見にゆくなんて、思ひもよらぬ。

「宗旨が異はア。お題目なざア、大嫌えだよ。あいにく、昨夜から氣分が悪いんだ。折角だが、出られねえ。」

「そいつは困つたな。舟が出なくちや、死骸の始末がつくめえに、漕げねえかい？」

「駄目だ。」

「私がゆきませう。」

雄々しくも小江が立ち上つた。

碇の又藏は爐ばたの大胡坐で、茶碗酒を呷り續けてゐる。いくら飲んでも、醉へない酒に強いて醉ひを求め、犯した罪の恐怖を追ツ拂ふ、心の苦悶から、遁れようとあがくのだ。頤を襟に埋めて、小江は涙に濡れてゐたが、ふと、異常な決意を眉宇の間に浮べて、首を擡げると、又藏を凝視した。

「私は覺悟をきめて言ふだがね。兄さん。六部達の死骸は、先刻も話した通り、檢死がすむと、村の衆、總掛りで、砥川の岸を掘つて埋めて、石塚を立てた。（これが十三塚だ。鬼怒川溫泉行電車、砥川踏切にあつたが、明治三十五年の洪水で流失し、この悲話と十三塚の地名だけが殘つてゐる。）延命寺行者堂のお坊さんが、お經を上げておくんなすつた。それで事件は片づいたんだ。村の衆も役人方も、下手人は山賊か山窩と睨んで、その方に手配するらしい。山々谷々の草の根を分けても、捕へるまでは、根氣よく探索すると、意氣込んでゐるから、いま直に此處へ、手が廻る心配はないけど、早かれ晩かれ、お前の仕業といふことが、發覺せずにはゐないよ。この事件が評判になつて、世間にひろがると、傴僂に見せた革財布や、千馬木屋に返した三十兩の小判が、物を言はないとも限らねえし何處から足がつくか知れねえんだから、一日も安心は出來ねえんだ。お前を脅かすわけぢやねえが、お前は人間が犯したこともねえほど、非常い罪を犯した。お前はその罪亡ぼしをしない限り、一生苦しまなくつちやなるめえ。それよりも、今は大事な時だ。決心する時だと思はねえかい？」

「決、決、決心とは？」

「屑く自訴しなせえ！」

沈痛な聲を震はして、小江は突刺すやうに、凛と言ひ放つた。

「と、とんでもねえ。俺は逃げようと思つてるんだ！　東も西も南も北も、戰爭の世の中ぢやねえか騷擾に紛れ込んで、姿を晦ますには、誂へ向きの旅の空。この財布の金さへありや、何處へ行つたつて、不自由はしねえ。我と我が首を、獄門に晒す痴漢があるかッ。お前もつれてゆく。」

「卑怯な兄さんだね。何處へ行つたつて、罪の重荷は、お前に憑き纏ふて、絶え間なしに、お前を虐

むだらう。お前は、さうして酒をガブガブ飲んでゐるが、酒で忘れられるやうな、生易しい苦しみぢや、あるめえからな。私は不人情かも知れない。兄妹の愛情がないといはれるかも知れないが、十三人も人を殺して、自分は助からうといふ量見の、お前と道づれになつて、暗い月日を怯々しながら、命を刻むやうに、一寸のびに生活してゆく氣にはなれないよ。」

「ぢや、お前は何うする？」

「髪を落して尼になる。覺悟をきめたといふのは、そのことさ。六部の夫人に、二分の舟賃を貰つた話を、お前にしさへしなけりや、こんな事態にはならなかつたんだ。死んだ人達は、さぞ無念だらうと思ふと、私は胸を掻き搔られるやうに辛い。知らぬことゝは言ひながら、罪の種は私が蒔いたも同然。せめては尻にでもなつて、あの人達の後生を弔ふたら、少しは怨みもはれるだらうと考へた。お前が自訴するのは、厭といふなら、仕方ねえ。私は直ぐにでも行者堂へ突ツ走る。」

「俺と一緒に、旅に出てはくれねえのか？」

「行きてえのは山々だけど、勘忍しておくれ。私の良心がゆるさねえ。」

「お前は俺に死ねといふんだなッ！」

「逃げろ、といふのが、兄妹の情だらうが、所詮は捕まるのに、逃げ廻つて、生地獄の苦を見るより

も、その方が優ではねえか。」

「ふうむ！」

又藏は考へ込んでしまつた。怪しく据つた酔眼は、物凄い殺氣を帶びて、鋭く光り出し、わなわな震ふ手が、背後の壁にかけてある、薪割りの斧の柄を、握りしめたかと思ふと、ガクリと俛れた小江の頭上めがけて、今や打ち下さうと身構へる、とたん、何か異様な物音でも、聞きつけたやうに、ピクッと耳朶を欹てゝ、戸口を見るや否や、恐怖の叫びをあげた。

「六部！　六部！　六部が來たッ。」

「何處に？」

と小江は振返る。

「あれ、あれ。戸口に立つてゐる！」

「誰もゐやしねえよ。」

「あ、あ、あれが見えねえのかッ。血まみれの六部どもが、列んで突ッ立つてるぢやねえか？　畜生俺を睨んでるぞ！」

「そんな者はゐやしねえ。兄さん。しッかりしなせえよ。」

「聾め！　あの鉦の音が、聞えねえのかッ。あ、あ、あッ、入つて來やがつた。うわあッ。」

と疊に突伏した、が、忽ち、狂的な昂奮に、ガバと跳ね起き、

「怖かねえぞ。幽靈共。さあ來い。鏖殺だッ。」

斧をふりかぶつて、虚空を斬りまくりながら、戸口へ突進し、喚聲をあげて街道へ躍り出す。

「兄さん！」

小江も跣足で後を追ふた。又藏は眼に見えぬ敵と、空しい鬪ひを續けながら、松並木の此方岸へ驀地。淵に峙つ巖頭へかゝると、こゝを先途と、死にもの狂ひに、斧を振廻してゐたが、巖角から足を滑らして、眞逆樣に谷淵へ。革財布は黑胡蝶のやうに、宙に飜へつて落ちた。後を追ふて來た小江は、

「あッ。」

と顏を蔽ふて、崖の上に崩折れてしまつた。前後のことも覺えぬまゝに、どれほどの時を過したか氣がつくと、逞しい男の腕に背後から絡みつかれてゐた。鼻を打つ酒の臭ひ。

「誰ですッ？」

「俺だよ。へゝゝ。市太郎だ。お前。どうしたんだい。こんな處に坐り込んぢやつて？」

「は、は、放しておくれッ。」

小江は市太郎の腕から遁れようと、力の限り爭つたが、男の强力には敵はない。

「はゝゝ。じたばたするんぢや、ねえッてことよ。今日はお前に話してえことがあつて、お前を搜し廻つてたんだ。俺は傴僂の狂齋に聞いたんだが、六部衆を殺めたのは、山賊でも山窩でもねえ。お前の兄貴なんだらう？　わかつてるんだ。御大層な臺辭を列べて、三十兩叩きつけたさうだが、その金は六部衆から奪ひ取つたんだな。恐ろしいことを仕出かしたもんぢやねえか！　恐れ乍らと訴へて出りや又藏の生首は、三尺高え處で、見世物になるんだぜ。おい。友達甲斐に默つてゐてやるから、魚心に水心、俺の言ふことを諾くか？」

「厭らしいッ。」

「何ッ？」

「獸ッ。」

「吐したなッ。」

死力を竭して抵抗ふ小江を、無理無體に捩伏せて、馬乘りに乘しかゝる、背後から飛んで來た足音の主。市太郎の襟首を摑んで引倒した。跳ね起きざま、彈丸のやうに體を固めて、

「助の野郎めッ。」

と打衝かるのを、肩車にかけて、骨も碎けるほど、激しく地べたに叩きつけた。

「助次郎さん！　兄は谷底へ落ちました！」

助次郎の胸に取縋り、わッと小江は泣出した。

「今日は十五日の仕事休みを幸ひ、お前の家へ、悔みに行かうと、思つてたところだつたよ。山裏の助次郎に訊いて、驚いたが、又藏が松並木の崖から落ちて、死んだつてえぢやないか。彼奴のことだから、大方、酒に啖ひ醉つて、跚け込んだらう。又藏らしい往生ぶりだ。生きてりや、他人の迷惑になるばかり、死んだ方が、お前のためにも仕合せ、とはいふものゝ、あの若さで佛になつて見れば、可哀想な氣もする。金を貸してくれ。貸さなきや、ここの井戸に陷つて死んでやる、なんてね、胡坐かいて愚圖る者も、ねなくなつたかと思ふと、淋しくもある。はゝゝ。意氣地のねえ小心者のくせで、酒を飲むと、猫が虎になる奴だ。生れつきの惡ぢやねえんだが、朱に交じはれば朱くなるで、惡仲間に引摺り込まれて、性根を傷め、身を崩しちまつたんだな。氣の毒な男だよ。聞けば十三人の六部が、殺されたのも、彼處だといふが、魔所だぜ。夕景から先は、人通りもないさうだ。」

と言ふのは、小江の外叔父にあたる、大桑の石屋の親方政五郎だ。十人ばかりの徒弟を率ゐて、日

光山の仕事をやつてゐた。大桑は高德から半里もない、街道筋の宿場で、こゝの「石政」といへば、近在に聞えてゐた。

「助次郎の話によると、又藏の死骸は岩に碎けて滅茶々々で、引揚げることはおろか、手のつけようもねえんで、お前と相談の上、重石をつけて、水葬にしたさうだな？」

「はい。據ろどざいませんから、助次郎さんに、手を貸して貰つて、淵に沈めました。」

「それも爽々してよからう。こゝで死んだといふ印に、卒塔婆の一本も立てるんだな。」

「それで石屋の叔父さんに、お頼みに上つたんです。あの松並木の草叢に、石塔のやうな圓い形の、大きな自然石が凸出てゐるんです。」

「ふむ。」

「その石にお題目を彫つていたゞきたい、と思つて、行者堂のお坊さんに、下字を書いて貰つて來ました。」

小江は懷中から、薄漉しの卷紙を出して、政五郎に渡した。南無妙法蓮華經の七字を、達筆に認めたものだ。

「日周さんの書だな。いや。承知した。俺も供養のために彫つてやるが、明日からはまた日光山の仕

事で、俺の手が塞がるから、直ぐに取りかゝらう。」

「御苦勞様ですが、お願ひいたします。」

「造作ねえ。こんなもの、二刻もあれば澤山だ。」

政五郎は、偶の休日を遊びに出そこなひの弟子達に命じて、道具を揃へさせた。

「お前も獨りぽっちになつて、寂しいだらうな。女一人ぢや、渡船稼業もやつてゆけまい。」

「ですから、助次郎さんに讓りました。」

「そいつは手廻しがいゝな。あの男なら心配はないが、お前はどうする?」

「私はこれから身の振り方を決めようと思つてるんです。いづれ御相談に上りますから、どうぞ宜敷く。」

「うむ……さあ出かけるから、案内してくれ。」

政五郎は道具箱を肩に、小江と連立つて家を出た。赤薙山の谷から流れて來る川を渡つて、柄倉、小佐越を過ると、下瀧まへの松並木。

「人殺しでもありさうな、陰氣な場所だな。」

「兄が落ちたのは、向ふの崖ですが、死體を沈めたのは、この眞下の淵です。これが石ですよ。」

と小江が指さす、大きな青黑い自然石は、溪谷に蒞む崖ツ縁の、草叢に屹兀と立つてゐた。

「成る程。恰好の石を見つけたもんだね。直に彫るから、お前、そこらで憩うてゐな。」

政五郎は、お題目の下字を、水糊で石の面に張りつけると、鑿と槌で彫り始めたが、南無妙法蓮華經の頭字「南」が彫り上らうとする時だつた。

「おやツ。」

「何です?」

「彫るのを止めろ、といつたのは、お前か?」と、背後で見てゐる小江を、政五郎はムッとした表情で振り返つた。

「いゝえ。」

「さうだらうな。お前の聲ではなかつたが、他に人はなし。」

「誰も何とも言やしませんよ。」

「いや。確に聞えた。」

「氣のせいでせう?」

「馬鹿をいへ……止めろ。政五郎……て大聲で呶鳴つたんだ。」

「厭ですよ。脅かしちゃ。」
「脅かしやしねえ。耳ッ端で聞えたんだ。」
「そんなことは、ありませんよ。」
「變だな。」と呟きながら、政五郎はまた彫り續けたが、
「おやッ。」
「何です?」
「畜生ッ。」
青筋立てゝ振向いた。
「他人の聲色なんか、つかひやがつて……政五郎。まだ止めねえか……とは何だッ。」
「あら、私、知りません。」
「いゝ加減にしろ。お前のほかには、誰もゐやしねえぢやねえか。自分で言つといて、知らねえことがあるかッ。」
「だつて、私、そんなこと、言つた覺えがないんですもの。私から叔父さんに頼んで置いて、止めろなんて、言ふわけがないぢや、ありませんか?」

「巫山戯ちやいけねえ。言はねえものが、聞えるかッ。」
「叔父さん、どうかしてるわ。」
「やいッ。年は取つても、耳はまだ耄碌しねえ。」
「ほんとに、そんな聲が聞えたんですか?」
「誰が嘘を吐く!」
「まあ氣味が惡い。」
「なんて呆けてら。今度言つたら承知しねえぞ。」
と小江を一睨み。政五郎はまた彫り續けたが、「南」の一字を彫り上げたかと思ふと、
「あッ。又藏の顏が!」
鑿と槌を兩手に持つたまゝ、食ひしばつた缺け齒の間から、眞白い泡を吹いて、驚きあわてる小江の足元にぶッ倒れてしまつた。

宇都宮本郷町延命寺の末派高德金山麓の、行者堂主を日周といふ。鄙には惜い有德の老僧だつた。その日周の膝下に、額づいてゐる娘が小江である。

「十三人の六部を殺めたのは、又藏どんの仕業であつたのか？」

「はい。私の體を抵當に、今市の千馬木屋から借りました金三十兩を、博奕で取られました。その金を返さねばならぬ義理に迫られ、犯した人殺しの罪に、我が身も氣が狂ひ、同じ谷淵に落ちて、無殘な最期を遂げましたのは、十三人の怨靈の祟りと思ひました。先日、貴僧樣にお願ひして、お題目を書いて戴きましたのは、六部十三人の供養のためです。」

「ふうむ。」

「あのお題目を、六部達が殺されて蹴落され、又、兄が死にました谷淵の眞上にある自然石に、彫つて貰ひますのに、御存じかと思ひますが、私の叔父にあたる、大桑石工政五郎に、賴みましたところが、南無妙法蓮華經の「南」の一字を彫り上げたその場で、齒を食ひ縛つて卒倒しましたので、私は大桑まで脊負ふて歸りましたが、今は足腰も利かない病人でございます。これが死靈のなす殃とは、思ふ者もありませんので、叔父政五郎に代つて、一番徒弟が彫りましたが、お題目の二番目の「無」の字を彫り上げましたところで、政五郎と同じく、アツといつて打倒れました。齡が若いせいか、足腰の立たぬ病人、といふほどの騷ぎになりませんでしたが……然しこれは不思議だぐらゐにしか考へませず、血氣盛りの弟子達が、代る代る、鑿と槌を取つて「妙」の字を彫り、「法」の字を彫り、「蓮」

の字を彫り、「華」の字を彫るといふ具合、一字づつ彫つては、其場で悶絶するのです。彫つてゐますと、何處からともなく「止めろ」といふ聲が聞えて、止めずにゐると、血だらけの又藏の顏が、眼の前にヌツと現はれて、睨みつけるんだと、みんなが申します。」

「恐ろしい妄執じやのう。」

「はい。それが、いろいろ怪しい浮說となつて、人から人へ、宿から宿へ傳はり、松並木の自然石に手を觸れると、癲癇を起すとか、腰ぬけになるとかいつて、石政の弟子も、最後に殘つてゐる「經」の字を彫つてくれませず、近在の石屋へ、賴みにゆきましても、慄毛をふるツて斷る始末。折角の願も果し得ないで、口惜しうございますが、私も恐ろしくなりまして、彫りかけたまゝにしてあります。」

「衲もその噂は聞いてゐる。死者の魂魄此世に留まる限りは、諸々の殃禍をなすわ。迷ふてゐる。」

「はい。迷ふてゐる人達の亡魂を慰め、菩提を弔ひますには、佛の道に入つて、供養する他はないと思ひます。佛の功德によりまして、兄の罪障も消滅することゝ思ひまして……」

「うむ。」

「渡船稼業も他人に讓り、石政の叔父とも相談の上、浮世の羈絆を斷ち切つて參りました。尼僧にな

りたいのでございます。貴僧様の御手によつて、この髪を落して下さいまし。伏してお願ひいたします。」

「諾。」

と日周は頷く。

小江は老僧に向つて合掌した。

櫓をとつた手に珠數を爪繰る墨染の衣。行く先は遠い越後南魚沼の尼僧學林へ、小江が發足したのは、この日である。鬼怒川名物の娘渡守は、かくてその影を消し、漂渺たる欵乃は絶えてしまつた。

日蓮宗のお題目は七字だ。日本に唯一ツといふ、珍らしい六字の題目を刻んだ碑は、鬼怒川溫泉行き電車沿線小佐越驛の、溪谷に架かる釣橋の畔。生ひ茂る草叢の中に、寂しく立つてゐることを、知つてゐる人があるだらうか？

秋の夜の旅

一

血紅の綾緯をまとへる山にも谷にも老頽の影見えて、紅葉の季節は終りに近づきつゝ、上越國境は狩獵の絶好季に入らうとしてゐる。山の人達の話によると、昨年は存外獲物が少なかつたさうだ。その代りといふわけでもあるまいが、今年は山鳥や雉子の豐年だといふ。熊も獲れる。山鳥や雉子は無論だが、熊といふ奴は好んで楢の實を喰ふ。その楢の實が今年は非常な不作なので、山鳥も雉子も熊も他に喰ひものを探すべく、山奥から村里近くまで出稼ぎに來るのである。人間社會もさうであるが鳥や熊の社會も不景氣な年と見える。鐵砲うちに取つては有難い仕合せであらう。擊たれる方はいゝ面の皮だ。

私は山に來てからまだ幾日にもならないのに、山鳥や雉子の素晴らしい奴を、五羽十羽と引つ擔いで山道を迂路つきまわつてゐる狩衣のスポーツマンに幾度となく出會ひ、その山の幸に惠まれてゐる

のを羨ましくさへ思つたことだ。また私が山に來てから、熊も四頭あらはれた。こんなことは滅多にありはしない。そのうち二頭は三人の玄人狩獵家に射殺された。時價一頭金八十圓ぐらいださうだ。内譯をすると、いはゆる熊の膽だけで金六十圓。毛皮が金十圓、肉が金十圓といふ。景氣のいゝときなら一頭百五十圓から二百圓もするのが半値に下落してゐる始末だ。

一匹分の熊の肉がたつた十圓とは呆れるほど安いではないか？　これは上越國境三國街道なる西入の諸湯の關門。湯宿溫泉での話だが、この附近の駒形山……初戀山……雨見山……唐澤山の山腹や山麓が鳥打ち熊打ちの中心區域になつてをり、山奥に入り過ぎると却て獲物はない。山はこれから愈々食ひものに乏しくなるから、隨つて鳥氏や熊公の下界進出も頻繁になるだらうといふ取沙汰だ。これらの山々の間をうねつてゐる廢徑……紅の色褪せ衰へんとしてゐる三國舊街道の惡路を、私と山の友人H氏S氏の三人は、リュクサックを脊に國境へ向つたのである。先程の湯宿より永井を經て峠に登りついたのが、十一月三日午前十一時。前方に聳えてゐる苗場山の扁平尨大な頭は、もう眞白くなつてゐるだらうと思つてゐたら、まだまだ秋の粧ひのまゝだ。峠から一里下つて越後の淺貝に入る途中杖をつくるために白樺の疎林に踏み込んで枝を切つた。

そんなことまで書くには及ばぬかも知れないが、この杖一本のお蔭で辛と歩けるやうな辛い目を見

るに至つたのだから、私に取つては忘れがたい思ひ出なのだ……冬ば屋根まで雪に埋もるといふ淺貝の部落から、上越國境三國山脈と信越國境の峻嶺に夾まれてゐる清津川溪谷に沿ふて、二居部落に入る頃、雪國の日は早くも傾き、荒寥たる山溪の眺めは寂しく寒い暮色につゝまれかけて來た。私達はこれから五里の山坂を越えて越後湯澤へ出るのだが、既に草鞋はズタズタに摺り切れてゐるし、腹も空つたし、この邊でガソリンを注ぎ込むことにして、この二居部落の農家兼木賃宿に飛び込んで、干饂飩を煮て貰ひ、切餅を三切燒いて貰つたのだが、上州の人間に比べると、越後もこの附近一帶の者は色が眞黑で根性が惡いやうに思はれる。

二

そこへ持つて來て今まで多少は人通りもあつた此の越後側の三國街道筋が、清水トンネル開通以來交通杜絶の狀態に陷つてしまつたので、俄に生活を脅かされたせいもあらう。偶々私達のやうな旅人でも舞ひ込んだら、引つ捉へて生膽でも刳りかねないほど悲愴な量見になつてゐる姿があるやうだ。恐ろしい貧村で引ツかゝつたら百年目と來る。女房が拵へてくれた不味い干饂飩だから四杯で三十錢も置けば澤山だらうと思つて「いくらか？」と訊いたら、落ちつき拂つて「一圓五十錢」と來た。高

いこと日本一だ。私達はこの女房の膽力に氣を呑まれて外へ出たが、暫くは物も言へなかつた。坦々たる道路は溪谷の岸に沿ふてゐる。空を仰ぐと星屑はギラギラ閃めいてゐるが、眞つ暗い夜だ。わづかに仄白く浮いて見えるのを賴りに、私達は二足目の草鞋で歩き出したる道。二居部落から十丁ばかりで絶壁の端を迂廻することになつて、懸崖の上から闇をすかして俯瞰すると脚下遙かに溪流の白さが朧げに見ゆるところもある、が、大部分はたゞ水の音を暗中に聞くばかりである。崖上の歩道は濶葉樹の落葉に深く埋もれてゐるかと思へば、谷底へ崩壞してゐる個所もあつて頗る危險だが、それよりも更に悲觀すべき行き惱みを感じて、幾度も立往生を演じたのは、時々歩道が山腹の森林に入ると……私は鳥目ではないつもりだから、近視のせいかも知れない……全く一寸先も見えなくて一歩をも踏出すことが出來なかつたからだ。かういふ場合を見越して拵へた白樺の杖ではないのだが、お蔭で助かつたといふのは、先登のS氏が杖の先端を持ち、殿のH氏がその後端を持ち……何のことはない盲人が杖を曳かれてゐる姿だ……私が間に夾まつて、杖の眞ン中を握り、ソロソロと足摺しながら歩いたことである。この盲人の道中を何遍かくり返し、貝掛溫泉の幽かな燈火を溪流の對岸に望み、漸くのことで三股の宿に入つたときはホツとした。

清津川溪谷の風景も新耶馬溪の奇勝も、かう暗くては仕方がない。こゝまで八里ばかりの街道に點

在する人家は石油ランプをつけてゐたが、こゝから先は電燈をともしてゐる。湯澤溫泉まで二里半といふ。貨物自動車を二臺持つてゐるといふのが村民の御自慢らしく、貨物自動車とはいふけれども、生きた荷物も運搬する。それが昔、大名の宿泊所だつた本陣にあるから、行つて賴めば湯澤まで運送して呉れるといふ。試みに本陣に行つて掛合ふと、晝間は三圓五十錢で乘せて行つてやるが、夜間は四圓でなくちや厭だといふ。貨物自動車のくせに、たつた二里半で四圓なんて篦棒な話があるものか……そこでまた歩き出した私達は八木澤の宿を過ぎて名代の柴原峠へかゝつたのである。名代の峠といつても標高の大きさや道の嶮岨を意味するのではなくて、二里の間を實に氣永くダラシなく蜿蜒として廻り廻り蛇行してゐるところが、土地の人の所謂名代らしい。眞つ暗で判らぬけれども景色は平凡なものらしい。登つて下るのにウンザリしたばかりでない。既に二足目の草鞋もボロボロに千切れて履替がないから、足袋はだしになつてしまつた。

三

東南に上越アルプス東部中部連峰を置いて、清水トンネル長岡口土樽から三つ目の湯澤驛は谷底の猫額大な盆地にある。溫泉場は驛から十丁あるなしだ。驛前に迂路ついてゐる人相の悪い客引がやつ

て來て「手前の家は一泊一圓五十錢です。御相談によつては一圓にまけます」といふので、「よからう」と答へた。客引は、驛前の案内所に控へてゐるボロ自動車を呼んで「このお客さん方を宿へおつれ申せ」と言つた。さうして私達を車の中に押し込んだ。自動車は軋て高半旅館といふ宿屋の畔に着いた。「五十錢いたゞきます」と運轉手が言つた。私達は古色蒼然たる高半屋の二階の古色更に蒼然たる部屋に通された。そこでまた人相のよくない若番頭君が、宿帳を持つて入來に及んだ。

「えゝ。皆さんの御職業は？」と尋いたので私が代表者になつて、

「著述だ」と答へた。然し番頭君は、「はゝあ。なるほどさうですか？」とは言つたけれども、これを宿帳に記入することを略いた。著述といふ文字及びその意味を知らなかつたのである。入れ替つて宿の細君らしいのが辷り込んだ。

「お泊りは二圓五十錢から三圓四圓でございますが、どれに致しませうか？」と言ふ。

客引は嘘を吐いて私達を咬へ込んだのである……後で聞いて見ると此の邊の溫泉場は大體こんな傾向ださうだ。……女中は飯を盛つてくれない。客は自分でつがねばならぬ。盃を取つて「お酌をしてくれ」といへば「お酒のお酌には藝者がゐます」と言ひながら女中は横を向くことになつてゐる。用があつて呼べば「もう寢てしまひました」と來る。客はまだ飯も喰ひ終らないのに、受持の女中が寢

るなどは奮つてゐると思つた。昔から斯うした風俗なんだらう。いやに藝者の押賣をすると思つたら藝者の方でも宿屋の湯室まで押出して來て……女湯があるのに……男湯に入つてはしやいでゐる。見てゐると彼女達のなかに、溫泉から上つて、お灸の痕の一ぱいついてゐる薄汚い尻を拭いてゐるのがある。ふき終つた手拭を、浴槽のなかに浸つてゐる男等……彼女の客でもない男等に向つてボーンと投げる。受取つた男はその手拭で顏を洗つてゐるから珍だが、藝者の揚げ代が一時間一圓で二時間目から一時間毎に七十五錢ですなどゝ自ら廣告しながら、客を誘ふてゐるのも、他所では一寸見られぬ圖ではないだらうか。溫泉や藝者のことなんか何うでもいゝとして、私達は此の邊の山に雪が降つたといふ消息を聞いて、雪の山をエンジョイしに來たのだ。來て見ると一向そんな樣子がないので宿の主人に訊いて見た。

「降ることは降つたが最近の暖氣で消えてしまつた」といふ返事。がツかりした。此の溫泉場附近の山は何處でもスキーの出來る、雪の名所だ。村には世にも極珍滑稽な名前のついたスキーヤーの集團がある。『偉スキー猛團』といふがそれだ。「ヱスキモー團』の洒落でもないやうだし『ウキスキー飲モウ團』の間違ひでもないやうだから三人とも噴笑してしまつた。

雪の中の浮世

一

越後石打驛を南十丁の街道筋。關山宿の饂飩屋である。老亭主に婆さんに私の三人が、店の爐を圍んでゐる。爐の中では瘤だらけの桑の枯れ根が、蛇の舌ほどの赤い焰をあげながら、ちよろちよろと燃えてる。前は土間だ。行商人風の男が床几に腰かけて、丼の饂飩をふうふう吹きながら喰つてゐる。男の背後の硝子ごしに見えるのが、雪をかぶつて銀白に耀く飯士山の肩である。

「降り止んだと思ふたら、風になつたな。」

「オソゲナー風だよ。」

「牛蒡ほりは辛からう。」

さう言ふところへ、ガタガタ震ふ硝子戸を、やけに引あけて、表から飛び込んで來た印絆纏胴着の壯漢……村の料亭の若い衆だつた。

「寒いなあ、オバア。」

「おゝ。民さんかい?」

「うむ。菊ちやんは?」

「菊坊は牛蒡ぬきに行つたがね、用かい?」

「あゝ。お座敷だ。」

「へへえ。珍しいね。」

「うむ。東京からスキーに來た三人づれのお客さんだ。いま君ちやんとお兼坊にも口をかけて來た。菊ちやんにも來て貰えてえ。」

「さうかい。そりやどうも、わざわざデカシマシタ。いま呼ぶツサカイ。」

婆さんは草履を突かけて、裏口の油障子を引あけた。外は處々に雪圍ひをしてある野畑だ。

「オ——イ。オ——イ。」

婆さんは呼びつゞけながら、頻に手招ぎをしてゐたが、やがて油障子を締切つて、爐端へ戻つて來た。

「通じたか?」

「あゝ。スンマに來るだスケェ、上つてお茶でものまつサイ。」

「いや。俺ア忙しいから、歸るべえ。菊ちやんに大急ぎで來るやうに賴むぜ。いゝかい。オヂイ。その三味線を取つてくんな。俺が持つて行つてやる。」

「そりや、ハア、濟まんこツたのウ。」

爺さんは背後の壁にかけてある三味線と、手垢のついた撥を取つて、若い衆に手渡した。三味線の胴皮の破れ目には、膏藥が貼つてある。それを露出に持去つた。饂飩を食つてゐる行商人風の男が、物珍しさうに言ふのだ。

「菊ちやんといふのは藝者かね？」

「へい。さうでェす。」

「お婆さんの娘かい？」

「いゝえ。孫でェすよ。」

「ふうん。こんな山村にも藝者がゐるとは、豪氣なもんだ。あつはつはつ。」

「そりや、お前さん。驛の向ふに上野溫泉、大澤山溫泉といふ湯治場があるだスケソイ。冬場は雪で客がねえから、商賣が暇で家に歸つてるけんど、春夏秋は繁昌するでェす。家には居ねえでェす。」

これがお客さんに對する婆さんの東京辯だ。彼女の孫娘である山藝者が歸つて來た。

一

筒袖に山袴。藁沓をはいて、獵師のかぶるやうな羅紗地の黑頭巾……この邊ではゴシとかブウシとかいふ奴……を眉ぶかにかぶつた二十三四歳の山藝者菊子が、大きな牛蒡を十四五本引ツ下げて、裏口から入つて來た。鼻は赤蕪、全身は雪だらけ。私が言つた。

「やア。ころんだな。」

「うん。雪ン中ア、ツキサクツて來る途中で、ハア、カチコロンだんだよ……オバア……オラを呼んだのは何の用かい？」

「お座敷だよ。白瀧亭の民さんが呼びに來た。」

「ふうん。客は村の野郎かい？」

「あに吐くだい。藝者など揚げて騷ぐ熱が、村の衆にあるだかね。姥ケ島原のスキー場に、東京からやつて來た三人づれのお客だとよ。お君やお兼にも口をかけたから、お前も大急ぎで來てくれといふことだ。家の三味線、引抱えて失せをつたがな。」

「さうかい。ぢやスピーロで仕度すべえ。」

牛蒡を土間に置いて、雪を拂ふと、藁沓を脱いで上り、奥の部屋……といつても二間しかない……に引込んだが、暫くすると筒袖を銘仙の長袖に着替へ、メリンスの帶をメて現れた。山袴は佩いたまゝ。面は白粉の荒塗り。そいつを白兎の後足……これが眉刷毛なんだ……兎の後足で撫で廻しながら爐端に備へ付の漬物の丼の杉箸を一本取つて、火の中に突ツ込んだ。黛を拵へる魂膽らしい。懷中から覗いてゐるのは仁丹の懷中鏡。頭髪は手束ねの銀杏返しだ。この邊の藝者は、みんなさうだが、この女の手も、ヒビとアカギレで赤黑く腫上り、泌み出る血が一面に錆びついてゐる。

「物凄い手だね。」

「あゝ。百姓するだからな。お前さん。俺アちよツくら行つて來るダスケソイ。遊んでおらツサイ。土產持つて來るだよ。」

「土產といふのは、茹蛸の足だらう。食ひあまりの蛸の足を、新聞紙に包んで持つて來るんだらう。この邊の藝者は、茹蛸と漬物のほかに、食ひ物を知らないのか、客の面を見ると、定つたやうに、蛸が食ひたいと言ふんだ。」

「まさか！」

「さうなんだよ。蛸の足がどれほど珍しいか知らんが、たまのお座敷だから、もつと氣の利いた餌食をねだれよ。どうだい。君のその凄手で、客の生膽を抉り取つちや？」

「あゝ。生膽でも出臍でも造作はねえよ。フ、、。ふんとに、ゆつくりしてクラツサイ。」

と言ひながら、防寒具を引被つて出て行つた。

菊子と懸違ひに、百姓體の男が熊のやうに、のツそり入つて來て、爐端に上り込んだ。

三

この熊のやうな男は、嘗て藝者菊子の亭主だつたんだが、頭に異狀が起つたとかで、夫婦別れをしたのである。自分を離緣した女の家へ遊びに來るんだ。どこか頭に間違つたところがなくては、出來ないことだらう。これが行商人風の男に言葉をかけた。

「お前さんも東京者らしいが商賣は何だね？」

「私は女の髮の毛を買つて歩くのが商賣だ。」

「はゝあ。髢屋さんか？」

「まあ、その手先みたやうな者だね。尤もこの節は色ぬきした髮の毛を染直して、織物の材料にもつ

かふから、髱屋、鬘屋ばかりが、私の得意筋でもないがね。女の脱毛を買ひ集めて調毛業者に賣る仕事だ。この脱毛には地毛と田舍毛の二種あつて、東京女などの地毛よりは田舍毛がいゝんだ。一貫目につき一兩も違ふ時があるくらひだが、同じ田舍毛でも暖國の品は質が落ちていけないね。汐風に吹晒された代物なんざ、から値打がないよ。髪の毛は雪國に限る。雪國の女は肌がいゝといふが、髪の毛も性がよくて、切れ毛がない。一等品だね。以前は屑物問屋に屑屋が持込んで來る紙屑の中から、脱毛をひろひ出して間に合つたもんだが、それぢや追つゝかなくなつたんで、この節は調毛業者が、方々へ人を出して、脱毛を買集めてゐる。東京近在は元より、信州、北越、東北地方まで渉獵り歩いてゐるんだ。私もこの二三日、この邊の女工さんを當に、機場を覗き廻つてゐるんだが、纏まつた出物がなくてね……話しついでに五匁でも十匁でも結構値よく貰ふが、此家のお菊さんとやらの脱毛はないかね。」

「そんなこたア知らねえが、女の髪の毛なら束にして引擔ぐほど持つてゐる山乞食がゐる。スンマーにそこだ。飯士山の姥島新田に、何處から流れて來たか知らねえ、山乞食が炭燒竈の口で焚火してゐた。其奴が持てゐるのを、俺アいま見て來たんだ。」

「へへえッ。山乞食？」

「あゝ。物乞ひ、誘拐、泥坊、悪い事なら何でもやる物騒な乞食だ。」

「山窩ぢやないか？」

「何といふか知らねえが、この邊ぢや山乞食といふてゐる。お前さん行つて見る氣なら、案内すべえ。」

「そいつア有難い。案内賃は出すから頼む。」

「見學のために僕も行かう。」

奥添地越の窪溜りに、廢棄同樣の大炭竈があつた。入口の雪は掻かれて焚火の跡がある。こゝだといふので、竈の中を覗いた。居る、居る。小畑小平次の幽靈さながらに振り亂れた長髪の五十男が、赤いメリンスの女の着物を七八枚も重ねて着ながら、褌もせず、帶もせず、零下何度といふ極寒に、胸も腹も膝もあらはだ。脊なかの刺青の鰭が、脇腹へかゝつて見えるのである。兩手の指三本づゝに……黄金か眞鍮か……二個宛の指環……十二個もはめてをり……これもまさか玩具ではあるまい……黒鞘の日本刀を膝に敷いてゐるのだ。女の髪の道具……櫛、笄、簪を山ほど包んだ風呂敷と、烏蛇のやうな女の黒髪が、幾束もその傍に置いてある……神社佛閣に奉納された切髪を盗んだんだな……山窩は齒のない口に二枚の義齒をキラリと見せて、物凄い眼で私達を睨みつけた。烈風唸りをあげて雪を吹つけて來る。

雪橇は走る

一

壯大な白銀屏風を立てめぐらす、越後連峰支脈は、金城山の北尾根を登る。登り口に雪漬の山寺がある。正法寺といふ。こゝの寶物は新田義貞の首の木乃伊ださうだ。越前藤島の戰ひに敗れた義貞の首を、鎧櫃に入れて、この山の中まで逃げ込んだ家臣、里見信春が、こゝに一堂を建立して納めた。以來六世紀の間「あけずの箱」として、神秘に保たれて來たのを、つい先頃、あけて見たところが、義貞公の首のミイラと、關係文書が現れた。いや、木乃伊ではない、木彫の首だ。いや、正しく木乃伊だ、と息卷く山民の論爭が、北越にひろがつて、問題となつたもんだ。この首寺の畔から、深さ五六尺の雪の斜面を、二時間ばかり喘ぎ登つた。火のやうに熱い息が、眞白く凍る、凛烈な寒氣が、鼻の孔から頭の芯へ侵入して、きりきり疼くのを、我慢しながら、金城山の氷壁と氷壁を抉る、五十澤の支流二つが、出合ふ溪流へ辿りつくと、そこに、黑い三角稜のブシ(冬帽)、簑、雪沓の山民が、獵

銃を肩に只一人、雪に鼻づら突込んでゐるのを見つけた。

「落しものでもしたンか?」

「いや。これだよ。」

山民は彼の足元を、鼻で指さした。踏めばキュッと軋む、光澤の強い白粉のやうな、硬雪の上に、歩幅三八糎ぐらい、犬によく似た小さい野獸の足跡が、あざやかに印いてゐるのだ。小波のやうな流紋の美しい綾絹に、彎曲の緩やかな線を描いて、點々と續いてゐる。狸ではない。狐ではない。鼬ではない。

「ほう。こりやア狐ぢやないか?」

「狐だ。」

と山民は微笑を含んで答へた。凹んでゐる足痕の歩幅から想像すると、小股の速走りで、これが本當のフォックス・トロットだ。滅多にない發見だつた。お百姓は喜んでゐる。外套に襟卷に手囊に、小野獸の毛皮を用ふることが、流行の王座に登り、都會の紳士淑女各位が、絶讃絶仰の御景慶を賜はる毛皮時代だ。一ぴき二十五圓の小狸に毎、日二錢五厘の定食を呈して、親狸に育て上げたところで、皮を剝いで賣れば、二百圓になるといふのが、この山間山民の實際勘定であり、狸の男女一組百

六十圓に一年間の養殖設備費四十四圓を加へ、年六枚生産の實を擧げて、毛皮で賣飛ばすならば、差引四十圓强の儲けになる、といふのが農林省先年度の算盤である。雪國山村の內職として、これほど結構なものはないのだから、この毛皮時代の大海嘯に乘つて、飼へよ殖やせよと煽り立てゝゐる。

洵に夫婦狸の十組も飼ふならば、儲けのボロさ推して知るべしとあつて、狸を筆頭に、狐、貂、鼬のやうな毒斯斯類の、飼育熱勃興には、目覺ましきものがある。近くは岩手縣の國立毛皮獸研究所で、狸、狐、鼬の種獸を、先月から拂下げてゐる。樺太には「姙娠保證」「血統正しい」銀狐貸付の養狐場がある。新潟スキー倶樂部を例に擧げると、この土地では、運動會にまで狐狩をやる。人間を誑すに妙を得た神通力の御歷々も、かうなると尻尾を卷いて、屏息の體だから、珍しい足跡なんだ。

「足跡は溪を涉つて、向ふの岩壁に續いてゐる。巢窟があるんだね。捕るのかい?」

「うん。搜らうと思つてるんだが、冒險だ。」

二人は笑つた。溪の急斜面に炭燒小屋がある。

二

「飛道具の山男が、下の谷澤で、お稻荷さんの足跡を見つけて、昂奮してゐたよ。」

「誰だらう? 蛇窪邊の者かな?」

「ふむ。その足跡たるや、何處から出發したもんか、知らんが、人間業では寄りつけさうもない絕壁に向つて、線を曳いてるんだ。神變不思議な曲藝をやる忍術師の、お稻荷さんのことだから、せいぜい危險な場所に、御館を構へて不都合あるまいが、飛道具の山男は、その足跡を辿つていつて、物にする量見らしい。山岳地帶の越後人は、首よりも金を尊重する。金がないのは、首がないより辛いと言ふ。冗談ではない。こいつは金になると思ふと、羊が狼の勇を奮ふやうな、驚嘆すべき實例に、屢屢遭遇するよ。」

と私は言つた。

「毛皮の相場が騰つたからね。」

と、犬皮胴衣の爺さんが、私の說を裏書した。この爺さんは、一族郎黨の炭燒軍に推されて、炭燒の總帥となり、この萱葺の山塞に蟠まつて、睨みを八紘に利かしてゐる。皚々たる金城山三角標(六二七米)東急斜面、麗しき氷花の銀飾に、光り耀く原始林の中のボロ小屋は、蹋ん匐入る口が、洞孔のやうに、小さくあいてゐるだけで、頭から雪に埋まつて、風雪の忍び入る間隙もなく、土間一杯にひろげた屑炭の火力で、汗ばむほど暖かい。爺さんの家族は、こゝに穴居民族のやうな、原始生活を

營んでゐる。白樺の梁にブラ下る石油洋燈の灯下。越後素麺の空箱を机と心得、もはや頑として動かぬ、東京貧都卅年祭紀念置時計を文鎭に、原稿なるものを書いたのは、昨冬の私であつたが、今日は山行嚢の味噌と醬油を手土産に、六日市から、わざわざ訪れたのである。爺さんの家族は、炭竈巡視に出拂つて、爺さんの他に、銀山平の者とかいふ、類人猿のやうな面貌の炭燒手傳人の留守番。私達は三俵法師の尻當に、蛇坐を卷いて、鹽漬の身不和柿を啖ひながら、談ずるのである。

「その相場の上り下りで、五十年の壽命が、伸びたり縮んだりする。われわれ銀山平の移住民は、去年の豪雪に面喰つて、避難所まで押廻てたのに、一丈五尺はおろか、半分も積まねえんだからな。野獸どもは食物に困らねえから、姿を見せねえと來る。お貂様は名物だから、獲れるのは當り前だが、他の獲物と來た日には、兎にモモンガーみてえな下等品が、ほんの僅かといふ不獵ツぷりさ。」

と炭燒手傳人が言ふのだ。

「これから向ふ見ずに降るかも知れん。」

「そいつア、わからねえが、俺ア氣が短えから、さつさと見切をつけて、山を下ると、炭燒に改宗したんだ。何ぞ知らん。下等品は不獵でも、お貂様眷屬の捕獲と一緒に、毛皮の値段が一倍も騰つたんで、銀山平一門の收入は、あべこべに殖えた、といふぢやないか！」

「それだけ、都會の女が脊負はされるんだね。」

「無論！　だが小雪の後は、春の紫蕨が育つめえ。巧くいかねえもんだよ。」

「いや。お前さんの轉向は、策の拙なるものとも言へない。雪のために炭窯が破壞されて生産滅だ。去年に比べると、炭の値段は一割も騰つてゐる。この附近だけでも、三萬圓の增收ださうだから、お前さん達の財布は、相當に膨らんでゐる筈だ。これも痛手を蒙るのは、都會の御連中だよ。可哀想に。」

「ふん！　雪の野郎！　味方か敵か？　苦勞すらア。」

「お前さんだけぢやない。」

と私は言つた。爺さんは默つて聽いてゐる。

三

炭燒小屋の北に小出といふ町がある。足腰の立つ男は、冬春の間を、他國へ勞働に出る仕組みだが昨年は實に五十年ぶりとかの豪雪に見舞はれ、家に居殘る女子供の力では、除雪が出來ず、潰れたり倒れたり、散々な目に遭つたのである。そこで今年もまた、小ツぴどくやられるだらう、といふ觀測で、町の勇士等は、他國への出稼ぎを見合せたところが、家を押潰ぶすほど雪は降らないので、勇士

等は悉く失業し、茫乎として成す所を知らぬ有様だ。盡し去年のやうに、學校、役場、農事試驗所の除雪と復舊工事費に、無けなしの金を三萬餘圓も、捲り取られず、事濟みになりさうだと、寒流の御不沙汰を德としてゐるのは、この縣の庶務課だ。平野地帶の雪は薄い。惠まれてゐるのは山岳地帶だ。新墓には古襤袍や藁衣が着せてあるほど寒い雪の上で、少女達は、赤ン坊をおんぶしながら、傘をさして、一列に滑走の藝をやる。越後民族のスキー運動は盛んである。偖て晝食の後で、この金城山炭燒小屋を退去した私は、暗雲低迷の五十澤べり三里の雪原を、六日市へ貨物雪橇で走り、そこから三ツ目の驛、上越國境山麓湯澤溫泉に、汽車で舞戻つた……註に曰く。私は此の山間の、他人の家に簡易輕便な移動書齋を持つてゐるのだ……玆は頗る汚い溫泉場だが、東京人には御馴染の、飯士山（三千五百尺）を中心に、岩原、布場などの、スキーの岡場所があつて、五、六日前には、東京文理大學練習隊の、山小屋北辰寮入城あり、東京鐵道局長率ゆる上野スキー競演會の大部隊到着あり。その度に町立スキー倶樂部、町認有志群、町設應援團、見物人の歡迎ぶりは、物凄いもので、町立スキー倶樂部の名稱を、偉スキー猛團といふんだが、猛團とは付けた名前だ。私は此の一派を、ウイスキー呑猛團と呼んでゐる。民家では一泊一圓で、外客を集拾し呑吐する。土地繁昌のために、熱狂する氣風は、こゝばかりではなく、日本海の潮風を呼吸する限りの男女が、さうではないのだらうか？　彼等

は勤勉、實直、平和、溫良、嚴肅である。私の女房の從弟が、こゝの柏崎町に居る。東京に本店を持つ理化學研究所越後工場に居る。この工場には六百餘名の男女が、極安の賃金を得べく、遠方から汽車で通勤してゐる。彼等は不平を言はぬばかりか、越後工場の出現を、生佛の御尊來よろしく隨喜してゐる。四五日前のことだが、この近くの川東村では、經費多端に苦しんだ揚句、村役人の隱退手當を、廢すことに滿場一致して、縣當局に上申したところが、役人の待遇改善が叫ばれてゐる此の際、何を血迷ふて、不埒なことを申すか、といふ譯だ。「時代思想を無視したる」科により、爆彈のやうな戒飭を加へられ、村役人一同は從順の美德を表すべく、悔悟謹慎中である。時にそのお隣の、新潟區裁判所では、縣の川浚ひ工事費を、騙取つた不良村會議員の鼻面に、八ケ月の懲役を啖はした。そいつを今少し負けてくれといふ大辯論だ。法廷の參列者は、新潟中學生百三十餘名で、いとも嚴肅な人生劇の實演を見學した。勸善懲惡の深刻な教材提供に、新生面を開拓した、校長氏と、翌日、師範中學、商業、工藝、女學、花嫁學校の生徒團が、「國粹思想の涵養」に大阪人形芝居新義娘一座の見學を擧行した事件は、東京にもあるまいといふ。驚くべき熱心さだ……こんな事を考へながら、湯澤驛に着いた私は、金一圓の雪橇を驅つて、高半屋へ向つた。今夜は初午だ。專女三狐神の小豆湯がある。

利根の深溪

——湯の小屋の一夜——

七月一日朝十時。上越國境に近い利根上流湯檜曾溫泉を發足し、奥利根本流の溪谷に沿ひつゝ年に僅か十幾人の學生登行者しかもつてゐないといふ未開原始の水源地帶へさかのぼらうとする五人——鹿野澤溫泉開拓者國峰榮一氏、同木村千秋氏、上越アルプス登山相談所開設者たる湯檜曾の林孝一郎氏、同じく落合房次氏（水上驛前栃木屋）これは何れも奥上州の山通であり釣り名人といはれる人達だ。それに私である。

今まであまり邊陬の地にあるがために廣く知られてゐなかつた水上八湯——水上溫泉を中心とする谷川溫泉や鹿野澤溫泉（奥利根館）その他は目前に迫つてゐる上越南線全通の曉に、熱海、箱根や伊香保、四萬などの客の半數を奪ふだらうと鐵道あたりで見てゐるほど、溫泉そのものの他に、幽麗な谿谷としゆんけんなる山岳とを併有してゐるのである。湯檜曾はすなはちその最奥の溫泉、こゝから

利根本流の奥に、土地の人のいはゆる「利根入」をすれば更に雄大神祕の谿谷がある。昔はこゝからいかだを組んで流したといふいかだ場へ出ると、雨後のすゐ色あざやかな層巒の裾をめぐり、へき水そう〳〵として渦卷き走る溪流に沿うた道は、緩やかな勾配をなしつゝ、里の乙女と山うばの物語りに由緒ある藥師ケ瀨を右に、粟津川の落合を經て三石部落に入る。路傍の岩壁を傳うてさゝやかな音をたてながら、落ちてゐる山清水の味が、谿谷第一といふので、上り下りの人々が口をうるほしてゆく「思ひ出の水」だ。蛇岩、十二澤の瀧、お竹の瀧、お竹の茶屋跡も進むにつれて谿谷は漸く深く刻まれ、山道は漸く高く曲折し、はだにしみる嵐氣もまた漸く濃やかにかすんでくる。かくてお竹の茶屋跡にほど近いどうくつの中に小さいほこらを祭つた春日岩の木かげから、庄太郎の松や十三佛の傳說をもつてゐる佛澤谷をふかんして柿平の三軒家にかゝると、景色はおびたゞしく南畫の風致をおびて、その幽邃な趣は對岸にわたり、深林のなかに眞白く光る七重の瀧を抱きながら、中空にそゝり立つ雄龍雌龍の峭岩のけはしいかたちによつて著しく强められる。その岩根をのぞくと兩岩迫り合つてマス跳びの奔湍をつくり、流れ落ちて紺青の深潭をたゝへてゐる峽が、うつさうたる樹陰に見える。

奥利根溪谷の入口からこゝまでの間においてもつとも美しい眺であらうと思はれる大倉峽がこれである。これをさかのぼると姥石の早瀨となり、流れをはさんで怪物のやうな巨大な姿を横たへてゐる

灰白色の岩石の眞上に高く架け渡された夜後の釣橋へ出るのである。こゝまでは遠足氣分でも樂に來られるので、足の弱い人には喜ばれるに違ひない優雅な谿谷だ。土地の人によつてつけられた場所の呼稱もあつたが、是より上流へさかのぼるに從つて、谿谷の風貌は次第にけはしくなり、場所の名前も甚だ覺束なく、ほとんど無いといふ有樣になる。私たち五人は釣橋を渡つて稻ビラ澤く小瀧を右に藤原村へ入ると間もなく、道端の灌木林をくゞりながら雪跳峽の岸壁へすべり下つた。この峽流の名稱は「セツチョウ」といふだけで、どんな文字を用ひるのか知らないといふことだが、降雪期になると雪のために兩岸の間隔が狹くなつて、兎などは跳んで渡るさうだから、「雪跳」といふ字を私が當てたのである。濶葉樹におほはれた峭壁との間を、綠青の溶けたやうな、底の知れない不氣味な淵の水が青白いあわを噴きあげながら、いう〳〵と流れてゐる。いや、さう見えるのは水面だけで、淵底の水勢は意外に速い。

落合さんの手によつて、岩頭から投込まれた三貫目ばかりの岩塊が、物すごいしぶきをあげて、二三間押し流されるのを見たからである。裂目の烈しい急直な峭壁の岩面には、壯年期にあるこの谿谷の成長の跡を示す圓形の穴が所々にあつて、圓い小石をいれてゐる。激しい削磨作用が曾てこゝに行はれ、小さい丸石は岩床を抉る道具につかはれたものだ。冷たい風が足もとから吹上げて來る。しば

らく佇立してゐるうちに寒くなつたので、私たちは元の道に引返し、奥ぶかい杉森にそうて、鷹聲峽を左に俯瞰しながら、右のごろ〳〵した坂路を幾度か登り下つて、嚴しい岩屏風を立てまはした峻山の眞下に出た。

奥利根本流と寶川と相合する點より五六丁の下流で、標高二千三百尺。その風光の雄大絶佳なることを吹聽するためにいひ添へるならば、五萬分一地圖で「藤原」と「追貝」の繼目にあたる地點でわらぢの足を浸した。午後二時であつた。湯檜曾より三時間半の登り。こゝで炊事の仕事に取かゝるべく、山ぶきの群生してゐる岩間に荷物をおろし、林さんと落合さんは釣竿をもつて岩魚をとりに行く、木村さんは飯盒で米をといで焚火にかける。國峰さんと私は寫生に出かける。恐しい勢で上流から押寄せる水が、らいくわいたる大岩石をゆるがして乘り越えては淵に落ちてすさまじい渦をまきながら、たう〳〵と流れ、再び奮ひたち激突しては雪のやうなしぶきをあげて咆え猛るはやせに、溪中第一の高さをもつてゐるといふ七瀧が、うつたうたる巖壁の上の密林から躍り出して、物すごい響をたてながらたう〳〵と落下し、もう〳〵たる霧を起して頭の上から雨をふらせるところ、山鳴り谷は應へる。一間も離れてゐるとお互の話などは聞きとれない。眞に之れ天下の壯觀だ。黄色い大きな實をたわわにもつた野いちごや、鈴らんの葉によく似た山干瓢や、淡紅色の花をつけたカンソウなどが、しつと

りとぬれて、ぶる〳〵ふるへてゐるこちらのがけの下づたひに、岩根を越へ、渚を渡り、すべり落ちて流れに足をさらはれないやうに、ほとんど匍はんばかりの姿で瀧の正面へたどりついた。そこで三十分ほど私と國峰さんとが寫生をする間に食事の支度はとゝのつた。釣たての生のいゝ岩魚がたらふく食へるかと思つたら、たつた一尾しか釣れてないので意外だつた。

「どうもこの時刻は駄目です。その代り明朝は湯之小屋の谷川でウンと釣つてお目にかけますよ。」

釣の名人達は生木を伐つてシヤモジやハシをこしらへ乍ら笑つた。その一尾の岩魚を刺身につくると一口か二口しかあたらないので、用意のコンビーフのカンを切つて、蕗の葉の皿へあける。茶わんもふきの葉である、杯もふきの葉だ。デザートのために路端で摘みとつた大粒のグミと、桑の實と、山苺の上にヒラ〳〵と來て、コバルト色の横じまの走つた眞黄い蝶々が舞ひ、せきれいが尾うちに來る。私たちは岩の上に車座になつて、工合よく出來上つた飯盒の飯を奪ふ。山谷の味だ。

それから一時間後の私たちは、もう荷物を背負つて、こゝから寶川溫泉へ出るための歩道へ、急峻な坂路をよぢ登り切つてゐた。それは寶川と奥利根本流の合流點左方三角點（四千五百尺）につゞく山の急斜面で、一足踏みはづすと、目もはるかな谿谷へ落込むまでは止まるまいと思はれる嶮岨な歩道、とは名ばかりの、露にぬれたいらくさや、かや、わらび、魚釣がさなどの野草で埋つてゐて、足

がかりもないほど崩壞してゐる個所もある悪路だつた。そこを一歩一歩搜るやうなすり足で進んでゐた、ところが「むじなほり」——たゝきだすと貉があらはれるといふ路傍の岩穴から、二三丁のところで、赤褐色の大きなまむしに出會したのである。歩道のまん中にドグロをまいてゐたらしい毒蛇は先登を承る林さんの姿を見るや否や、兇悪ながん首をもたげて跳びつく姿勢をとつたのだが、瞬間、林さんの太い杖は畜生の横腹へ打ちおろされてゐた。攻撃はこちらが一秒か二秒早かつたのだ。痛手を負ひながらも氣強く襲ひかゝらうとする長虫の首筋をつかみ取つて、林さんは宙にブラさげた。蝮は毒々しい眼を光らし、尻つ尾をピリピリ震はしてゐる。憤激してゐるのだ。

「僕が先登でなくて命びろひをしたよ。こいつア餘つ程足もとに氣を付けなくちゃ危いぞ。だが今の早業は目にもとまらなかつたな。」

私は驚歎の目を見張つた。

「いや。馴れると何でもないさうです。昨日水上から湯檜曾へ行く途中、大穴のうどん屋で休憩した際、小柄の青年がそばにゐましたね。あれなんざ實に巧い。まむしの居さうな場所を歩きまはつて見つけると、いまなり引捕へて、猫に紙袋をかぶせるやうな工合に草の葉を二三枚かさねてまむしの頭を包み、背なかの籠へなげこむ。まむしの奴は眼が見えないからどうすることも出來ない。隨分危險

な仕事のやうに見えるが本人にとつては至極簡單なものです」と國峰さんがいふ。

「そいつを僕にくれませんか？　まむし酒を造るから。」

「いや。その前に水を七分通り入れたびんに一週間ほど浸けておかなくつちあいけません。その間に空氣ばかり吸うて體中のふんを排泄してしまふ。そこで燒酎なり、酒なりにつけるのです。然しこいつは負傷してゐるから死ぬかも知れませんよ。死んだら引裂いて食ふことにするか」

といふうちに寶川溫泉の部落に出た。部落とはいふが家はたつた一軒、古色愛すべき藁葺屋根にはチト映らない汪泉館といふ、都くさい名前の湯の宿が山のふところに抱かれてゐる。こちらには虫の湯、谿流の向ふ岸には瀧ノ湯、ふな湯、鳩ノ湯が小屋の中にわいてゐる。「遠い所をお越し下さいまして……」といふ立札なども、荒削りの棒ぐひなのは場所がらに應しく素朴なものが、こゝで一升びんをもらつてまむしを入れた。

「私はさつき青大將をつかまへました。」

といひながら、一間半もありさうな太い奴を宿の主人鈴木さんが引つさげて來た。蛇の進物は始めてだ。同じ蛇でも青大將では妙がないのだが、大きい所が値うちと思つて函をつくり押込めてもらつた。

畝田を經て須田貝となればほとんど登る一方で、老杉すく〳〵と空を摩す密林の下遙に、暗い谷が

口をひらいてゐる。迂曲蛇行する崖道にまつはる孝平、孝松の怪談をきゝながら、やゝ暫く登つて、白樺の疎林から大蘆へ入つた。水色の大空に蒼黑い姿を横たへてゐる山又山の間に奈良澤岳の殘雪が淋しく望まれる。

この部落からは上ノ原大斜丘の北面を登りつめて一氣に湯の小屋へ下るやうに出來てゐる聯路があるのだが、私たちは明日の步行道路を考へると、こゝから湯ノ小屋へ出る途中、洞元の瀧を見て置く方が便宜である。それは奧利根の本流と楢俣川との合流點に近い花崗岩の斷崖にかゝつてゐる飛瀑で谿谷第一の幽景とするに足るといふ。私たちはこの部落から半里あまりの洞元山（獨立標高三千八百尺）の肩をかすめて、やゝ迂回しながら瀧の上に出ることにした。かくてこの瀧壺に身をなげて死んだといふ僧洞元の哀話など聞きながら、山野作場道をとつて步いてゐたのであつたが、山へ入つて暫くたつと、道は小徑となり、小徑も遂に絕えた。それでも、どうやらこうやら步を運ぶことは出來たが、氣味の惡い野草が一ぱい繁茂して、怪げな小流を覆ひ隱してゐる谷間の澤地へ、腰まではまり込む段になると、行惱みの足はもはや拔差しならぬほど行詰つてしまつた。

そろそろ悲觀しはじめたのは木村さんだ。中ぶとりに肥つてゐるので、こゝまでの難路が少々こたへてゐる處へ、背中におんぶしてゐる青大將がキリキリ、キリと妙な聲で泣きだしたのである。それ

ほど蛇がきらひな人とは知らないから、持つてあげませうと親切にいはれるまゝに、青大將の木函を
あづけてゐるのだ。おまけに、こいつがどんなに苦しかつたか知らないが、木村さんの新調の上衣に
小便までしかけたのである。——氣の毒だから引取りませうといふけれども、やせ我慢をはつて返し
てくれないで慘めな顏をしてゐる。一體どうするのかと思つて立ち迷つてゐると、先登の林さんが餘
裕綽々として振返つた。

「つい先日のことです。この山里の友達が、ちやうどこゝで熊の姿を見付けたので、鐵砲を取りに飛
んで歸りましたが、引返して來た時には、もう熊はゐなかつたといつて殘念がつてゐましたつけ。さ
あ、これから暫くの間藪くゞりをします。私を見失はないやうについて登つて下さい。」

いかさま熊の出さうな場所だ。藪くゞりと聞いて私たちは顏を見合つたが、熊は出るといふ、日は
暮れかゝる。尻込してゐる場合ではない。面を壓し胸を衝く急斜面へ勇敢に取りついた。猛烈な藪く
ゞりの藝當は、厭々ながらもこゝに始まつたのである。雲海のやうに眞黑く茂つた濶葉樹の密林は、
黃昏の微光を完全にさへぎつて、あたりは一層暗い。柔かな枝をひろげてゐる雜木の簇生と、頑固な
灌木と、意地の惡い根曲り竹と、腰を沒する大葉の熊笹と鋭い萱とは、縱橫無盡に絡みあひ、上中下
の三段にわたつて、容易に人の通行をゆるさない濃密な網を張つてゐる。一歩踏み入れば、殆んど一

尺先の見當すらつかないのだ。それを押切つて突破しようとすれば、章魚の足のやうな蔓が伸びて首
にまとひつくし、錯綜した大枝小枝が、脊なかの荷物をとらへて後へひつぱるし、朽ち倒れてゐる腐
木の胴と、滑らかに苔むした岩の頭と、生きてゐる根とが、足をすくひ倒さうとする。始末のわるい
ことおびたゞしく、至れり盡せりの妨害だ。尋常に立つて進むこと思ひもよらぬ。

頭を突きだして泳ぎ潛るか、足を先にして滑りぬけるか、ともかくも厄介なことになつて來た。私
はロイド眼鏡のつるをしつかりと糸で耳にくゝりつけ、帽子の上から手ぬぐひで頰冠りをして泳いで
然るべき箇所は頭を先に、滑るに都合のいゝ所は足を先にして躍り込んだ。先を行く人たちもこの戰
術で乘切つてゐるらしい。後なる人たちもこの祕略でついてくるに違ひない。だから先づ私たちの足
の裏は眞つ直ぐ地につひてゐないといふてもいゝわけだ。——ガサ、ガサ、ガサ、ドサアツ！ ツル
ツル、ツル、ドサアツ！ 氣をつけろオい！ 穴があるぞツ。わアツ。危いツ。そらツ今度は崖だぞ
ツ。——かういふ音と聲とが絕え間なく前後に聞えて、仲間の姿が深い密叢のなかに見えたり隱れた
りする。展望がきかないので、どつちへ進んでゐるのか、さつぱり分らず、登るかと思へば忽ち下り
下るかと思へば再び登ると言ふ有樣だつたが、誰しもさうだと見えて、額から流れ落る辛い辛い鹽汗
が眼に入つて激烈にしみだしたものだ。たまらないから眼を固く閉ぢたまゝ、いはゆる盲目滅法にガ

サガサ運動を續けてゐる、と、いつの間にやら五人が五人とも離れ離れになつて、やぶのざわめきも滑り落ちる物音も、木の枝のへし折れる響も、かけ聲も微かにかすかになる。ハツと思ふと、にはかに心細くなり、いや、怖くなつて救ひを求めるに似た悲鳴が、腹の底から飛び出すのである。「オーイ」と呼ぶ。「オーイ」と應へる仲間の聲が、思ひもよらぬ方角から傳はつて來る。飛んでもない處へ迷ひ込んでゐることが、それでやつとわかると「オーイ」「オーイ」を亂發連呼しながらだんだん接近し合ひ、再び一緒になつて進むのである。黄昏が夜に移つて行くと、この、離れて集まることが頻繁にくり返された。さうして骨の折れる難澁な進行が一時間ばかり續けられて、私たちは胸まで埋まる雜草の荒地へころがり出たのであつた。

藪くゞりに馴れつこの林さんと落合さんとは一番懸念されてゐた木村さんに、別狀のないことを確めるとホツとした鹽梅だ。山あるきには相當の氣力をもつてゐるつもりの私だが少々應へた。膝坊主が震へてゐる。手は血だらけになつて腫れ上つてゐる。ブヨにやられたのだ。一昨日私は白砂川谿谷から澤渡湯泉に向つて山越えをする途中、岩松山附近で雨と霧に襲はれ頑丈なわらぢを二時間ばかりでズタ〳〵に踏み破るやうな苦痛をなめたが、こんなに破れはしなかつた。この附近の奥利根水源には至佛山とか笠ケ岳とかいふやうな堂々たる山岳が横たはつてゐるけれども、この藪だから人が寄り

付かないのも無理はない。どんなにお粗末でも藪の中に道をつける必要があるなと思つた。

ふと氣がつくと木村さんの脊中にあるべき笘の青大將の木箱がない。さては先生、やぶの中で持て餘して棄てたなと思つたら、落合さんが蝮のびんと一緒にかついでゐるのだ。見るに見かねて引受けたんだらう。林さんが笑つてゐる。

「エラかつたですな森さん。」

「いやもう型なし。わが輩は死ぬかと思つた。」

「はゝゝ。實はもつと早くこゝへ出られるかと思ひましたが、豫想外の時間をくつたんで折角のやぶくゞりでしたが、洞元の瀧見は明日のことにしませう。これから少し歩かなくつちやならないし、かう暗くつちや駄目です。」

「賴ンますよ。このうへ藪ときたら助からんからな。」

「いや、お互に怪我がなくて結構でした。……ところであの楢の木ですがね。今夜はゐないやうだが……あの楢の木のまたに時々熊が登つてゐる。楢の實が熟するころは、熊の奴め、三日でも四日でもあの木のまたに座つたまゝ實を食つてゐます。この邊一帶熊が多いのです。」

また熊だ。荒地から湯の小屋へ通ずる丘陵の小道から二三間の距離に、ならの老樹が二本列んで突

つ立つてゐる。奥利根の本流と楢俣川の合流點に近い深い溪谷をはさむ巒峰の、眞黑い肩にかゝつて青白く冴えてゐる三日月の光が、そのうつさうたる梢にながれてゐる無心に眺むれば實に莊嚴な夜景だが、熊と聞いてせいさうな氣にうたれ寒さを覺えた。五人は一列になつて歩く。たれも口をきかうとはしない。疲かれてゐるのか？　疲れてもゐるだらうが、今にも熊がとび出して來やしまいかといふ不安におそはれ、心に恐れを抱いてゐるのだ。默々として深草の根を分けて行く三千尺の山ふところ。時折は月明の空をかすめ飛ぶ夜鷹の叫びを聞くこともあつた。この邊ではヅクとかいふ夜鳥の蔭に籠つた鳴聲をも、森々たる山かげから傳り聞いた。何といふ不氣味な山峽の靜さであらう。湯之小屋の燈影を『千代の松』かげに望見したとき私たちの足は躍つた。

湯之小屋をこゝでは湯之古屋とかく。之より先に人は住まない。至佛と笠の二岳を東に置いた利根水源最奥の部落。人外の原始鄕だ。宿へ着くと素裸になつて楢俣川べりにわく湯泉の小屋へ、提灯をさげて入つた。流れの上をピカリピカリと螢が飛ぶこの夜。この湯泉宿の主人大坪老人にランプの下で聞いたのが、またしても熊狩の話であつた。

石塔を剃る

——狸を食ふまで譚——

上越國境湯檜曾驛から東へ三里半。東笠嶽と西笠嶽の餘脈に挾まれた海拔三千尺の廣漠たる高原が上ノ原といふ素晴らしいスキー場だ……嫁にいつた娘が、近くに住む親の死を、八十幾日も知らずに居たなんて、嘘のやうな奇談もあるほど、雪が降り積むと、交通不便になる山の中。雪の丘原をめぐる部落の、岩藏といふ爺さんの農家の一室が、私の仕事場だ。二つ列べた素麵の空箱を机にして、原稿を書いたり、酒を飲んだり……飲過ぎると胃散だか……此の日も机に向つて、鍼力の容器から胃散の粉末を、掌へあけてゐたのである。カサリ……微かな音が背後で……カサリ……私は振りかへつた。何と諸君！　座敷の緣端に一匹の狸が向ふをむいて、チョコンと坐つてゐるではないか！　こゝにゐる私といふ人間には、氣がつかないのかしら？　氣がつきながらも平氣なのかしら？　私は靜かに立ち上つた。夜の寒さは零下十度にも下る事があるけれども、晴天の日は暖いから緣側戸をあける。狸

の奴、そこから上り込んだのだ。裏庭の雞小舎の形勢を窺つてゐる。一心不亂に狙つてゐるので、背後から忍びよる私をも感づかないのだ。いきなり猿臂を伸ばして、奴さんの首筋を引掴み、板敷にグイと押しつけた。隨分驚いただらう。横ツ倒しに引ツくりかへつたかと思ふと、赤い口をクワツとあけて、死にもの狂ひに暴れながら、咬みつかうとするのだ。その口の中へ……この野郎……左の掌に握つてゐる胃散の粉末を、パツと叩き込んだ。まん圓い目も鼻も眞白くなつたのは可笑しかつたが、南無三、首筋を掴んだ右の手に、緩みが生じたのか、際どく擦りぬけて、雪の裏庭から藪の中へ驀然。逃がしちまつたのは殘念である。隣室の爐端で、藁沓をつくつてゐる岩藏爺さんが喫驚顔でやつて來た。

「何事だ?」

「あつはつは、狸を生捕りそこなつたんだ。」

「へゝえ、狸が家の中に上り込んでゐたのか?」

「うん。この縁側から雞小舎の中を窺つてゐた。」

「貉ボリの主だな。油斷ならねえわい。」

と爺さんが言つた。「貉ボリ」といふのは、此の近くの溪間の名所? だ。

好事魔多し。この私の茶目が、そもそも是から持上る珍事件の因にならうとは! 日暮れ頃、隣部落まで雪の丘を越えて、私は酒買ひに行つた。其歸途だ。溪谷に沿うてゐる山道を、ザクリ、ザクリと歩きながら丘下へかゝると、

「バサツ。」

提灯の灯が不意に消えた。叩ツ消されたのだ。石の様に凍り固まつた雪の礫……といふのは足許にころがつてゐるのを、拾つて見てわかつたんだ……それがすぐ前の丘の上から、斜に空を切つて飛んで來たので驚いて身をかはす、とたん、ぶら提げてゐる提灯に打ちあたつたんだ。提灯はでんぐり返つて消えた。私は丘の上を見た。白雪の下から七八寸尖つた枝を突出してゐる樹木のほかに、物の影とては更にない。だが、雪の塊が獨りで、突ツ走しつて來る筈もなからうから、誰かゞ投げつけたに違ひない。私は暫くのあひだ丘の上を見詰めてゐたが、それらしい様子もないので、可笑しいなあ、變だなあと思ひながら、足許に氣をつけて農家へ戻ると、このことを爺さんに話した。

「そりや、ハア、貉の仕業だよ。」

「貉?……狸かい?」

「さうだ。」

「狸が物を投げるかね？」

「投げるんぢやねえ。後足で掴んで後へ蹴とばすんだな。巧えもんだよ。」

「へへえ！　狸がねッ？　あの野郎は筆の材料になるより他に、心得のない奴だと思つたら、存外器用な藝も演るんだな。」

「お前さんにフン捕まつた野郎の仇討だよ。」

「冗談ぢやない。」

「いや。眞個だ。よくあるこつたからな。狸といふ奴は、人間に脅されたり、虐められたりすると、必ず返答する獸だ。」

「ぢやア貉ボリの畜生か？」

「違えねえ。」

「よオし。明日はあの穴を松葉で燻してやるから見てをれ。」

「そんなことは、口に出して言ふもんぢやねえよ。神通力で悟つちまふからな。」

と爺さんが言ふのだ。狸に神通力があつたら、筆の穂になるまい。翌日は剃刀の苦面をするために、三里の山道を奥利根驛（湯檜曾宿）へ下つた。「貉ボリ」の前を通つたのである。今度は私が返答を

する番だ。……狸を向ふに廻して喧嘩した所で、武士道の譽にも、文士道の自慢にもなりはしない。御苦勞な話だが……貉の穴の雪を掻きのけて燃えつきのよくない松葉を積み上げ、苦心經營の末に、樹脂臭い煙を穴の奥へ送り込むことに成功した。

狸の野郎煙くつて、面を出すだらう。出して見ろ。こいつで一撃だ、と拳骨を固めてゐたところが狸め、我慢をしてゐるのか、留守なのか、いつまでたつても出て來ない。とゞのつまり、煙い思ひに涙を流したのは、當方だつたと言ふわけだ。馬鹿らしくなつて、煙攻めは止めちまつた。奥利根驛下の宿屋で、剃刀、石鹸などを徵發した歸途だ。

「貉ボリ」の手前の夜後の吊橋を渡つたのは、日沒近くだつた。硝子でこしらへたやうな凍結した小瀧がある。瀧のそばの平地は、老樹の翼に蔽れて雪が淺い。こゝに來がけにはゐなかつたと思ふが、何處から吹きとばされて來たか知らない、醜怪な面構への、男の乞食が御襤褸にくるまつて、座禪をしてゐるのだ。私を見ると、いきなり、蝦蟇のやうに、地べたに手をついて拜んだ。

「もし。旦那様。」

「何だい？」

「失禮ながら、御手にありやすのは、剃刀ではござりやせぬか？」

「いかにも剃刀だ。」

「何とも、はや、厚かましき次第ながら、御慈悲にすがつての御願ひでござりやす。私めの、この頭髪を、その剃刀で、ちよいと下しては下さりやせぬか？　理髪店に參る金ぐらゐは、持合せてをりやすが、どらんの通りの身分。此の姿では相手にしてくれやせんでな。」

「剃つてくれと言ふのか？」

「はい。功德でござりやす。」

「さういへば、隨分伸びてるな。」

「はい。鬱陶しくて我慢なりやせぬ。」

と、藪のやうな頭を雪にすりつける。乞食に頭を剃つてくれと賴まれるのは初めてだ。あんまり汚いから斷らうかと思つたが、見込んで賴まれるのも何かの因緣。剃刀を持つて歩くのがいけないんだ。

「よし。剃つてやらう。」

何處から手をつけていゝかわからぬ頭髮を、つるつるに開墾すべく、一時間はかゝつたやうな氣がする。醉興でなくちや、お慈悲にも親切にも出來ることぢやない。乞食は頭を撫でまはしながら禮を言つた。

「今夜はこゝに寢るのか？」

「はい。暮れかけて來やしたで動けやせぬ。」

「凍死しないやうに氣をつけるんだな。」

私は剃刀を雪で洗つて農家へ歸つた。爺さんは爐の洋燈の下で、山刀の鞘をこしらへてゐる。これが內職なんだ。

「貉ボリを煙攻めにした。」

「ほう！　やつたな。」

「やつたけども、狸は出て來ない。あの穴には居ないんぢやないか？」

「いや。確かにゐるだが、言はねえことぢやねえ。神通力だよ。悟つて逃げたに違えねえ。こうなりやお前さん、もう夕方から先は外出しちや危ねえ。どんな惡戲をされるか知れねえからな。」

「なあに大丈夫。狸風情に敗けるものか。それはそうと、此の山の中には、絕えて珍らしい客人がおいでなすつたぜ。小瀧のそばに男の乞食が野宿してゐる。」

「乞食がッ？　ふうん！　命知らずだな。刻煙草に木の葉を採んで入れて喫ふやうな貧乏村に入り込んだつて、商ひはあるめえに。何處から來たんだらう？」

「何處から來たんだか、何處の者だか、訊いたところで、眞個のことは言やしないに決まつてゐるから、訊きもしなかつた。その乞食が頭を剃つて呉れと言ふから剃つてやつた。」

「えッ。そりや眞個かい？」

「嘘ぢやないよ。」

「呆れたね。」

「はゝゝ。その乞食が何うしてゐるかと言ふと、破れ褞袍に帶もしないで、胸も腹も丸出しの、跣足で雪の上に坐つてるんだが、夜半に凍死はしないかなア。」

「なあに……高野豆腐と乞食は、少々の寒きぢや凍らねえもんだ。」

と爺さんが言つた。翌日、我が面の手入れをすべく、爐の自在の藥罐の湯を金盥に取り、昨夕、雪で洗つて鞘に收めたまゝの剃刀を、鞘からスラリと拔取つたのである。

「おやあッ。」

「どうしたい？」

「これを御覽。」

側にゐる爺さんの鼻先に、突つけて見せた剃刀の刃が、全で鋸なんだ。

「やッ。こりやあ、はア、途方もねえ刃こぼれだな。ボロボロぢやねえか。お前さん。これで乞食の頭を剃つたのかい？」

「馬鹿。こんな鋸で剃れるもんか！　乞食の頭髮を剃つたときは、磨立ての立派なもんだつたんだ！　塵ほどの疵もありやしなかつたよ。」

「ぢや何うして、かう滅茶々々に打ッ潰したんだ？」

「知らない。チツトも知らない。」

「埒もねえ話だ。青竹でも切りやすめえ。」

「さうサ。乞食を坊主にしたつきり使はない。」

「乞食の髮の毛だつて、針金細工ぢやあるめえによ。可笑しいぢやねえか。お前さん。今氣がついたのかい？」

爺さんは不思議さうな顏をしてゐる。私も不思議でならないから、念の爲に、半里の山道を昨夕の小瀧へ出掛けたのである。剃刀の刃こぼれを、乞食に見せるつもりだつたが、朝早く何れへか立去つたと見えて、乞食はゐなかつた。雪の上に剃り落した髮の毛もない。昨夜は雪が降らなかつたから、すぐ目につく筈の髮がないのだ。立ちがけに拾ひ集めて持ち去つたんだらうか？　私は老樹の蔭に暫

くのあひだ佇んでゐた。夏秋は深草に埋まつてゐるが、冬春は雪のために枯草が押潰されて、腰から上をあらはす圓形の石塔がある。日頃は誰も氣にとめないやうな古い無縁塚なんだ。私の目にはいつたのは、肩から雪をかぶつてゐる其の石塔の圓頂だつた。圓頂に生えてゐる青黑い苔が、綺麗に削り落されて、雪の上に散亂してゐるのだ。血のめぐりの惡い、感の鈍い私には、これが何を意味するのか解らないで、農家へ戻ると、私の顏を見るなり、爺さんが笑ひ出した。

「何が可笑しいんだい？」

「何がもねえや。お前さんが坊主にしたと云ふのは、乞食の頭ぢやなくて、無縁塚の圓頂ぢやねえか飛んでもねえ。石なんぞ削つた日にや、どんな剃刀だつてボロボロにならア……裏の彌吉が今の先やつて來ての話だ……昨夕、下の村から戻つて來る途中、お前さんが小瀧の無縁塚の圓頂を、夢中になつて剃つてゐる……おい、おい、東京の先生さん。墓の苔を剝ぎ取つて何の禁厭になるんだ？……つて何度も聲をかけたが、返事もしなけりや、振向きもしねえから、そのまゝ通り過ぎたつてサ。」

「ふうん。一向知らないね。」

「さうだらう。お前さんは眞個に乞食の頭髮を剃つたと思つてござるのかい？」

「うむ。」

「まだ目が覺めねえな。安部貞任様以來、この山村に乞食の入り込んだ例はねえんだから、奇態なこともあるもんだと思つたら、何のこたあねえ。貉ボリの主に誑されたんぢやねえか。神通力には敵はねえ。」

酒に醉ふと、狂人じみた眞似もすることはあるが、昨夕は醉つてゐない。近視で縮尻ることもあるが、昨夕は眼鏡をかけてゐたし、錯覺とも思はれないのだが、乞食と思つて剃つたのが、石塔の頭なんだから、昨夕の私は何うかしてゐたんだらう。取敢ず彌吉の家へ行つた。こゝも農家だ。

「やあ。昨夕は狸に誑かされたな？」

「誑かされたか、どうか知らないが、石塔の頭を剃つたといはれちや癪だからな。屹と返答をしてやる。」

「はゝゝ。出來るかね？」

「うむ。叩ツ殺してやらうと思ふんだが、捕まへる法はないかい？」

「鐵鉋で擊ツたらどうだね。」

「鐵鉋は持たない。」

「それぢや、雞を囮に窄でもかけるか。」

と彌吉が言つた。これが岩藏爺さんだつたら、そんな相談は止めさつしやい、狸の神通力で覺られちゃア、後が怖い、と言ふかも知れないが、無頓着な彌吉は、私の狸征伐に加擔したばかりか、牢までかけた。狸の糞の幾つもある小藪だが、雛雞を囮に牢をかけた。それに狸が引掛かつてゐるのを發見したのは、四日目の朝だつた。此奴が胃散を喰はされた腹いせに、提灯を叩ツ消したり、私を誑かしたり(?)した畜生だか、どうだか判りはしないが、此の邊に出沒する奴だから、あん畜生でなけりや親類筋だらう。狸の狡さを以てしても、人間の惡智慧にかゝつちゃ、この通り、態ア見やがれ。元より生かして置く奴ぢやないところへ持つて來て、齒をむいて暴れるのだ。彌吉と二人がゝりで毆り殺してしまつた。

「おい。どうする?」

「食ふさア。」

「食ふことまで考へてゐたのか?」

「當り前だよ。俺の家へ行かう。」

「どうして食ふのか?」

「うむ。本式にやるとなると、此の野郎のドテツ腹ア切り破つて、引こ抜いた藏物の代りに、酒の粕

つめこんで、腹ア膨らまし、ドテツ腹の破れ目を縫ひつけるんだ。それから泥土を毛皮にゴシゴシ塗りつけて、糠火で上下からボツと蒸燒にすると、泥土を搔取るときに、綺麗に毛が脫るから、四肢を切り落し、酒、醬油、砂糖でダシを拵らへ、肉を小間切りにして、グタグタ煮るんだよ。」

「大變な手數だね。」

「あゝ。さうしなくつちや、臭味がぬけ切れねえんだが、面倒だからな。酒の粕もなし。手ツとり早いところ、薩摩汁か味噌汁にでもつくつて食ふべえや。どうだね、今夜はお前さんの仇討ち祝ひに、一升買はねえかい?」

「あつはつはつ。德利さげて一里歩くかな。」

と私は言つた。これが狸に胃散を食はせた事に始まる騷ぎの結末であつた。お互に久し振りの肉食なんだ。

鷲の復讐

「あッ。鷲だ！」

上越アルプス笠ケ嶽の東尾根。眞黑い藪を掻分けながら、谷間に下りかけてゐた、獵師の市造は、翼を列べて四方を睥睨しながら、悠々と翔んでくる、夫婦づれの巨鷲を見つけたのである。忽ち膝を打敷いて、銃の引金に指をかけた。彈丸が當らうと當るまいと、一たん發砲したが最後、怒り猛つて頭の上から逆襲に殺到する奴だから、撃ちそこなふと此方の命が危いんだが、かういふ珍らしい獵物を見つけながら、撃たないのも惜いし、的を狙つて、外らしたことのない腕前だ。こいつはメたとばかり、頭の上空にさしかゝる一羽へ、狙ひを定めて火蓋を切る、と、奇怪！　二十間ほど先の、藪の中からも、轟然たる銃聲が起つた。

「おやッ。」

と思ふ途端。彈丸は見事に猛禽の急所を射貫いたらしく、巨鷲の柔毛がパッと散つて、眞白い胸から腹へかけて、血汐のにじむのが見えた。かと思ふと、翼をひろげたまんま、逆さまになつて眞一文

字。二三間先の藪の中へドッと墜落し、嵐のやうな音を立て暴れ出した。連の一羽が怒り猛つて復讐に來たら、また一發だ！　と銃を擬して藪蔭から様子を窺つてゐると、一羽の鷲は暫くのあひだ空中に輪を描きながら舞つてゐたが、突進して來るかと思ひのほか、悲痛な叫びを殘して、何處ともなく翔び去つてしまつた。市造が仕止めた巨鷲のそばへ駈つけた時には、流石の空中王も、忿怒の形相無凄く死んでゐた。大成功！　大儲け！　呑めるぞ！　とホクホクしながら鷲の死骸に手をかけた。

「待てッ。」

横手の藪から息せき切つて躍り出した一人の壯漢。同じ村の獵師だつたのである。

「やッ。重吉ぢやねえか。」

「おゝ市造ッ。お前は先刻の鐵砲の音を聞いたらうな？」

「うむ。聞いた。ありやアお前が撃つたのか。」

「さうだ。此奴ア俺が撃止めたんだ。」

「ば、ば、馬鹿いへッ。俺の彈丸が當つたんだッ。」

「何を吐す！　俺には手應へがあつたんだからなッ。此方へよこせッ。」

「冗、冗談いふなッ。」

「この野郎ッ。」

重吉は飛びかゝりさま、鷲の死骸を掴んだ。兩方の翼を持つて、ウンウンいひながら引張り合つて、ゐるところへ、藪の中から、のツそり現はれたのが、同じ部落の喜作といふ岩茸採だつた。この近くで岩茸を採つてゐたんだが、鐵砲の音と一緒に、空中から巨鷲の落ちるのを見て、わさわさやつて來たといふ次第なんだ。

「いよウ。お前達だつたンか！　ヒヤアツ！　こりやア、まあ、何てえ恐ろしい荒鷲だ！　一丈がものはあるだべえ。こんなに太え奴は滅多にねえよ。三十兩は確かだな。この不景氣に、ハア、ど偉え仕事を演りやがつたもんだ。一と月や二た月は、遊んでて呑めらア。あつはつはつ。誰が撃落したンかい？　市造か？」

「いや。俺だッ。」

「重吉か？」

「途方もねえ。俺だよ。喜作どん。聞かつさい。かういふ譯なんだ。」

と、市造が有體の話をして、獲物の所有權を主張すれば、同じ理由で重吉も頑張る。

「ほゝう。さうか。そいつは困つたなア。紋付羽織とは違つて、鐵砲の彈丸には、各自の紋所がつい

てゐねえから、何方の彈丸が當つたんだか、抉り出して見たところで、わかるめえ。腕自慢の獵天狗が、同時に打ッ放したんだからなア。大岡越前守様も、こいつア裁きに困るだらう。そんなら半分分けにしたら宜からうと、いふ品物でもなし、といつて此のまんまぢや、喧嘩沙汰にならなくつちや、濟まねえだらう。どうだね？　一層のこと勝負ごとで遣り取りを決めたら？」

「勝負ごとつて、角力か？」

「曲もねえ。お前達には鐵砲のほかに自慢の藝があつた筈だが。」

「何だね？」

「酒だよ。」

「酒ッ？」

「うむ。酒の呑みッ競だ！」

「よからう！」

「面白い！」

「村に歸らう！」

と喜作が言つた。巨鷲を擔いで山を下つた三箇の山男は、寶川に沿うて利根の本流を過り、此の連

中の住ふ部落大蘆に着いた。部落の人達はみんな酒に強い。酒といふのは燒酎で、市造と重吉は二升づつ買ふ……燒酎の二升は清酒の七八升にも掛合ふだらう……御輿を据ゑたのが市造の家、といつても獨身者の小屋なんだ。こゝで喜作立會ひの酒呑み競爭は始まつたが、市造は一升五合ばかり平げると、打ツ倒れてしまつた。喜作が肩をゆすぶつた。

「何うしたい。市造。まだ五合ばかり殘つてるぞッ。しッかりしろッ。」

「も……も……もう駄目だ。」

「何ちふこッたい。意氣地のねえ男だな。おい！　寢ちまつたら、お前の負けになるぞッ。」

「ま……ま……負けになつても、……か……か……構はねえ……もう……よ……よ……慾も得もありやしねえ……あゝ苦しい……し……し……死にさうだ。」

と言ひながら、突伏して呻くのだ。市造の赤い顏は何時しか眞蒼になり、額には膏汗が泌み出てゐる。完全に參つたらしい市造の姿に、勢づいた重吉は、火焰のやうな息をフウフウ吐きながら、たうとう二升の燒酎を呑み干してしまつた。ギョロッと据つてゐる物凄い眼に、勝利の色を浮べながら、フラフラと蹌めき立ち上る。

「ど……ど……どうだッ？」

「お前の勝だ！」

「ふむ！　鷲をよこせッ……ゲーップ！」

「危ねえなア。その腰つきで歩けるか？」

「歩けなかつたら、匐つてゞも歸らア。」

「ぢや、鷲は俺が引擔いでいつてやるべえ。」

一丁足らずの重吉の住居……これも獨身ぐらしの小屋だ……喜作は重吉と鷲の死骸を送り屆けた。細い竹格子の窓がある。その鴨居の釘に、鷲を吊して置いてくれと言ふので、その通りにする、と、重吉は大の字にフン反返つて、高鼾で寢てしまつた。喜作が市造の住居に取つてかへした時には、市造はもう呻くのを止めてゐた。

「どうだい。氣分は？」

「……」

「少しはいゝか？」

「……」

「眠つたな？」

喜作は市造の顏を覗いた。天井を見詰めてゐる市造の眼には光がなかつた。心臟痲痺でやられたか腦溢血で斃れたか、無理我慢に呷りつけた燒酎に命をとられ、仰向にころがつたまゝ、氷のやうに冷くなつてゐたのである。驚いて飛出した喜作は、市造の親類緣者に、彼の頓死を報せて歩いた。一同相談のうへ、死體を空樽に納めて、十五六丁はなれた永應寺といふ藁葺屋根の荒れ寺へ舁ぎ込んだ。住職は六十三歲になる山口龍元といふ老衲だつた。この邊の習慣として、死體を一夜寺の本堂に留めて置き、翌朝夙く谷間の磧で燒くんだが、誦經だけでお通夜はしないのが通例。市造の棺桶は彌陀本尊の前、破れ疊の上に安置され、燈明香華は上げられ、型の如く葬ひの式は終つた。明朝は昏いうちに、こゝに集まることになつて、皆は引揚げた。小僧も寺男もゐない庵寺のことで、本堂の隣室は、直に臺所へ續く納所、老和尚龍元は唯一人。こゝに寢るのだ。消え入るやうな佛法僧の啼聲も絕えて閑々たる闇を劈く夜鳥の叫び、時たま起るほかは、物凄いほど靜かな山間の夜更けだ。老僧龍元は、彼の枕元で……和尚さん、和尚さん……と繰返し繰返し呼ぶ聲に眼を醒し、寢返り打ちながら、頭の上を凝乎と見た。始のうちは、それと定かにわからなかつたが、狐窓から差込む皎々たる月光に浮いて見えるのは、筒袖、山袴の獵服に、白い經かたびらを掛け纏うた男の姿である。紛ふべくもない、死んだ市造！　蒼ざめた顏つきで、和尚の枕頭に悄然と立つてゐるではないか！　和尚はガバと跳起

きた。

「い、い、市造ではないかッ？」

「市造でごぜえます。」

「汝！　迷うたなあッ。重吉に取られた鷲に未練をかけて、成佛叶はず、幽鬼となつて迷ひ出るとは淺間しッ。」

「あゝ、もし、和尚さん。俺ア幽靈ぢやねえよ。」

「這ッ。幽靈か幽靈でないか、佛の功力によつて見顯はしくれる。そこ動くなッ。」

立ち上つて本堂へ蹌け込んだ老僧龍元は、引提げ來つた、烏蛇のやうな木製の如意を、振りかぶるや否や、一喝、市造の頭を毆りつけた。カーンと音がした。

「やッ。音がした。形があるなッ。」

「な、な、何だつて亂暴さつしやるんだッ。あゝ痛え痛えッ。」

と頭を抱へての悲鳴。

「ふうむ！　幽靈でもないやうぢやな。」

「埒もねえ！　幽靈ぢやねえ、と言つてるのが、お前樣にはわからねえのか？」

「奇體ぢやな。お前は死んだ筈だが。」

「死んだらしいよ。燒酎を啖ひ過ぎて、苦しまぎれに唸つてゐたんだ。それから先は覺えがねえ。眼をあけると、眞暗い、窮屈なものゝ中に入つてる。だんだん、氣がついて見ると、樽だ、ハア、棺桶かも知れねえ。こりやア大變だと思つて、押破つて飛出すと、こゝの本堂ぢやねえか！　やつぱり棺桶ゝ中に入つてたんだ。」

と悲愴な表情。酒精のために假死の狀態に陷る例はあることだ。市造は眞實に絶命したのではなかつたと見えて、時の經つに隨ひ、冷氣に觸れて、息を吹返したか、或は、他に微妙な原因があつて、止つてゐた脈が打出したらしい。年齡はとつても、こんな經驗は始めてと見えて、和尙龍元は瞠目驚嘆措く能はずといふ形だ。

「不思議なこともあるもんぢやな。然しまあ、早く正氣づいてよかつたよ。夜が明けたら、燒殺されるんだつたぞ。」

「我ながら驚いた。考へると慄然とするよ。壽命が盡きねえから、助かりもしたんだらうが、ほんたうに命拾ひをしたやうな有難え氣がするだ。」

「さうだらうとも！　これに懲りて、馬鹿な眞似は謹むことぢやな。」

「へえ。もう酒は廢めた。和尙さん。濟まねえが。水を飲ましておくんなせえ。咽喉が燥いて仕樣がねえ。」

「よしよし。此方に來て坐らツしやい。火でも焚かうで、夜も明方に近い。經かたびらなど、脫つたら何うぢや。」

和尙龍元と市造とが、爐火にあたりながら、曉を待つ程もなく、東の空、白みかけ、昨夜の會葬者が、市造火葬のために、一人二人とやつて來る。來る者、來る者が、市造『復活の奇蹟』に、どれほど驚いたか面喰つたか、この邊では空前の出來事だつたと見えて、口々に祝言をのべて歸ると、この事は忽ちのうちに、部落中に喧傳されてしまつた。やがてお寺に駈込んで來たのが、岩茸採りの喜作眞蒼な面相だ。

「おゝ市造！　お前、生返つたさうだなツ。お前が生返つたツてんで、村の者が騒いでるから、死人が生返る筈はねえ、と思つて飛んで來たんだが、嘘ぢやねえや。」

「はゝゝ。お前には世話をかけたさうで、濟まなかつたな。」

「いや。目出度え、目出度え。いや、勝負に敗けて幸福といふもんだ。」

「幸福とは？」

「重吉はお前に勝つたばかりに、お前よりも氣の毒な目に遭つたよ。聞いてくれ。お前が頓死した次第を語つて、埋葬式に立たせようと思ひながら、此寺へ來がけに、俺ア、重吉の小屋に立寄つたところが、戸口は開けッ放しで、野郎は窓にブッ倒れてゐる。昨夕の醉が醒めねえで、まだ寢てゐるのかと思つて起しに入つて、よくよく見ると、眠つてるんぢやねえ。死んでるんだ。」

「えッ？　お……お……俺の二の舞ひかッ？」

「さうぢやねえ。立派に殺されてるんだ！」

「だ、だ、誰に殺されたッ？」

「見せてやるから來い。」

「よし。行かう！」

「ところで、ハア、和尚様に申上げますだが、今度こそは金輪際、生返る世話のむえ死骸を、擔いで來ますだから、どうぞ宜敷く、ハア、極樂にでも地獄にでも、追ひ遣つておくんなせえ。賴みますだよ。」

重ね重ねの突發事件に、老僧龍元は驚き呆れてゐる。永應寺を飛出した喜作と市造は、息を切らして、大蘆部落へ向つた。重吉の身邊に起つたといふ凶變については、誰もまだ知らんのか、重吉の小

屋の近くには、人影もなかつたが、喜作に續いて、小屋の中に踏込んだ市造は、此方を頭にして仰向に倒れてゐる重吉の顏を見たばかりで、餘りの物凄さにアッと言ひさま退いたのである。鋭い鐵鈎を打込んで、突破り、引裂き、搔搖つたやうな恐ろしい抉り傷に、人相の見分けもつかぬほど、顏は滅茶々々に潰れ崩れ、眼玉は二ツとも拔取られて、頰骨は生白く露出し、齒は固く喰ひしばつてゐる。二目とは見られぬほど鮮血に染んだ慘澹たる首が、破れ疊に傾いてゐるところは、一面血の海！　その生々しい臭ひは、二時間か三時間前に、こゝで恐怖すべき慘劇が演ぜられたことを物語つてゐた。短刀で一抉り抉つたやうな、頸の大傷が、致命傷らしい。何たる殘忍な殺しやうだらう！　市造は體をふるはしながら言つた。

「だ、だ、誰の仕業だらう？」

「重吉の手に摑んでゐるものを見ろ。」

虛空を摑んでゐる血塗れの兩手を、市造は凝乎と見つめた。獵師だから直ぐわかる。

「わ、わ、鷲の胸毛ぢやねえか？」

「重吉を殺したのが、その鷲だッ。」

「えッ。昨夕の鷲は死んでゐたぢやねえか？」

「馬鹿ッ。あの鷲の連だ。二匹列んで翔んでゐた、あの片ッ方の鷲だよ。可哀相に重吉の野郎。鷲につけ狙はれてゐるとは知らねえで、酔つ拂つた勢ひ、戸口は明け放ッしの、前後も知らず、朝まで寢込んでゐるところを、不意に襲撃されたんだな。慌てふためいて、防ぎはしたらうが、鷲には敵ひッこねえ。仇を討たれて此の態だ。見ろや。窓に吊してあつた昨夕の死んだ鷲まで拉つて行つてるぜ。」

「うゝむ。怖ろしい畜生だなあ。」

「わかつたか？　勝負に敗けて幸福だといつたことが？」

「わかつた。俺は百兩で買ふから、捕つてくれといふ人があつても、もう、鷲だけはお斷りだ。」

と言ひながら、重吉の死體を見て身顫ひした。

この山間から越後山脈にかけては、巨鷲のほかに、登山者を脅かす大鷹も棲んでゐる。筆者も屢々怖い思ひをした。この話は山小屋の中で、土地の強力に聞いた近頃の事件だ。

この笠ケ岳の西方三里餘に、文理科大學、成蹊高校、鐵道省などの夏季山小屋がある。

蝮の罎詰

峠の空には夏らしい白雲が湧いてゐる。雪の消え殘つてゐる谷間には、可憐なイワカヾミやイワウチワの花が、咲き零れてゐる。

峠を下つて、町の澤口まで來ると、久さん彦さんは、空壜に蛇を入れて、ぶら下げてゐるゼンマイ採りの農夫らしい男に追ひついた。

久さんは屁つぴり腰で、壜の中を覗いた。

赤黑い蛇が蛇坐を卷いて鎌首を擡げながら、目玉を光らせてゐる。フン縛られた近藤勇のやうな悲憤やるかたなき無念面だ。

「こいつ。蝮らしいね。」

「ひやあ。さうでがす。」

「君が生捕つたのかい？」

「ひやア。蝮酒でもつくるべえと思つてな。」

「蝮酒？　はゝあ。どうしてつくるのかい？」

「水ん中で糞出ししといて、焼酎に浸けるだよ。古くなるほど、味がえゝ。」

「簡單だね。何うだい。僕に讓つてくれないか？」

「お前様にか？」

「うん。東京へ土産に持つて歸る。」

「ひやア。さうかね。そりや讓つてもえゝだがね。」

「いくらかい？」

「さうサ。このくらいの代物だから、まあ、五十錢が山の相場だらうな。」

久さんが墓口を出すと、彦さんが押止めた。

「よせやい。そんな物騷なものを持つて歸るなんて！」

「いゝよ。こいつは俺が惡戰苦闘の末に、生捕つたといふことにすると、みんな驚いて、俺の武勇に舌を卷くだらうと思ふんだ。」

「てへッ。長虫の影にさへ怯えるくせに、壘詰なら大丈夫だと思つて、大法螺を吹かうてのか？」

「うん。かうなりや、此方のもんだからな。さあ。くれたまへ。」

久さんは五十錢で讓り受けた蝮の罎を、愉快さうにブラ下げた。三人は林道をくゞつて、町の澤への坂にかゝる、と澤の中から若々しい女の唄聲が聞え出した。坂の下り口で、先頭の彦さんがピタリ立停つた。

「おい。久坊。」

「何だい？」

「あれを見ろ。」

と指さす坂の下。谷川嶽の北麓から落ちて來る奔流に、架けわたされた一本の怪しげな丸木橋の上で、紺絣の筒袖に山袴の娘が二人、唄を唱ひながら踊つてゐる。踊りながら向岸へ渡つてゐるのだ。娘たちの足の下では、氷のやうに冷たい谷水が、眞白い飛沫をあげながら、轟々と渦卷き走つてゐる。一寸でも足踏みすべらしたら最後、激流に拉はれ、浪に呑まれて、どうなるかわからないんだから、大抵の者が、びく〳〵しながら渡る一本の細丸太の上を、手ふり足ふり、アリヤ〳〵アリヤ、サツサアと渡つてゐる。

「こりやア面白い。」

「面白いより危いね。驚いた藝當ぢやないか！」

「だから面白いといふんだ。」

「なあに、この邊の女ッ子は、馴れてゐるだから平氣なもんだ。」

「いくら馴れてるか知らんが、えらい度胸だぜ。感心したよ。」

「はゝゝ。あの踊りは何だい？」

「利根音頭だべえ。」

「巧いもんだな。」

手に汗握る見物人が、後にあるとも知らぬ娘たちは、唱ひ且つ踊りながら、悠々渡り切ると、對岸の密林にかくれてしまつた。その後を追うて澤を渡つたが。何處へ行つたか娘たちの姿は見當らなかつた。土合隧道口の山ノ家で、ゼンマイ採りの農夫と別れた久さん彦さんは、水上驛から汽車で東京へ歸るべく、空ッ腹を抱へて歩いたが、鹿ノ澤まで來ると、川魚御料理と看板にある料亭の前で、引つかゝつてしまつた。こゝの亭主らしい向鉢卷の親父が、魚籠の魚を水桶に移してゐるんだ。生のい薄紅色の魚が、腹の虫を躍らせた。

「みごとな山魚だね。」

「へい。漁りたてゞす。」

「どうだい。彦坊。」

「いゝね。腹ペコだ。」

「大將。そいつを食はせてくれないか？」

「へい。どうぞお上りなすつて下さい……おーい。お客様だア。」

「はーい。」

こゝまで來れば、驛に近いせゐか、江戸辯だ。

三十五歳位の前掛の婢が出て來て、奥深い裏座敷に案内した。島神の峽流をへだてる翠巒眉に迫つて涼しく、緣の下までひろがつてゐる庭池のまん中から、吹上げる噴水が霧となつて流れ込むので、冷え〳〵する。この客は腰を据えると見たか、据えさせるつもりか、浴衣を持つて來たので、汗くさい山服を脱いで着更へると、自然に腰が据るもんだ。蝮の罎は室の隅。手足を伸ばしてゐると、婢が銚子を運んで來た。

「酒か？」

「はい。」

「手廻しがいゝね。」

「ほゝつ。どうせ、あなた、お靴を脱いで、脈絆を解いて、お召更へなすつたんですから、寛ろいでお水か白湯を召上る御量見ぢやないだらうと思つて、氣を利かせました。上りの列車は幾つもございますから、ごゆつくりなさいましな。今日は何方の山から、下つていらつしやいまして？」

「清水峠からだ。」

「ま。さうですか。あの邊はまだ雪があるさうで、道が悪うございますからね。お疲れなすつたでせう。お一ツ。どうぞ。」

といつた調子で如才がない。久さんも彦さんも酒はいける口だ。空の銚子が二三本列ぶ頃、娘ツ子が二人、鹽燒の山魚を運んで來て食卓のそばに錨を下した。お酌の婢は銀杏返しだが、新來の女たちは、天神髷に結うてゐる。空ツ腹には酒の廻りが速く、先ず彦さんがボーツとして來た。

「華やかに列んだな。諸君は此亭の人たちかい？」

「えゝ。みんな女中です。」

「小粹な女中さんだ。藝者かと思つた。」

「ほゝ。お世辭のいゝこと！　白粉のつけ方も知らない山育ち。熊と親類の樵夫の娘ですよ。」

「元を洗へばか？」

「いゝえ。現在。どうせ氣取つて見た所で、ボロが出るにきまつてゐますから、地金をむき出しに、お目にかけた方が、失禮でも私たちは氣が樂でいゝんですの。冬場は山生活で、木も伐ります。炭も燒きます。夏場はこういう家に傭はれて、手傳ひ旁々、お客様から日本語を敎はります。少しは饒舌れるでせう？」

「あはゝ。千兩ツ。天眞爛漫でいゝぞ。」

「ちよいと旦那。あの隅つこの罎の中に入つてるのは、蝮ぢやない？」

「ほう！　目が高いな。」

「山育ちですもの！　あれ。何うなさるの？」

「東京へ土産に持つて行くんだ。」

「まあ。厭だ。あれは旦那が生捕つたの？」

「さうサ。」

と久さん得意の鼻を蠢かす。蝮の罎に始めて氣のついた婢たちは部屋の隅に視線を投げて、眼を丸くした。

「よくまあ咬みつかれなかつたわねえ。」

「いや、咬みつかうとしたんだよ、清水峠の道の眞中に蛇坐卷きながら、俺の姿を見ると、いきなり鎌首を擡げて、飛びかゝらうとしたから、エイツと氣合をかけて、ハツタと睨みつけたら、ひと窘みビリ〳〵體を震はしてヘタバツちやつた。そこで首筋を取つて捕へたんだ。」

「まあ！」

女たちは驚嘆の聲を放つて久さんの顏を見詰めた。彦さんはニヤ〳〵して居る。

「蝮などにはビクともしない俺たちだが、手拭をかぶつた山袴の娘が二人、丸木橋の上で利根音頭を踊つてゐるのには、膽を潰したよ。」

「何處で？」

「町の澤で。」

「いつ？」

「先刻だよ。」

「あらツ。」

天神髷の娘たちは顏を見合つて赤くなつた。

「何うしたんだい？」

「まあ。あなた方はアレを見たんですか？」

「うん。何故？」

「ほゝゝゝゝ。あれは私と此の人でしたのよ。」

「えゝツ!!」

女たちは笑ひこけた。

「君たちだつたのかア？」

「えゝ。ほゝゝゝゝ。家のお客樣が見送りに來いと仰有るんで、幽の澤までついて行つた歸りだつたんですよ。」

「さういへば、幽の澤の上流で、登山服の連中と擦れ違つたが、あれがさうか？」

「さう。」

「山袴を佩いてたが。」

「家へ歸つて、これに着更へたんです。」

「へゝえツ。」

「驚いたなア。」

「ほんたうだ。丸木橋の上で踊るなんて！　福ちやん徳ちやんも、大變なところを見られたもんだわね。でもこの女たちの踊はよかつたでせう？」

と銀杏返しの婢がいふのだ。

「うん。感心しながら見たもんだ。」

「お得意なんですのよ。」

「さうかい。どうだね。こゝで踊つて見せないか？　俺も稽古をする。覺えられたら、それも江戸への土産にしたいんだ。」

「きまりが悪いわ。」

「山育ちぢやないか。勇敢にやツつけろよ。」

彦さんも乘出す。

「手足があいてゝ、お邪魔してるんぢやないの？　私も仲間に入るから踊んなさいよ。」

銀杏返しの婢に引立てられて、羞みながら立上つた天神髷の娘たちは、裾をからげて縁側に列ぶと手拍子二ツで利根音頭の唄と共に踊り出したのである。久さん彦さんは手拍子を取りながら、踊の手

ぶりを見てゐたが、もう一回、もう一回と繰返して三回目になると、醉つた勢ひ、女たちの中に割り込んで、出鱈目に踊り出した。夢中になつて踊り廻り跳ね廻るうちに誰の足か、部屋の隅の蝮の罎に觸れたと見えて、罎が倒れた。ガラ〳〵といふ物音に氣が付いた時には、罎の口の綏い瀬戸物の栓が脱れかけてゐた。それを内側から恐しい力で、蝮が押しのけてゐるのだ。

近藤勇が軍雞籠を破つて飛び出したやうな物凄い血相で、蝮は疊の上にゾロッと匐ひ出した。むけば鋭い毒の牙。寄らば咬むぞッ。サア。來い。來れッといふやうな恐しい眼つきだ。座敷の中は天地が引ッくり返つたやうな大騒ぎになつた。

「それ、そつちへ行つたッ。」

「キヤッ。」

「それ、こつちだッ。」

「助けて下さアいッ。」

「あッ。旦那ッ。そつちだッ。危いッ。は、は、早く氣合を！　氣合をかけて頂戴ッ。」

「うわあッ。」

蝮に狙はれた久さん。縁側へ飛出したかと思ふと、眞逆樣に池の中へころげ落ちた。

溪流から引込んだ雪解の水だから、痺れるやうに冷たいのだ。ガタ〳〵震へながら、眞蒼になつて這ひ上つたときには、座敷の動亂は夙に鎭まつて、彦さんも女たちも元の座についてゐた。流石は山育ち。天神髷の女中の一人が、蝮を取押へて、罎の中へ逆戻りさせてゐた。

「あゝ驚いたッ。壽命が縮つたよ。」

「あつはつ〳〵。あんな物騷なものは、買ふなといふのに、聞かないからだ。」

「旦那。蝮は元の鞘にをさめて置きましたよ。」

「もう、いらない。懲り〳〵だ。」

「でもお土產に持つてお歸りなさらなくつちや、蝮を氣合で生捕つた話が出來ないでせう。」

「出來ないのは殘念だが、ひよッとまた罎から脫け出さうもんなら、俺の家には、君のやうな女がゐないから元の鞘に、をさめ手がないんだ。おゝ寒いッ。」

といひながら、腥勇士はブルぶるの體をブルッとふるはして、泣くやうに笑つたのである。

嵐の谷川嶽

上越國境の茂倉山を起點とし、西南に連亘する谷川富士——谷川岳——萬太郎山——仙ノ倉山——大源太山——三國を上越アルプス中部とすれば、標高に於て仙ノ倉（六千七百尺）筆頭であらうが、それより僅か二百尺低くして而も攀がたき峻壁、渡渉困難の雪溪、嶮岨な深藪、窺ふべからざる幽谷を有ち、變幻極まりなき雲霧の裡に巍然として友峯の郡を拔いてゐる偉魁なる山貌の主——谷川岳とそはこれら山塊の盟主とするに足るであらう。山嶺の展望の雄大さは云ふまでもなく、物凄いのは谷である。北麓萬太郎谷などには人畜の白骨累々として横たはつてゐると云はれ、岳を窮めた登山者が下山の際に、名物の霧に卷かれて、ほんの一歩を踏み違へると必ずこの谷へ迷ひ込むので、最も警戒されてゐるのである。一度踏み込んだが最後再び出ることの絕望にちかい魔所として、山間の土民にすら怖れられてゐる不歸谷だ。南麓谷川溫泉より溯る谷川溪谷——五葉松、眞柏、躑躅、熊笹の類を以つて深く蔽はれ、秋は見事に紅葉する雄鹿澤と細柴澤の處女溪谷もまた、西麓赤谷川水源の谷と

共に、容易に人の近づくことを許さない岩壁を立てまわし、岳の威嚴と神祕とを護つてゐる。

戰國時代にこの山の懺悔岩に近い宮居に或る豪族が奉納したと言ひ傳へられる黃金の御幣と鰐口とは、岳のウシトラに當る岩窟の中にあるといふので、盜りに行つて崖から墜落慘死する者、跡を絕たないと言はれる。傳說もかうなると恐ろしい。蓋しかういふ篦棒な話が實際に於て此ワイルド・マウンテンに對する血の氣の多い登山家の好奇心を動かし、さまで高くもないのに、今年あたりから人氣者になりつゝあるのだから面白い。上越アルプス中部縱走は此の山を出發點とするのだが、道がないので手輕には行かない。登山口は谷川溫泉を根據地とする谷川口。湯檜曾溫泉を策源地とする西黑澤口と、越後側に土樽口がある。私は谷川口から天神峠を越へて登るつもりであつた。——さうして居ればヒドイめにも遭はなかつたであらうが、湯檜曾の有志家達が先月西黑澤の新道を開いた。それを傳つて登り、谷川口へ下りては何うかと勸められて湯檜曾の林屋旅館に陣取つたのであつた。同行者は上越南線鹿野澤溫泉開拓者國峰榮一氏。同じく木村千秋氏。林屋旅館滯在中の東京商大生江田三郎、田中祐三の兩君と慶大の竹村二郎君。林屋主人の弟さん。水上驛前（杭木屋上越アルプス登山相談所（創設中）の落合房次さんと獵犬エス。都合八人一匹だ。これに向側の本家旅館から東京文理大學山岳部員一名。早大山岳部員二名。本家旅館主人阿部一美氏。蝮取りの名人と云ふ勇君。土地の青年一

名。上越アルプス相談所の林考一郎さん合計七人だ。文理科大學の一名は岩登りにかけては日本一二だといふのだが、何處まで行くのか私は知らない。早大山岳部二名は林考一郎さんの案內で、谷川から三國山への中部縱走を試るために、白米一斗五升をリュックサックに入れてゐると云ふ。

この二つの團體は何方から合併を提議したか知らないが、これがために私遂に番狂はせを生ずるに至つたと思ふのだ——朝六時出發が八時に延びて漸く湯檜曾を立つたのも原因の一つでなければならぬ。七月二十日。朝の鬱氣爽々しい溪川ぞひの道を一里。東洋第一といふ淸水隧道南口から、噴水井へまわり、蛇淵の瀧の上を掠めて西黑澤谷（標高一千九百尺）にかゝつた。標柱に「谷川岳へ一里十九丁」とある。谷川岳東面の岩壁の足から來てゐる尾根の南斜面と岳の頂上から東一里餘の三角點（四千八百尺）から巨獸の脊のやうに蜿傾する大尾根の北斜面とに鋭く夾まれた石澤、二つの尾根が二三丁每に約百米づゝ高まるやうに、谷澤の勾配もそれに從つてゐるから、谷水は流れる部分よりも落下する部分よりも多くはないかとさへ思はれた。西黑澤新道なるものは、この谷澤と兩崖の深藪とを縫ふた切目の頻繁な糸筋のやうなもので、伐倒された掛木や草は足元に散亂し、切株は槍の穗先を列べて躓き仆れる人の脾腹を狙つてゐる。奪つた新道だ。

一隊の尻から二三番目の位置を保ちながら、辛じて名前をもつてゐる白鷺の瀧へ出た。瀧壺の上に

蟒のやうな朽木の胴が偃臥して橋をなしてゐる。鵲の橋と云へば風流だが、こいつは上流の喬木が雪崩のために根こそぎ拔かれて押し流され、こゝまで來て岸壁に引懸つてゐるのだ。春先は崩雪が多い處らしい。向岸へ登りつくと、楢やブナの大木が肩を挫かれ、腰を打られて枯死してるのもあれば枯れてゐるのもある。いづれも尾根の向ふ谷にあつたものだが、雪崩が、山越えをして此方の谷澤へ押し寄せて來る時に、お供につれて來たのだ。この邊ではホーラ（崩雪）と稱してゐる奴だが、二月ほど前は、この澤悉く雪溪であつたと落合さんが說明する。いく度か溪流を横切る狹惡な徑は、寸尺の平地もないほど登る一方の、滑つこい濕潤な坂で、木の根岩の根が足を拉ふことゝ夥しく、羊齒、岩蕗、山紫陽、甘草、野苺や紫黑色の圓い實に白い白粉をつけた草などを混へる深い莽草に埋り、靑蘚には長さ六寸もある赤い大蝸牛が這つてゐる。その蔭には氷細工のやうな深山淡雪草が眞白い花をつけてゐた。ヱーデルワイズ！　この山の周圍には一萬尺級の高山が持つ色々の植物があるのだ。東麓高壺澤や茂倉岳への途中には立派なお花畑さへあるのだから、不思議ではないが、十日餘りも上越國境の山谷を歩きまわり始めて此處でこの玲瓏可憐な花に出會つたので珍らしかつた。落合さんの犬が草叢を嗅ぎ廻る。蜩の音が冴えしきる。かういふ風景の中を——二回の休憩で充分なのに、本家組の山岳部と行を共にしたばかりに、先を急がねばならぬ私等林屋黨は——五六回も休ませられて、谷川

岳の頭を望見し得る地點に達したのである。

「あの左尾根に熊の穴があります。山小屋はその下です」

と案內者たちが晝食の場所を示してくれる時分には、空模樣が怪しくならうとしてゐた。いま谷川岳の左肩がそこに見へるかと思ふと、こんどは右肩が飛び出し、眞黑い全貌が忽然と現はれ、次の刹那には消え失せて漠々たる霧の海。これが時々猛烈なスピードで施回しつゝ突風のやうに走る。いけないな。照りつけなくて有難いと思つてゐたら遂に霧だ。雨になつたら事だと云つてゐるうちに、ポツリ、ポツリと落ちて來た。世話はない。私の天幕——靑山學院から忰が借り出した——四枚は私たちの仲間に一枚づゝ分配され、頭からかぶつて山小屋へ、ひたのぼりに登る。西黑澤の谷が、五萬分の一ではわからないが、二つに岐れて岩石磊河たる岳部をなす地點に山小屋はあつた。ブナやナラの幹をプリズム形に組合せ、屋根に枝葉をかぶせて、床にも疊敷き、入口に爐を切つた代物。日本北アルプスのそれとは位も格式も大いに異つてゐるが、四ツん這ひに潛り込めば七人位は鮨詰になり得る。途中で食つた餘計な道草の時間を入れて四時間も費した。これから直く目の前の急斜面を一氣に攀ぢ谷川岳東北面の岩壁にとりついて、尖峯へ匐ひ上る段取だといふ。谷澤を夾んで相逼る尾根の前面。呼べば應へる距離にドツシリ坐つて雨空を衝いてゐる山の瘤頭を仰望すると、ひどく降りさへしなけ

れば、一時間か二時間の骨壁で、草鞋の底は頂上にあり得ると思つた。

私達が立つてゐるところの谷澤が山の襞を彫り割りつゝ、飛泉をつくり、奔湍をつくり白瀧のやうに溯行してゐる景致は、幽韻縹渺として何ともいへぬほど美しかつた。こゝで辨當だ。林屋組は雨をよけて小屋に入る。蝮捕りの名人が焚火にかゝる。落合さんが味噌汁の實に岩蕗を採つて來て飯盒で茹る。國峰さんが牛肉の罐詰をあける。握飯は海苔卷。容易に茹らない岩蕗を生煮えのまゝでアルミニウムの水呑に掬つて嚙る。

私たちに小屋を占領された本家組七人は、溪畔に天幕を張つてランチ。早大山岳部のセイラパンツ君携帶の洋風茶器で紅茶などを沸してゐる。山登りもハイカラになつたものだ。食ひかけの握り飯や食パンに牛肉の汁をかけて、落合さんの犬にやると鼻を鳴らして喰ふ——これが犬にとつては最後の食事となつてしまつた——爐の焚火がブスブス燻ぶつて眼に泌みる。木の葉葺の屋根から、ポタ、ポタと雨が漏つて肩へかゝる。海拔三千尺の雨垂れは氷のやうに冷い。そのうちに風が吹き出したので平蜘蛛のやうになつて小屋から這ひ出した。寒さがぞくぞく肌に迫る。本家組の方でも頻に空模樣を氣遣つてゐたが、私たちを見ると本家の主人が絶望的な表情で言つた。

「皆さん。この雨は止みませんよ。惡くすると暴風雨になりはしないかと思ふんです。」

「何うしますか?」

「引返すほかないでせう。」

「こゝまで來て引返すつて!」

「さうです。この雨風を冒して前進するのは無理ですからね。但しはお登りになりますか。」

「さあ弱つたなア。あなた方は何うします。」

「我々七人は此小屋に泊ります。相談の結果さう決めました。」

私たちの眼は丸くなつた。この寒氣だから焚火を絶すやうなことはあるまいが、雨の漏る木の葉の屋根の下に、毛布をかぶらうと何をかぶらうと、一晩中蹲んでゐられるだらうかと思つた。林屋組だつて此處まで來て退却するのは忌々しいのだから、何うしやうかと迷つてゐる。催促は私の方へ廻つて來た。

「何方かに早く決めないと寒氣は刻々に加はつて來ますよ。何うなさいます。」

「僕は何方でも構はん。登つてよければ何處までも登るが、登るは無理だと云ふのならば、敢へて無理を通してまで登ることもないから、この山に明い貴君の經驗分別を尊重して、殘念乍ら下山しませう。何うです。諸君。」

「異議なし！」明日の天氣がないぢやなしサ。もう一度出直すことにしませう。」

と木村千秋氏が言つた。

リュックサックの上から天幕をひつかぶり、悄然と下る岩間の草徑。かうして本家組と別れたのである。

「考へると癪に障るね。僕等のつもりでは朝六時に湯檜曾を出發し、谷川岳の頂上で早目に晝飯をしまつて、ゆつくり谷川溫泉へ下る筈だつたんだ、さうすると途中で雨に遭つても尻込する譯に行かない。厭でも應でも谷川へ着かなくちやならん。昨夜の豫定はさうだつたから、僕は五時に起きて仕度したんだが、本家旅館の連中と合併するのに手間取つた上、山小屋まで四時間もかゝるほど道草を食はされ、約三時間の狂ひを生じた。道程にすれば三時間は大したもんだ。お人よしにつきあつてゐたところが、何の彼等はどうせ最初から小屋泊りの豫定なんだから呑氣だつたのさ。それと歩調を共にした僕等こそ迂濶だよ。百里の道を行く者が十里ぐらひの處で半ばしたやうな愚を學んだのが不覺をとる因だ。」

「從つて今日は黃金の御幣にも鰐口にもありつけなかつたのですな。」

私たちの苦笑には悲憤の響さへ籠つてゐた。青い雨は饂飩の太さとなり、細紐の太さとなつて降り

續く。合羽にするには無理な天幕だ。雨水を透してビショ濡となり、體に凍りついた。谷風は脚下より起つて此奴を烈しく吹煽る。ふと私は背後を顧みた。

「やあ。あれは何だ。あれは！」

霧に鎖された山嶺から此方へ續く蒼黑い絶壁に、今の今までなかつた驚くべき長瀧が、一哩もある雪溪のやうに眞白く懸つてゐたのである。無心に眺むれば實に是ほどの壯觀はないであらう。これが何を意味するかといことに、一度思ひ及ぶならば、今の私たちに取つて、これほど戰慄すべきものはないのだ。みんなの顏には暗い憂色がうかんだ。

「やあ水が出たな。この降りだから出なけりやいゝがと心配していたんだ。あの瀧のやうな奴が、今に我々の背後を衝いて、この谷へ押寄せて來るんだ。競走したつて敵いつこはないが、一歩でも先へ行つとく方がいゝ。」

私たちは急ぎだした。切株だらけの足場に轉つてゐる岩から岩へ飛移り乘り越え滑り下るうちに、崩壞した窪地は盡きて溪流へめり込む。山の荒神は遂に私たちへ挑戰した。二時間半にわたる死もの狂ひの戰鬪は此處に始まつたのである。登りがけには足の踝までしかなかつた清水は眞黑く濁つて腰をも浸すほど深く漲り、岩壁に激突し岩石を押流し、叫喚怒發しながら渦卷き走つてゐるのだ。巨き

な青岩の頭が二つ、將に水にかくれやうとしてゐる。

「その青い岩の頭が、いま五寸も水をかぶつてゐたら、我々は此處で完全に食ひ止められてコースを變へなくちやいけないのでした。山の雨は油斷がなりませんよ。これだからね。然しあの瀧のやうな奴はまだ來てゐない。あいつに來られてはお終だ。渡りませう。」

と落合さんがいふ。——實に際どかつた！　私たちの逃足が、三分おそかつたならば、私たちはどうなつたかわからないのだ。體溫を失ひつゝあつた私たちは、煖をとるための火具が、雨水のために用をなさなくなつてゐることも知らなかつたのだから。こゝで通過を遮斷されてしまへば凍死がまつてゐるのだ。一足おくれて來た落合さんの獵犬エスは、たうとう此處で哀れな最期をとげ、靑ざめて慄えてゐる人間の心に非常な緊張を與へたのである。——私たちは杖を差渡し手を取合ひ、渾身の力を兩足にこめて靑岩に踏張り、突進して來る濁流を押切つて、ジリジリ進みながら、何うにか斯うにか對岸にとりついた。黑土の粘りつこい崖を、蔦や蔓に縋り、萱の根につかまつて這ひ登ると、馬の脊よりも狹い岨づたいに、足ではとても歩けない絶坂へかゝり、地べたに腹部をおしつけ、頤を擡げて俯向に滑り下つてゐると、鉦を叩くやうな異樣な犬の悲鳴が背後に聞えた。

この時！　山谷は樹木を震はし轟々とゆれ動いて凄まじい地鳴りを起した。大津浪の來襲を告げたのである。身の毛もよだつ眞つ黑い山のやうな怒濤が、耳を聾するばかりの鯨波をあげて、空搏ち殺到した。あの絶壁に懸つてゐた白瀧のやうな怪流が、たうとうやつて來たのだ。犬はこれでやられた。

人間の前途もこれで絶たれた。何方に血路を開くべきか？　藪くゞりの他はない谷川岳東南の三角點（四千八百尺）の大尾根の裾を傳つて行くことにした私たちは、林屋さんを先頭に分入つた暗い原始林——蒼鬱たる濶葉樹に隙間もなく蔽はれてゐるので、雨の直射は免れたが、蟠屈匍匐する灌木矮樹が枝と枝とを絡みあひ、蔦や葡萄のつるが、それを網の目にかゞつてゐるので、目先は利かず、一歩踏込むと、反撥的に後へ押返され、鼻面を引つぱたかれる。腰から下は更にひどい。好陰性の莽草と荊棘と簇生密叢して、足に纏ひつき縛れかゝり、じめじめした朽葉の下には岩根がひそんでゐるので地べたを踏めばぬかるか滑るか躓くかだ。盲目滅法に割破つてゐると、いきなり眼の眩むやうな閃光が鼻の先でピカツと來た。瞬間。山の碎けるやうな恐ろしい雷鳴が起つた。ピカツと來ると暗い藪の中が晝間のやうに明るくなり、山刀をふりかぶつて、縱横無盡に草樹を伐りまくつて行く林屋さんの姿が二三間先に浮出され、稻妻が山刀にあたつてキラリと光る。それが目標だ。左右前後から聲を掛合つて、迷子にならぬやうに、連絡をとり乍ら進む。手は樹の枝をつかんでゐる。草鞋は樹の枝を踏んでゐる。積雪に壓つけられて偃曲した枝から枝へ移つて行くのに邪魔なのは脊なかの荷物である。五

萬分ノ一に千二百米の標高がついてゐる尾根の裾と思はれる見當へ、爪先くだりに搔分けて進むと深さ二間足らずの山の割目が足もとに現はれた。草の根につかまつて窪溜に滑り下つた林屋さんは再び草の根を力に向ふ崖へ這ひ登る。それを面倒と思つたわけではないが、叢のなか〻ら窪地の上に大小二三本の楢の枝が垂れか〻つてゐたので、これに飛びつけば、枝は嫋やかに撓んで私の體を向崖へ運んでくれる筈だと思つたのだ——あれはチト冒險でしたよ——と後で非難されたが、けだし、かういふ山荒の際だから、專ら戰々恟々として大事に構へて居れば何のことはなかつたかも知れないが、始めて演る藝當ではなし、冒險といふには餘りに樂であつた。纏ふてゐる天幕の合羽の端の紐幾筋か、足もとの障害物に引つ掛り、跳ぶときに躓りつける足場が雨で脆くなつてゐることに、氣がつかなかつたのが災難の原因である。跳躍の姿勢をとつた私は、腰まで埋る莽草のなかから兎のやうに飛んだ。刹那。足場がどつと崩れ、背後へ引張られ、狙ひをつけた大枝には手が屆かず、失策つたと思つたときに辛うじて小枝二つを掴んでゐたが、一つはヘシ折れ、一つは撓んで、私を宙に吊したまゝ、崖の岩角へ持つて行つて、したゝかに叩きつけた。叩きつけられたのは胸である。——醫師の診斷によると右胸部の肋骨が上から四、五、八、九の四本を折りそこなつて、ヒビが入つてゐるといふ——ウンといふ呻き聲と一緒に枝から手がはなれて私は窪地へ落ちたまゝ呼吸の止る苦しさに胸を押へて藻搔

きながら弓のやうに反つてしまつた。何か言はうとするけれども聲が出ないのだ。

「誰か早く來て下さアい！」

顏色はもうなかつたらう。だが、倒れてはいけない。倒れまいと崖にかじりつきながら、跚きふらついてゐる私を見て狼狽する聲が起つた。それも微かにしか聞えず、遂には眼も見えなくなり、氣が遠くなつてしまつた。それから何うなつたか分らない。この間が私には迚も長い時間を經過したやうに思はれるけれども、實際は三分か五分であつたに違ひない。凍りつくやうな凛烈な寒さに意識を恢復すると、林屋さん、田中さん、江田さんに取卷かれてゐた。後部の人々も到來した。いづれも愁眉をひらいてホツとした顏つきだ。

「いやあ。ビツクリしましたよ。こんな處でもしもの事があつたら、何うしやうかと思つてみんなが心配しましたが、まあ、よかつた。御氣分は如何ですか？」

「呼吸が苦しくて胸が痛い。何時でせうか？」

「時計は皆水浸で止つてゐるんです。」

「煙草を喫まして下さい。右腕が利きません。」

と私は言つた。蚊の泣くやうな聲しか出ない。林屋さんは池のやうに水の溜つてゐるズボンのポケツ

トから「朝日」とマツチを掴み出したが、卷煙草は馬糞のやうに濡れ塊つてゐる。マツチは崩れてボロボロだ。そこでリュツクサツクの中から、飲み殘りの酒を出した。こいつで暖氣を攝らうと言ふのだ。一口のんで皆へ廻したところで私は言つた。

「行きませう。」

「歩けますか?」

「歩きますから構はず進行を續けて下さい。」

言ひはしたものゝ、私の戰鬪力は半分以上も殺がれてしまつてゐるのだ。殊に右の手と腕の活動を必要とする藪くゞりに、少しでもそれを働かせると、肋骨が碎けるやうに痛むのだから、左の手一で間に合せようとすれば、今度は齒痒いほど捗らぬ。さればと言つて、落伍のラの字は素より、一足でも人に遲れることは、私の性格の中に同居してゐる傲慢不遜と、良くいへば不撓不屈、惡くいへば强情と瘦我慢とが承知しないのだから辛い。右の手と腕の代りに體の他の部分全體、特に顏をもつて障害物に當るより法がないのだ。横つ腹に大穴を穿たれた艦が傾きながら奮戰してゐるやうな恰好だつたが、出來るだけ表面に顯はすまいと努めて平氣を粧うてゐたから、これほどの傷手をうけてゐるとは、誰しも考へなかつたであらう。——この瘦我慢の反動として東京へ引揚る途中から、肋骨の激努

を買ひ、赤城登山の歸途にある出版社の鈴木さんに世話をかけたり、一週間といふもの、寢返りもならぬ憂目を見たりしたが——よくも堪へたものだと思はずにゐられないのは、それから約一時間半の難行であつた。私が負傷すると同時に元氣を奮ひ起して、俄かに活躍しだしたのは、それまで藪に虐げられ、勢ひ揚らなかつた學生諸君である。少しでも危險な場所へ來ると、私のために手をもつて足がゝりを拵へるやら、手を引いてくれるやら、ために大いに助つた。雷光と雷鳴とは稍靜まつたが、依然として降り止まぬ雨の中を上つたり下つたりの道中で、木村氏を濁流に滑り落して、拉はれそこなつた驚愕のほかは、たゞ膝を挫き腰を撲ち尻を擦むいたばかりで、五六回ほど澤渡りをやつた。谷澤は下流に近づくと幅が廣くなるので、さしもの水勢も餘程緩かになる。かくて西澤口の架橋に辿り着いたときの我々の姿と來たら慘めなものであつたが、命をひろつたといふ歡喜胸に溢れ、だら〳〵雨の流れる汚い顏にこみ上る笑を浮べながら躍りたつて「萬歲」を連呼した。

愛犬を喪ひ沈默の裡に怏々として喜ばぬ落合さんは、ひゝつとすると犬が生きて流れては來はしないかしらといふやうな未練な顏つきで、谷澤の方ばかり氣にしてゐる。こゝで殘りの冷酒を酌み交した私たちは、湯檜曾川岸に薪を積んで人の死骸を燒く煙に漸く黃昏んとする土合を過ぎて湯檜曾へ入つた。私たちの登山を知つてゐる村人等は、私たちの身を非常に案じてゐた。「よく引返して來られ

ましたなあ。こちらもド偉い降りでしたよ」といつては喜んでくれ「お目出度うございます」と祝はつてくれた。林屋旅館の上りがまちで草鞋を解いてゐると、死んだ犬の子がよちよちやつて來て、落合さんに縺れかゝり、母親の最期も知らずに尻尾をふるのが哀れであつた。

宿の二階から見下すと、湯檜曾川邊に湧く溫泉は水底に沒するまで增水し、濁流滔々として飛沫をはねてゐた。胸が痛む。

（因に言ふ。翌日私たちは谷川口を根據地とすべく谷川溫泉に向ひ谷川館に投じたが、谷川岳より他の退却者等と途中で幾度も出會つた本家組の連中は、雨が霽れて水の引くのを待ち下山した。雨はまた降り出したので、消息を氣遣はれたのは早大山岳部の二名と孝一郎さんであつたが、遂にこれも縱走を斷念し赤谷川の上から茂倉を經て、土合隧道口へ退却し、ガソリン車で湯澤溫泉に向つたさうだ。悉く失敗である。この雨が斷續的に續いて、水上は大出水、といふ通信に接した。

奥谷川の秋

山巒に圍まれて濃く深く鮮に色づいた秋の谷川つれのやうに澄澈した青空の下。清洌な霜氣を含んで肌薄ら寒い朝の微風の中に北に向つて行くのは、雪袴にリュツクサツクといふ姿の二人——百姓の熊太郎爺さんと私である。熊太郎爺さんは私の泊つてゐる金盛館といふ溫泉宿の女中さんの親爺だ。十七八の頃から六十四歳の今日まで、この奥利根の山々を歩きまわつて、頻る地理に明るい所から、今日、奥谷川溪谷へ志す私のために金盛館の主人公須藤英夫さんが案内役としてつけてくれたのであつて、私はこの足の達者な白髮頭の好々爺と一緒に谷川溫泉のそばを流れる谷川に沿ひながら、その上流へ向つたのであるが、直に溪流に下つて、多羅々澤へは出ず、溫泉北隅の紅葉館の横手から山へ入つた。五萬分一地圖では谷川溫泉から北方半里ばかり小徑があることになつてゐるが、昔はあつたかも知れない。今は誰も來ないと見えて五六丁も歩いたかと思ふと、山の斜面は悉く薄に蔽はれ、怪しげな徑はそのスヽキの中に消えてゐるのである。

これより先は歩道がないのだ。このスヽキの穗が赤紫に房々と色づいて際涯なく續いてゐる景色は

遠方から眺めると實に綺麗であるが、その高さ七八尺から一丈にもあまつて、葉も莖も頗る勁直な奴が一歩踏込むと咫尺を辨じないほど猛烈にと茂つた暗い密叢へ割込んだ日には、頭の上を振り仰いでも青空の一片すら望めない深さだ。趣も景色もあつたもんでない。赫熊の脊なかの針毛の中で、虱が二匹うごめいてゐる形だ。はなのうちは山刀をふるひながら、縱横無盡に切りまくり薙倒して進んだ爺さん。おしまいには續かなくなつて、山刀を鞘に納め、スヽキの大軍に面を突込んで、右ひだりに押し割り、掻き分け踏み散らして行く。後に續く私も此の傳にならつて、已れの面、手足を他人の品物よりも粗末に扱ひながら、遮二無二突喊した結果疵だらけになつたが、それよりも人間の臭を嗅いだことの一度もなささうな得態の知れぬ虫どもが、四方八面から群をなして飛びつくのだ。なかんづく柄の小粒な奴が眼に入り、鼻に入り、口にまで入るには不少惱まされた。——藪くぐりは商賣にしてもいゝほど馴れつこだが、こいつは閉口だ。この邊で打切りにして溪流に出ようぢやないか——といふと——なあに、おめえサン。物の三丁も行くとスヽキは切れるだから譯はねえダよ——と爺さんは、さほど苦にしない。到頭おしまひまでスヽキと闘つて唐傘岩の少し上へ出た。

唐傘岩といふのは直徑五六メートルの赤黑い球形の大岩塊である。球面の一點に於て危く坐つてをり、頭に松樹の毛髮を生やしてゐる。この岩見物に此處まで溪流を溯つて來る閑人も偶々はあると見

えるが、この畔に危橋の名の如く朽廢したまゝ中空に架つてゐる棧橋から上流へゆく好事家はないらしい。スヽキのなかから躍りだした處で、爺さんはお得意と見える藪くぐりの一手をもつて谷を詰めようといふのだ。私は溪流づたひに足元の左岸を行詰るまで行つて右岸へ渉り、また行詰るまで行つて、再び左岸へ轉ずるといふ風に谷を縫ふて進むことを主張して勝つた。溪岳に入つたら私のものである。爺さんより年齡が若いだけに筋骨の彈力はこつちが大きいから「岩跳び」でも「横這ひ」でも此方が稍巧者である。「岩跳び」といふのは、流れを夾んで蟠る岩塊から岩壁へ跳びうつりながら谷を詰めて行く藝當であつて、この奥谷川溪谷は頽雪(ホーラ)のために崩落した巨大な岩石をもつて埋まり、通行に困難を感ずること一通りでないのだから、この藝當を演るには甚だお恰好の場所といふてもよからうが、嶮岨なところになると跳びそこなつた場合の危險もあるし、疲勞もはやく且つ氣忙しく餘り妙のあるものでない。「横這ひ」といふのは峭壁に嚙りついて、一寸二寸三寸とジリジリ進んで行くヤモリの眞似である。高い所では三十尺もある岩壁の横つ腹にピツタリ吸ひついて、脚の下に深い淵を俯瞰しながら、草の根、藤蔓、倭樹の枝を命の綱と横さまに進んで行くのである。岩壁は苔に蔽はれてゐる。苔のない部分でも濕つてゐるから足がゝりを捜すのに骨が折れる。過つて辷り落ちたら助かるまいといふ頭があつて精神が緊張するから、後で振返つて見て、よくもあんな壁を傳つ

て來たものだと思ふやうな輕業が演つてのけられるのである。一尺もある山魚が碧潭に悠々と泳いでゐる圖は、こうした處で上から見下すのである。

この溪谷の山魚を爆發で漁りに來た男があつたさうだが、爆發に火を點けると、何うしたものか、潭へ投込まぬうちに手許で爆發し、腹部を粉碎されて慘死したといふ。そんな話をしながら、今度は私の後からついて來る爺さん。その山魚の棲みさうな潭にかゝると水際へ下りては岩穴を杖の先で搜り搜り行く。行くに從つて兩岩の間隔は狹く高く水勢は急を吾げる。かれこれ一里ばかりは風景に格別の變化もなく思つたよりは樂な道中であつたが、溪流を夾む兩側の左側が、谷川岳東面の三角點(獨立標高五千尺)の峻嶮な尾根の裾となり、右岸が、阿能川岳(標高五千三百尺)の足となり、一つは絶壁、一つは牛首とかいふ斷崖となつて切つ立ち迫り合ふところまで詰めて行くと眞正面がまた壁の而も轠轄たる飛瀑が懸つて暗い淵に落ちてゐるのだから、食ひ止められてしまつて、よんどころない藪くゞりの段取りにかゝつたが、胸を衝くやうな左側の急斜面——七十度もあらうか——それに嚙りつく堆く腐り積んだ樹の葉や草にブス〳〵ぬかりながら、黃葉紅葉の網をくゞつて手首に攀登るのは厄介だつた。おまけに雪袴の上にしめてゐる兵古帶をといて一方の端を樹の幹に他の端を自分の腰に結びつけ、四つん這ひに這い寄つて、巖頭から覗いて見たのだが、瀧壺から噴上る飛沫が霧となつて濛

々と立罩めてゐるために、峽景の見窮めがつかないのだから骨折り損だつた。

時にこの谷川本流の何處かに、土合と言ふ峽谷があるといふのを私はきいてゐる。爺さんの言葉が土地の丸だしで夥しく解りにくい上に、場所の說明が又頗るあやふやと來てゐるので、果して何うだか分らぬけれども、谷川本流において峽谷の態をなすものは、この他に見あたらなかつたから、或は此の邊がさうではないかと思ふのだ。谷が幼年期にあるために、景觀未だ雄大とは言ひかねるが、その幽凄深祕なことは氣味の惡いほどである。この峽壁の藪を分けて私たちは十二、三間上の溪流へ出た。泝行すること數丁にして谷川本流の分岐點二股に至るのだが、磊砢たる岩石の奇狀を以て特色とする此の溪谷の風致は、先刻の牛首は近から次第に非凡となり、二股に至るまでにその面目を現はし盡してゐるのである。

閃綠岩その他の堅い石を土臺とする谷壁が、風地作用と雪崩れのために破壞され轉落し、前に落ちた岩塊の上に或は乘り上り、或はその間に割り込む、その上に更に後から後から碎け落ちる岩が乘り重つて、累々積疊してゐるのだ。なかにはその下蔭や凹穴に七八人を容れるほど巨きく見上げるばかりの岩石もあつて、水の通路を遮るために水も素直に流れ得ず、到る處で岩と衝突しながら、瀧となり淵となり奔湍となるわけだ。之の水里の人々は瀧のことを「セン」といふ。谷詰めで行くと「セン」

が多くて難澁するから藪くゞりで行かうと爺さんが行つたのである。こゝに來て始めて領けたが、成る程、岩跳びの藝當も段々容易でなくなつて來たし、この邊では猫魔倶利といふ降雨後の激流や、雪崩の猛威に、一たまりもなく根こそぎやられ、彼方此方に慘しい殘骸を横たへ乍ら、眞紅なアカタケや黄いマヘタケに簇々生へつかれてゐる巨きな喬木が、岩塊から岩塊へ架け渡されたやうな形となつて、偶には丸木橋の役目をつとめてくれぬこともないが、私たちの前進を困難ならしめるしたたかの妨害物となつて來た。

こゝに名のあるものは魚止の瀧、吉野澤の奔湍、柿の澤の飛泉、廣河原の瀑布といふのだが、その他の早瀨や瀧や淵は名もなく殆んど知られてゐない。その早瀨や瀧や淵に迸る水も、流れる水も漂ふ水も飛沫も泡も、小い五葉松、杉、シンパクの類をまじゆる常綠木の谷壁。その深まれる濶葉樹密林の燃え立つやうな婉やか紅に照映へて唯一色の美しいなかに、青白く際立つて見ゆるものは、そこに起伏する巉岩と亂臥する木骨だ。時には蹶然たる跳躍を試みて、それらの物を乘越し飛渡ることもあつたが、時には面倒くさくなつて、爺さんと手を取合ひながら水に入ることもあつた。流れに腰まで浸りながら、谷を縫ふのだ。馴れてゐればこそ、足を引ツ拉つて押倒されるやうな下手はないが、零度に近い水の冷さ骨身に徹して震へあがるほど寒いのだ。寒いけれども便利な方法だから我慢して

演つつける。かうして二股の合流點に漕ぎついたのである。左を細芝澤といふ。

谷川にとつては、木谷とされてをり、上越アルプス山中では最も嶮岨な處女溪谷として保たれてゐる原始境。一里溯れば水源となり、阿能川岳西方の三角點(五千八百尺)を間の仕切として、赤谷川大溪谷の水源とは十丁と離れず相隣接してゐるのである。右を雄鹿澤と言ふ。上越國境線とにある谷川岳左肩部の三角點(六千三百尺)直下に切立つ峻壁を抉り割る水は、その源より半里たらずの此の二股において細芝澤の水と出合ひ、下つて谷川の本流となつて鹿の澤で利根に注ぐ五萬分の一にも詳でない此の細芝と雄鹿とを併稱して奥谷川溪谷と呼ぶのだ。私たちは右の雄鹿澤に向つて雄鹿瀧を過ぎ溪畔の樹林全く盡きて、熊笹、毛氈笹、石楠、虫捕菫、岩櫻などの生えついた岩地、三角點(五千尺)を正東に望むところまで進んだ。こゝに形もあやしげなる熊小屋があつて、爺さんの友達といふ男が何時も熊の出るのを待ちながらたつた一人で將棋をさしてゐるんださうだが、今日はゐない。その熊も羚羊も恐れをなして近づかぬといはれる地獄谷は、いまや眼前に物凄い深さを見せようとしてゐる。溪水はもはや流れるのではなく落ちるのだ。やがて之がいはゆる雄鹿澤の雪溪ともなるのであらう。そこに屏風のやうな絶壁を眞直に立てつらね、朗かな秋の青空を衝いてゐる谷川岳の姿こそは雄大豪壯の極みである。

三國の處女雪

一

人相の悪い浮浪人と見られて山の町の警察署に拘留されるかと思ふと人相のいゝ先生と見られて、山の映畫撮影隊につかまつて紳士の役を演らされたり、「お前さんは政友會の者とつきあふから、家には泊めない」といつて民政系の宿屋から追出されたり、蒼蠅い旅であつた——奥上州赤谷川の處女溪谷を探るついでに未だ知られざるスキー場を見出さうと思ひ、途上湯宿溫泉の民政系旅館に投じたのが、濱口首相狙撃事件の翌日。田舍の人達は本業をやめて新聞紙をふところに馳まはり、やれ、首相は助かるぞ、いや助からんぞと、銘々黨派的御都合から割り出したる說を、腕まくりで唱へつゝあり宿屋の亭主なども、首相に死なれては一大事組の方らしく、いたく心痛の體に見えて氣の毒であつたが、田舍民政と田舍政友とが、かうまで深刻に睨み合ひ憎み合つてゐやうとは思はないもんだから、一寸した筋合で政友系の隣家に招かれ、私御馳走になつた。それが亭主の逆鱗にふれて、締出しを食

つたのである。呆氣にとられてゐる私は湯元館のO氏、洋畫家H氏、村のドクトルT氏に拾はれた。かくて昨今は山鳥や雉子うちに東都狩獵家達の集まる法師溫泉へ擔ぎ去られたのである。弘須法師斷食洞窟の湯の宿を霎のなかに立つて、赤谷川本流と笹ノ湯で別れ支流西川の溪谷に沿ひ猿ケ京を經て溯行二里すれば、唐澤山、三國山、稻包山、赤澤山、保戸野山の深い原始林に圍まれ、佛法僧、慈悲心鳥、時鳥で知られてゐる幽邃な法師溫泉部落だ。西川の水は細く狹まつて法師川となり、流れに臨む古雅素朴の湯の宿一軒、長壽館といふ。其夜は熊の肉に地酒で同行の人達とランプの燈のもとに醉ひ臥したが、明日は何處で寢るやらわからぬ旅の私。さて翌朝のことである。眼がさめたのは五時ごろだつた。さらさらと板戸をうつものゝ微かな音がきこえるので、雪ではないかと思ひながら、褞袍にくるまり渡廊へ出て見ると果して雪、山と山とに劃られた暗い空から灰のやうな粉雪が舞落ちてゐる。石をのせた浴舍の板屋根にも渡廊の踏板にも、ほんのり積んでゐる。欄干にかけたまゝカチカチに硬ばつてゐる手拭を取つて私は浴舍へ向つた。

誰も起きいでぬ廣い家の、曲り角、曲り角に吊された石油ランプの燈が、疲れ弱つた黃色い光をなげてゐる暗い廊下づたひに浴室へ入ると、その湖のやうな湯壺の底の小石のあひだから、ぶくぶく浮上る泡の呟きまで、朦朧たる湯氣のなかにきこえて、靜かなことは無氣味なほどである。鳥も猿も羚

羊もまだ眠りから醒めやらぬ夜明前の山の湯の靜寂さよ。枕木に頭をもたせ、仰向に手足をのばして湯にあたゝまりながら、カトリック僧房にあるやうな古風な窓々へ忍び寄る曉の蒼白い微光を見たのも神々しかつた。

爽快な氣持で湯から上つた私は、時間を見るために帳場へまはつたが、突當りの臺所で、飯炊ばあさんが爐の火を焚いてゐるのを見ると、のそのそ這入つて行て爐邊に坐りこんだ。榾火にあたりながら、降る雪の音をきいてゐると、一人起き二人起き、女中さん達がやつて來る。主人公の岡本さんも來て側に納まる。

「降り出しましね。」

「山はどうでせう？」

「大したことはありますまい。」

「登つて見ようかしら？」

山登りの仕度はリュックサックに收めて湯宿の湯元館に預けてあるのだ。

「お登りになりますか？」

「さ、折角こゝまで來たんだから登らずに歸るのも惜しいやうな氣がするんですが、著物ぢや行けま

すまい。雪袴でもありましたら貸してもらひませうかな。」

「いや、雪袴よりは此の方が汚くつてもいゝです。お召し下さい。」

と岡本さんは自分の狩獵服を持出してくれた。外に毛絲の襯衣と短衣一著。

「序でに鐵砲をお持ちなすつては如何です？　この邊は兎、雉子、山鳥の名所です。兎の夢擊ち、雉子の忍擊ち、山鳥の飛立ち擊ちなどは痛快ですがね。」

「よしませう。鷄の籠擊ちなら出來るかも知れないが、持つて行つたつて仕樣がないからな。はゝゝ憚りさまですが、握り飯と酒を少々お願ひ申したい。」

二

私は褞袍を狩獵服に著替へた。岡本さんは脚絆の上からゲートルをまいてくれて、五萬分の一地圖(四萬)手袋、ナイフ、鉛筆、山刀、わらぢを揃へてくれた。五分間で一變した私の姿を見ると、朝餉の仕度に右往左往の女中さん達が笑ふ。笑ひ聲のまん中で、わらぢばきの胡座をかきながら、一杯やつた。酒の肴に是は何うですと出されたのが、青黑い胡椒の實のやうな形をしたもので、何ともいへない變な味がする。何だらうと思つて聞いて見ると、木天蓼だといふ。木天蓼といへば猫を思ひ出す

が、これも熊の肉と共に、こゝに來て味はつた珍物の一つといへる。昨日、湯宿湯元館後庭の弘須法師斷食の岩窟と相對する座敷で山鳥をつゞついたのと、昨夜、この宿のランプの燈の下で、熊の肉をパクついたのは忘れがたい思ひ出となるであらう。出來たての飯が運ばれたので著をとると間もなく眼を覺した同行の人々が來て、私の姿を見ると驚きの眼を丸くした。山登りをする考へはなかつたし思ひ立つと同時に默つて行つて來るつもりだつたので、意外に思つたらしい。

「越後の山を見て來ますから、待つて〻下さい。」と言ひ殘して飛出した私を、いかにも不安相な顏つきで見送つてゐる。主人の岡村さんまでが心配になると見えて、番頭さんの富澤といふ越後の山通を案内につけてくれる。マル公といふ大きな獵犬までついて來る始末で、降る雪の中を出發したのである。こゝから三國峠へ達するには、宿屋の表口から直に九十九曲りの急斜面を登り切つて、大磐若塚で三國舊街道に會し、百間ケ瀧の方へ向ふ道と、浴舍の裏を流れゐる法師川に沿うて登る小徑とがある。私達は後者をとつて溪流をかゞりながら、十二三丁溯行し、地獄谷の口へ出た。法師川の源流と三國の裏山から出て來る澤水の合流點だ。

この邊の雪は積んでも一丈とは達しないらしいが、この谷奥のそれは六月頃まで消えないといふ。小徑はこゝで地獄谷と別れ、左方の澤を左に見る山の斜面を迂曲し、やゝ急を示しつゝ白樺を混へた

ブナの密林へ入つて行く。夏は晝間でも暗いさうだが、今は既に紅葉期も過ぎて、濶葉樹は悉く裸になつてゐるので、明るくて見通しがきくうへに、落葉を以て敷詰められてゐる山地に群落する石楠の青黑い色が著しく目立ち處々に落ちてゐる瀧の水までが際立つて白く冴えたりして、眺めは存外美しい。前面に長倉山が双耳をそばだてゝあらはれた。澤を渡つてその下腹へかゝると、徑は電光形をなして三國舊街道へ出るのだが、やゝもすれば熊笹におほはれさうで、三四寸ほど雪が積んでをり、登るにつれて深くなる。こゝまではラクにやつて來たが、そろそろ物を言ひ出したのが、出掛けに呷りつけた二三杯の冷酒。防寒の目的でひツかけたやつが、目的は達しすぎて、無暗にボカボカする。

登りがだん〳〵急になると暑いこと。上衣を脱いでも暑いのでチョツキや毛絲のシャツまで脱いでしまつた。流れる汗は眼に泌み口に入り頤の先からタラタラ落る。咽喉は醉ひざめのやうに乾くし、息苦しいこと。おまけに肋骨まで痛みだした。しばらく忘れてゐて右の肋骨が歩くたびにヅキヅキ痛むのだ。考へると癪にさはる話だが、肋骨の痛みは沼田の警察署へ放り込まれた記念なんだ。一昨夜上野驛から後閑に著いて月夜野村に入り村の郵便局長に所用あつて、局の扉をトントン叩いたのである。そこへやつて來た村の駐在巡査が私の姿――著物の上にマントを引かけてリュツクキツクをさげてゐる姿を怪しんで一言二言問答の末、通りがゝりの自動車を呼止めて私を押込んだ。

車上には巡査の知合が二人ゐて、巡査に應援しながら、呆れかへつてゐる私を沼田警察署へ護送し擧動不審(?)の科によつて、化物屋敷のやうな建物の中に一夜を明すべく努力したのである。自動車に積込まれる際に右の胸を強く打つて烈しい疼痛を感じたが、翌日は何ともないので癒つたものかと思つたし、村の巡査たちも私に對して恐縮の意を表しに來たので、事は濟んだのである。心持はそれで癒つたが、胸の方は癒り切つてゐなかつたと見えて、激しい運動につれて痛み出したらしい。そのために法師川原から三國山を遠望したときには、途中一回も休まず山頂へ著き得る見込みだつたのが峠へ辿りつくまでに三回も立停つて、汗を拭き息を入れる始末で忌々しかつた。

三

法師溫泉から此の峠(標高四千百餘尺)まで約一里。然し一時間半で來たのは遲い方ではない。これから三國の頂上ともいふべき三角點(五千四百尺)まで四五十分もかゝるだらうか。雪の爲には或は存外時間を食ふかも知れない。私達は峠に祀つてある三國權現の鳥居をくゞつて風雪にさらされて荒れ果てゝゐる小さい社殿に入つた。携帶の蠟燭三本に燈をともしてさい錢箱の緣に立て、格子戸に清酒を注いで鈴を鳴らしたのである。燭火はすぐ消えた。峠は流石に風あたりが強く、締切つた戸の

隙間から粉雪を吹込むのだつた。やがて此の雪の下に鳥居も社殿も深く埋つて、上越間の交通全く杜絶する頃になると、山スキーの功者達がやつて來て、この邊から大般若塚迂回の壯快な滑走を雪煙のなかに演ずる初步のスキーヤーにとつては困難であり危險であるかも知れないが、その雪質の硬く乾燥してゐる點に於ても、眺望の優れてゐる點に於ても、熟達した山スキーヤーにとつてこの峠は素晴らしいスキー場ではあらう。

社殿を出て二三丁ほど越後へ下り「米のなる木を知らぬ」昔の淺貝の宿を一里の谷合に眺めた。

「國を出る時ア涙で出たが今ぢや越後の風もいや」といふ馬子唄が此の付近にきこえたころは、毒消し賣りの越後女が隊をなして淺貝の方から登つて來て、關東諸國へ散らばつたのだが、汽車が通じてからは街道筋は荒蕪にまかせ、通る人も日に日にまれであるといふ。

引返して社殿の後から山へとりついて暫く攀ぢ登つた私達は、風當りの強くない斜面を選んで四方の展望を求めるために尻を据えた。深さ一尺ばかりのサラサラした辷つこい積雪は、寔に氣もちのいゝ白絹の座蒲團だ。晴天の日には日本海をも遠望されるといふが今日は見えない。北は大源太山を前に置いて、赤谷川の大深谷をかこむ仙ノ倉、萬太郎、谷川岳などが絶壁を立て連亙してゐる。私にとつては夏以來おなじみで、甚だしく惱まされた山々だ。

西に眼を轉ずると、淺貝宿の向側に筍山（六千尺）が巍峩としてそびえ、後に有名な苗場山（七千尺）が横たはり、筍山の左後に大黑山（七千尺）その脊なかに白妙山（七千尺）の頭らしいのが突出し、遙手前に稻包山（五千三百尺）手の屆きさうな眼前に向山（四千八百尺）がいかめしく突立ち、腰から上は眞白になつて、荒海の怒濤のやうにつゞいてゐる。白根も淺間も雲にとざゝれて望むことは出來ないが、雪をかぶらない紫色の赤城山は澄み渡る紺青の空の下に麗はしく眺められた。三國山を境にして、西と東の空の樣子が違ふやうに、山谷の景致もその趣を異にしてゐる。

西は一帶に暗く鋭く嶮しく、東は溫和で明るいやうに思はれる。そんなことを考へてゐるうちに、苗場山の姿が忽然として消えうせ、そこから廣大なひろがりをもつた煙幕のやうな白いものが、恐ろしい勢ひで、筍山の肩へ押寄せて來た。吹雪だ。天候怪しく風も强いので案じてゐたものが、たうとうおいでなすつた。

山を飛ぶ女

一

「上越アルプス」の名で呼ばれる三國山脈は、第三紀水成岩層の下から、閃綠岩や安山岩のやうな岩漿が噴出して固まつたものだが、噴出し方がムラなために、わづかな部分ではあるけれども、頁岩、砂岩、凝灰岩層の露出した飛び地があつて、魚介化石や植物化石を呑んでゐる。こいつをほじくり出して、ものにしようといふ化石學者の幼蟲に、わが山友、杉坂莊平くんがある。洵に空の目がつぶれるほど、執念に降りつゞいた、鬱陶しい霖雨のひとたび霽れるや、上越國境線の峯々には、爽快な白雲の大塊が、悠々と湧きあがる。越後湯澤溫泉に待機中の、坊つちやん莊平は、勇躍一番「山のバタヤ」行進の途についたのである。山脈の西麓をからみつゝ、舊三國街道のどんづまり、淺貝部落に入れば、山脈を横斷して上州へぬける急山道を、登りつめる四千百餘尺の分水嶺が、名にし負ふ三國峠だ。こゝから法師に下つて一泊、又登る赤澤山の山のかなた、四萬の溪谷こそは、化石の寶庫。莊平

の志は、そこへ行くにあるんだが、淺貝部落で聞けば、平日さへ足場の悪い赤澤山林道が、霖雨に崩壞して通行不可能だといふ。三國街道へ下つて、廻り道をするより他には仕方がないので、展望のいゝ峠の權現城址に山行嚢をおろして一休み、法師谷の上の大般若塚へ向つたのである。鬱蒼たる樅、欅、水楢の密林に、日影も漏れぬ暗道の、片側は見透しのつかない藪だ。悲愴な物語を持つ古戰場だが、昔は猫又が棲んでゐて、旅人を苦しめたといふ。路傍の草叢に傾き立つ大般若塚は魔封じださうで、今でも追剝ぎや、時局をかきまへぬ輩が其跡を斷たぬらしい。そんなことを考へて、いくらか薄ツ氣味悪く思つてゐる矢先に、その眞暗い深藪が、いきなりザワザワツと鳴動して、大搖れにゆれ出したではないか！　次の瞬間には、心臟が凍るかと思はれるほど、竦然として立竦んでしまつた、といふのは、その暗藪の中から、疾風のやうに飛び出したものがあるのだ。それは女だつた。いや、山袴姿の女なら、膽をつぶしただけで、すんだかも知れないが、さうではないのだ。年齢のころは二十二か三か、山中の代物ならぬ縹緻といひたい痩形。肩口こそは引裂けたれ、袖口こそは破れたれ、絹ものゝ一重は振袖の、賤しからぬ品だ。が、それだけに、乳房は外へ胸はだけ、白脛は露に裾を亂して素足の跳といふ打扮が、尋常でないうへ、肌のいろ透きとほる顏の青白さに振りかゝる髪の毛や、口紅のいろ、金魚を食つたやうな唇が、妖に凄まじく、燃ゆるやうな、瞋怒の眼をするのだ。

誰の髪か、根元から剪取つたらしい、女の黑髪を、烏蛇のやうに、赤い扱帶に括りつけて、刄渡り一尺もあらう、どきどきする山刀を逆手に、じりじり、迫り寄るかと思ふと、

「わツ。」

と逃げ出す莊平の胸ぐら、躍りかゝつて鷲摑み。とても女の力ではない。

「畜生！　逃げるか？　さあ逃げて見ろ。一刺しに刺殺すぞツ。」

凄い眼で射ぬくばかり鋭く、莊平の顏を睨みつけた。動けば一刺しだといふ。やりかねぬ勢ひだ。御承知でもあらうが、人間の首ぐらゐの太さの生木なら、一薙ぎにフツ飛ばす山刀の斬れ味だ。女にいはせると、こんな山の中で、見知らぬ異性に出會するほど、怖いものはないさうだが、男の方だつて、こんな女に取ツつかまつては、戰慄せざるを得ないだらう。何が何だか、さつぱり解らないだけに、恐怖は大きい。莊平くん、たゞもう一途に怯へ切つて、がたがた顫へながら、口も利けない、みじめな有様だつたが、たらたらと膏汗の流れ滴る眞蒼な顏に、得體の知れぬ奇怪な女は、火箭のやうな眼光を向けて、瞬きもせずに見つめてゐたが、その青白く眞劍に緊張した表情が、だんだん弛んで來たかと思ふと、深い溜息と一緒に、がツかりしたやうな、物悲しげな、冷笑とも苦笑ともつかぬ、薄笑ひが口元に浮んで、

「ふふッ。違つてらア。」

と吐き棄てるやうに、顚へてゐる捕虜を突ッ放したのである。蹌めき倒れかけた莊平くんは、命びろひをしたやうな歡喜に、倒れかけたまゝ駈け出した。

「いッひッひッひッ。」

ぞつとする女の恐ろしい笑ひを、背に浴びながら、息もつかず、振返りもせず、ひた走りに峠路を東へ走り下つて、半里の永井部落から、更に半里の吹路部落に入るまでは、實際夢中だつた。

二

「あつはつはつはつ。そいつは辛い目に遭ひましたね。」

と言ふのは筆者、卽ち、この私だ。數年來の山友、杉坂莊平くんに、以上のスリル談を、私は聞かされたのである。私達二人は、吹路部落から西川溪流を涉つて、高畠山と雨見山の間道を、大影部落へ向つてゐた。

「いや全く、あの時は、生きた心地はなかつたですよ。」

「よほど凄いと見えるね。被害者が、みんな、さういふから。」

「えッ?」

「はゝゝ。あの怪女に捕まつて、壽命を縮めたといふ野武士は、この山間に、いくらもゐる。君だけの受難ぢやないんですよ。」

「へへへ!?」

莊平くんは意外さうに、眼を丸くしながら、私を見たが、

「な、な、何者です? あれは?」

「狂女さ。」

「狂女? なるほどね。いづれ、そんなことだらうとは思つたが、何處の者ですか?」

「この山間の舊家の娘だ……芳枝とかいつたが……お出入りの炭燒の若者と、熱烈な戀に泥醉したんだな。蠻族ぞろひの炭燒仲間には、珍らしい男ッぷりの若者だつたらしい。生活の重心が、性の享樂に置いてあるのだから、山民男女の情事は、われわれの想像以上に、奔放、不敵なものだ。ところでその娘……芳枝孃が姙娠すると、若者は型の如く、古草鞋を脫ぎ棄るやうに、あつさり棄てゝ、姿を晦ましちまつた。命をかけて愛してゐたゞけに、受ける打擊は大きかつたでせうて。悲嘆絕望のあまり、氣が變になつたといふわけで、二人の仲に出來た子は、生れたかどうかそんな事は一寸も聞きま

せんが、彼女の狂つた頭では、姙娠したから、棄てられたとは考へられず、家の祕密が露顯したために、嫌はれたんだと思ひ込んだ。」

「何です？　家の祕密とは？」

「彼女の祖父さんだか、親父さんだかゞ、天刑病で腐れ死にしたなんて、忌はしい噂があるんです。癩病遺傳の迷信に取憑かれてゐる彼女は、自らも怖れ、他にも憚かつてゐたらしい。事實この山間には、癩患者が出沒するさうな。」

「おやおや。」

「で、その重大祕密を、若者に曝露して、彼女と若者の仲を引裂いた奴は、彼女の家の遠緣に當る某農家の若い寡婦に相違ない、といふのは、浮氣な後家め、以前から頻りに若者掠奪を試みてゐたさうだから、事實とすればこの後家を怨み呪ふのは當然でせう。狂つた頭の中で、怨み呪ひが煮えくりかへつてゐる折も折、この信女が、桑畑の蔭で、晝寢してゐるところを見つけたもんだから、復讐の焰むらむらと燃え上つた勢ひ、高鼾の寡婦に馬乘りに乘しかかり、驚き騷ぐのを、狂人力で押べつけて傍の鎌を攫み取るや否や、バツサリと根元から、敵の黑髮剪落し、頭上高く振翳しながら、凱歌を奏したといふ。」

「あゝ！　扱帶にぶら下げてゐた!?」

「あれだ！　よくも寢首を搔かなかつたものさ。憐れな戀の殘骸だね。」

「可哀相に！　いつもあの峠にゐるんですか？」

「いや、自分の家に押籠められてゐるんだが、逃げた若者に逢ひたいの一念昂ずると家を脫け出すんですね。よく腹も減らないことだが、二日でも三日でも、山の中を彷ひながら、通りかゝる男を捕へて、首實驗をするんですよ。わが愛しき人ではないか、と思つてね。何しろ。狂人になるほど想ひ詰めてゐるんだから、ひよツと、その若者に巡り會はうもんなら、可愛さあまつて、憎さ百倍の理に從つて、ほんとうに殺すかも知れない。身分違ひの勿體ない別嬪を、臺なしにしちまつた色男、殺される價値はあるね。あの狂女に想ひを寄せた青年どもは、大勢ゐるのに、惜しいことをしちやツたなんて言ふだけで、危くつて、手も出せないほど、殺氣を帶びてゐるから、莊平君の人相が、その若者に肖てゐなくて、仕合せでしたな。」

「あつはつはつ。」

坊つちやん莊平が笑つた。法師溫泉から赤澤山林道を越えることが出來れば、私に會ふ機會はなかつたんだが、林道通過不可能のため、大般若塚へ廻つたお蔭で、狂女の山刀に膽を冷したり、逃げた